

---

# リバース・シンデレラ

天そば

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

リバース・シンデレラ

### 【Zコード】

Z9558V

### 【作者名】

天そば

### 【あらすじ】

そう考えると、わたしはシンデレラとは真逆なのかもしれない。

公星高校野球部のマネージャーを務める川口柚香は、片想い中のキヤプテン、嶋良次と共に、数々の謎に遭遇する。野球好き少女のメールアドレスの由来、体育館からグラウンドに向かう途中で忽然と姿を消した同級生、昼と夜で眼鏡が変わる保健医、そして、川口自身の抱える「誰にも言えない秘密」。

一人の推理が冴え渡る、短編連作形式のラブコメ風ミステリー。

1

覚悟はしていた。

けど、ござそうなると自分でも驚くぐらい落ち込んだ。

勝手な思い込みなのはわかつてること、あの人はわたしの希望の星だった。それを失うつていうのは……なんて言えばいいんだろう？ 口下手なわたしでは、うまく説明できない。でも、食べ物を口にしてもすぐに戻してしまい、夜はあんまり眠れなくなつた。なにもかもに気力が湧かなくなつて、もう高校なんて行かなくていいかな、とすら思った。

そんなわたしに、救いの手は思わずこちらから伸ばされた。一番近くにいるはずなのに、一番遠くに感じるの人から。その人の目は真剣だった。冷静に考えたら冗談かと思うことを、心の底から真面目に提案してきた。

その案、乗つてやるうじやないか。

どうせ一度は賭けに失敗した身だ。わたしは、目の前に差し伸べられた手を取つた。

これから二年間が、茨の道になることを知つて。

2

入試の手ごたえは充分だった。落ちてるかもしれないなんてこれっぽっちも思つてなく、むしろ、点を取りすぎて新入生代表の挨拶なんてものを任されたら面倒だと、わざと何問か間違えたほどだ。だから、体育館前の掲示板に張り出された合格者一覧の中に自分の番号を発見しても、とくになんの感情も湧かなかつた。ああやつぱり、とそれだけ思つて、素早く辺りを見回した。自分の合否判定より、彼がどうなつたかのほうが気になる。

もし、彼が落ちていたら……。そんなことを思つと、不安でたまらない。なんのために通学に一時間近くかかるこの高校を受けたのかわからなくなつてしまつ。

わたしは早足に掲示板から離れた。押し寄せる人波の中では、数メール先の人すらよく見えない。少し離れたところから探したほうが良さそうだった。

人の少ないところに移動して、掲示板の辺りに彼がいか目を凝らす。入試の日に見た彼の後ろ姿はいまでもはっきり目に焼きついている。視界の隅にでも入れば、すぐにわかる自信はあつた。それなのに、一向に見つからない。もしかしたら、混雑する時間を避けて、少し人が減つたときに見に来るつもりなのかもしれない。

ケータイを開くと、妹から、「どうだつた?」とメールが来ていたけど、いまは返信できる状況じやない。風ではためくスカートを押さえながら、彼が来るのをじつと待ち続ける。

けっきょく、彼が現れたのは、掲示板前の人口密度がピーク時より半分ほどになつたころだつた。同じ中学の人もたくさんいるはずなのに、一人で来るのがの人らしいな。話したこともないくせに、わたしはそんなことを思った。

彼が掲示板前で立ち止まるのを見て、わたしも足を進める。ぎりぎり怪しまれない距離まで近づいて、番号を探す彼の様子を横目で伺う。上下に忙しく動いていた彼の瞳がぴたりと一点で止まつた。次いで、ずっと険しかつた表情が柔らかくなる。口許には、安心したかのような笑み。

ああ、合格したんだな。うれしそうに笑う彼を見て、わたしも、肩に入つていた力がバスタブの栓を抜いたように消えていった。

掲示板に張り出された自分の番号を写真に映すこともなく、彼は合否だけ確認するとすぐに離れていった。どこに行くのかな、と思っていると、さつきわたしがいたところの近くに、彼と同じ中学の人たちが集まつていた。さりげなくその前を通つてみると、

「受かったよ」

と、うれしそうに報告する彼の声が耳に入つてきた。

よかつたね、嶋くん。

心の中でそう呟いて、わたしは校門へ向かつた。その途中、色んな部活が勧誘チラシを配つていたけど、すでに入る部を決めているわたしは、「本命」のチラシだけを受け取つた。人波に紛れて校門を抜けながら、貰つたチラシを見る。

『キミも公星野球部に入つて、一緒に甲子園を目指そー!』

中心にでかでかと書かれた言葉を見て、わたしは笑いをこらえた。シンプルイズベストって言つけど、これはちょっとシンプルすぎない?

自分が籍を置くことになる部のセンスがちょっと心配になつた。そしてふいに、本当に四月からこの高校に通つんだな、と実感する。わたしは来た道を振り返つて、最後にもう一度校舎を視界に収めた。

公立公星高校。ここいら辺の公立校の中では、野球部の実力はトップクラスだ。

嶋くんは高校でも野球を続ける。だからわたしも、マネージャーとして野球部に入る。

ずっとずっと憧れていた彼は、どんな人なんだろう。いままでは夢の中でしか会えなかつた嶋くんと、これからは対等に話ができるのだ。

四月から始まる高校生活を思つと、胸が躍つた。だけどそれと同時に、不安が頭をよぎる。

本当に、三年間も騙し続けることができるんだろうか?

わたしが高校生活でなんとしても隠し通さないといけない秘密を思つと、高揚した心に少し影が差すのがわかつた。

「平野お、いまの送球だと、足の速いバッターは内野安打だぞ！」

ノックバットを持つ野村先生が、蝉の鳴き声を打ち消すほどの大声でショートを守る平野くんを怒鳴りつけた。

公星高校のグラウンドでは、今日も野球部が朝練を行っている。選手たちは七時半から練習を開始し、顧問の野村先生も八時にはグラウンドに出て、数分前からはノックバットを握っている。七月九日月曜日、夏真っ盛りなだけあって、太陽がしつかり輝く中での朝練だ。

そして、グラウンドに立っているのはなにも彼らだけではない。先輩たちが引退した先週から新たなマネージャー長に任命されたわたし、川口柚香も、太陽に焼かれながら健気に練習のサポートをしている。

個人練習がメインの朝練では、マネージャーは強制参加ではない。だけど、締めに行われるノックでは先生にボールを手渡すマネージャーがいたほうがいいから、できるだけ毎日朝練に参加している。こんなわたしつてマネージャーの鏡だと思つ。

「それじゃあラスト、嶋いくぞ。捕れたら終わりだ」「はいっ！ お願いします！」

キャッチャーの嶋良次くんが返事をして、ミットを叩く。男の子

にしては少し高めだけど、気合の入った声は凜々しく、わたしは思わず聞き惚れてしまった。

嶋くんがホームベースの後ろに屈むのを見て、野村先生はフライを打ち上げた。

「キャッチ、後ろ後ろ！」

野手たちがボールの上がった方向を教える。嶋くんはマスクを外しながら後ろを振り返り、右後方に上がった打球を追いかける。だけど、ボールを見つけるのが少し遅れたせいか、タイミングはかなりぎりぎりだ。

だめだ、捕れない。わたしがそう思つたとき、嶋くんが地面を蹴り、足からボールに突つ込んでいった。足につけた防具と地面がぶつかり合い、ががが、と派手な音をたてる。スライディングキャッチを試みたんだ。

わたしの角度からは捕れたのかどうか見えなかつたけど、立ち上がつた嶋くんのミットにはしっかりとボールが納まつっていた。

「ナイスキャッチ、キャプテン！」  
「さすが嶋先輩っす！」

守備についていた部員たちが歓声をあげて、一齊に嶋くんのもとに駆け寄つてくる。わたしは立つたまま、黙つてそれを見ていた。あまりのことに、口に手を当てたまま動けなかつたから。

嶋くん、今日もなんてステキなの！

\*

ノックのあとは、軽いランニングとストレッチ、グラウンド整備と続いた。わたしはマネージャーなので、選手に混じってトンボを持つようなことはせず、グラウンド脇の水道で練習で使用したボトルとキー・パーを洗っていた。だけど、スポンジを泡立てながらも、視線はつい、嶋くんを追つてしまつ。

高校球児らしい坊主頭と、大きな背丈。キャッチャーにしては少し細いけど、筋肉はしっかりついた腕と脚。それらとは不釣合いかもしれないけど、どこか優しさを感じさせるつぶらな瞳。そして、常に周りを見ながら指示を出すリーダーシップ。

ああ、もう、見れば見るほど惚れる。わたしが朝練に参加しているのは、野球部のサポートがしたいから というのは建前で、単に嶋くんに会いたいからだ。そのためなら、早起きも辛くないどころか楽しみすぎて勝手に目が覚めてしまつ。中学のときの一目惚れした彼は、同じ高校、同じ部になつて一年以上たつても、わたしの心を掴んで離さない。

そんなことを考えながら洗つていたせいだろ。もうグラウンド整備は終わつたようで、選手たちがトンボを片付けて次々とこつちへ向かつて来る。洗い物を手伝つため……ではない。部室へ行くには、わたしのいる水道付近を通らないといけないのだ。

「おつかれーっす」

横を通り過ぎる部員が挨拶をしていく。そのたびにわたしはそのない作り笑顔で、

「お疲れ様」

と返す。それを見た野郎どもはもれなく顔を赤くしたり、にやけたりする。まあ、無理もないことよね。

すらりと高い身長に、それを強調するようなスレンダーな体型。胸まで伸びたつやのある黒髪と、大きな目。それを縁取る長いまつげと形のいい眉。それらの上品なパーツの中でも一際目立つ、左の泣きぼくろ。わたしのよつよつとしたパーソナリティを微笑みかけられて、よろこばない男などいないのだ。

もう、けつこうな数の部員が通り過ぎた。嶋くんも、もうすぐここを通過るはず。

コップのふちをこすりながらそんなことを考えていたら、た、た、た、と足音が迫ってきた。まさか、嶋くん？ 振り向くこともできず、わたしはますます必死にコップのふちをこする。

「おー、川口。今日も大変だなあ」

つてお前かい！

そう言いたいのをこらえて振り返ると、そこには予想通り、ちんちくりんの童顔男がいた。

「選手のみんなほじじゃないわ。藤井くんも、お疲れ様」

我ながら、そつのない素晴らしいコメントだ。だけどそれを聞いたアホンダラこと藤井一樹は、にんまりと氣味の悪い笑みを浮かべた。

「お前さあ、いい加減それやめろって。おれはとつぶくに気がついてんだぜ？」

「なんのこと？」

不思議そうな顔を作りながら、心中で舌打撃する。ここつと話をしてイラつかなかつたためしがない。これから言ひつゝともだいたい想像がつく。

「だーかーら、そーやつて猫被るのだよ。クラスのやつらにもそつやつてつけど、お前ほんとは、もつと口悪くて好き嫌いはつきりしてるだろ?」

ほりあた。案の定。適当に流れ。

「そんなことないわよ」

「えー、しらばっくれてんじやねーよ」

「とにかく藤井くん。早くしないと購買のパン売り切れるんじやない?」

わたしが腕時計を見せると、藤井は、あ、と大きな声をだした。

「そうだ、今日はクリームメロンパンがある日なのにつ。じゃあな川口、また教室で!」

一田散に走り去つていぐ。じつは一度と会いたくないわ。

どうか購買のクリームメロンパンが売り切れていますよ」と祈りながら蛇口をひねる。そのとき、

「川口」

声をかけられた。心臓が口から飛び出しそうになる。そうだ、藤井のせいで頭から飛んだけど、彼はまだここを通つていなかつたのだ。必死に呼吸を落ち着けて、振り返る。

「嶋くん。お疲れ様」

「ああ、お疲れ。ありがとう、いつもいつも」

いいのよ、と返す声が少し震えていて、気づかれていないだろつかと不安になる。こんな不意打ちみたいな形で話しかけられると、心の準備が追いつかない。

「嶋くんたちみたいに、朝からグラウンドを走り回ってるわけじゃないから。せんせん楽よ」

「そんなの関係ないよ。朝早くの練習に来るだけで大変なんだから。毎日ありがとな」

言いながら、嶋くんは少し笑った。

し、嶋くんが、わたしに向かって笑ってくれた！ 突然の笑顔攻撃に意識が遠のきそうになる。

嶋くんはわたしの足元にあるキーパーを指差して、

「これ、もう洗ったの？」

わたしは硬直した顔をなんとか縦に動かした。

「そつか。じゃあ、持つて行くな」

ひょいと片手でキーパーを持ち上げ、そのまま部室のほうに歩いて行く。嶋くんが視界から消えると、やつとつれしさがこみ上げてきて、わたしは小さくガツツポーズをした。

「そしたら嶋くん、わざわざキーパーを部室まで持つて行ってくれてね！ すっごい感激して」

学生たちの憩いの時間、昼休み。わたしは、騒がしい教室の中で机に向かい合わせて一緒にお弁当を食べる大原あかりに、今朝のことを話していた。

「しかもわたしに向かってちょっと笑ってくれて、もう、それだけでぐらぐらになっちゃって！」

「そっかあー」

あかりは玉子焼きを飲み込んで、

「ユズ、今日は朝から幸せだったんだね

「そう！ 幸せだったの！」

サンディッチを頬張りながら、何度も頷く。あかりは、よかつたね、と言つようにこり微笑んだ。

あかりは嶋くんと同じ中学の出身で、わたし同様、野球部のマネージャーだ。愛嬌のある顔立ちとふんわりした雰囲気を併せ持つていて、いつもにこにこ笑つて人の話を聞いてくれる。

早朝授業があるから朝練には来られないけど、真面目にマネージャー業務をこなしている。ただ、あかりは純粹に野球が好きで、わたくしと違つて変な下心なしに野球部のマネージャーになった。嶋くんがいなかつたら野球部になんて見向きもしない、それどころかこの高校にすら入つてなかつたであるうわたしからすれば、本当に、尊敬に値する人だ。

それに加えて、高校で初めてできた友だちとこうのもあつて、わ

たしあかりのことがかなり好きだし、頼りにしている。こうして嶋くんのことを話せて、なおかつ素を見せられるのはあかり以外にいない。

「今日は部活ないから、朝練でちょっとでも話せるといいなと思つてたんだけど、まさかこんなことがあるなんて」

「やつたじやん。あとでお礼のメールとかしてみたら?」

「メール?」

予想外の言葉に目を丸くする。あかりは鮭をしつかり飲み込んでから口を開いた。

「うん。今朝はありがとう、助かったよ、みたいなメール。あんまり長文じゃなくても、送らないのと送るのどじやぜんぜん違つんじやない?」

「やつか、そうよね」

優しくされたあとのお礼メール。感謝の気持ちも伝えられるし、うまくすれば雑談にもちこめるかもしない。恋愛において、お礼メールは基本中の基本じゃないか。わたしとしたことが、浮かれすぎて忘れていた。

よし、そうと決まれば。

「いま送る!」

残ったサンドイッチを一気に飲み込み、スカートからケータイを取り出して、新規メールを作成する。宛先に嶋くんを入力し、いざ、本文入力。

『今朝はわざわざキー・パーを運んでくれて、どうもありがとう』

「ひとりでキー・パーもコップも運ぶのは大変だつたから、すゞく助かりました（^ - ^）』

「うん。シンプルで、ちゃんとお礼も言えている。でも、これだけだとちょっと寂しいな。もう一言、なんか付け加えたい。」

なにがいいかなと考えて、パツと浮かんだのは、「次も手伝ってくれたらうれしいな」だった。これでもし嶋くんが毎回手伝ってくれるようになつたら、会話する時間もできて「一石二鳥だ。だけど、月曜日から金曜日まで、週五日ある朝練のうち、わたしが来られるのは月、水、金曜日だけ。……まあ、五回中三回、半分以上と考えれば悪くないか。」

『今朝はわざわざキー・パーを運んでくれて、どうもありがとうございます（^ - ^）ひとりでキー・パーもコップも運ぶのは大変だつたから、すゞく助かりました（^ - ^）』これからも手伝ってくれるとうれしいな（笑）』

打ち終わったメールを読んで、うんうん頷く。けつこうといじやん。わたしは見た目だけでなく、メール美人でもあるな。

「どう？ できた？」

空になつたお弁当箱を包みながら、あかりが興味津々に訊いてくる。わたしは得意げにケータイを渡す。

「うわ、けつこう大胆だね」

「せつかくだから、これぐらいやるうと思つて。わたしが業務連絡以外で嶋くんにメール送らないの知つてるでしょ？」

「ああ、そつか。ユズつて意外と奥手だもんね」

「じつくり派と言つてよね。それに、どの道いま告白するつもりは

ないし」

野球部では部活内恋愛は禁止されている。わたしの言葉を聞いたあかりはにやっと笑った。

「じゃあ、部活引退したあとにはあるつもりなんだ、告白」「つりん。高校のつちはしないわ。するなら卒業してから」「え、なんで?」「どうせ嶋くん、引退してもずっと自主トレにするに決まってるもの。そんなときに告白なんかすると困るからねうだし」

嶋くんは高校を卒業しても野球を続けるつもりらしい。就職か進学かはわからないけど、受けるなら野球推薦でだらうから、自主トレは欠かさないはずだ。

あかりは意外そうな顔でまじまじとわたしを見る。ユズはもつとガツガツしてるとと思つてた、とその瞳が語つていた。

まあね、本音を言えば、そんな面倒なこと考えずにアタックしていくたいけど、高校のつちはできない。約束は守ると決めたのだ。今回のメールぐらいなら、まあ大丈夫だろうけど。わたしは小さく咳払いして、ケータイと向き合つた。

「どうあえず、メール送るわ」

もう一回メールを読み直してから送信ボタンに親指を置き、ゆつくつゆつくつと力を込めて、ボタンを……

「…………押せないッ！」

初めて嶋くんに個人的なメールを送る。しかも、これからも手伝

つてくれるとうれしいな、なんてちょっと大胆なことも書いてある。メールを打つたときはそうでもないけど、いざ送信となると、無性に恥ずかしくなつてきた。親指に力が入らなくて、ボタンが押せない。

「あかり、こりこりときつてどうすればいい？」

「そんなこと言われても……」

苦笑い。くそ、それが悩んでいる友人への態度か！

「でも、コズつてこりこりこと慣れてると思つてた。中学のとき、彼氏いなかつたの？」

「わたしにつりあう人なんていなかつたから、告白されてもぜんぶ断つてたのよ」

「そ、そりなんだ……」

「そり。とりあえずいまの問題は、このメールよ」

深呼吸を一つ。再びケータイを睨みつける。

だけどいつまでたつても送信ボタンは押せず、わたしとケータイのにらめつには均衡状態が続き、指先は徐々に汗をかいてきた。昼休みはあと三十分。一通のメールを送るには充分すぎる時間のはずなのに、いまのわたしにはとても短く感じる。さあ、送信ボタンを押せ。押すんだ。…………やっぱり、あと三秒たつたら押そう。いち、にの、さんで押そう。よしいくぞ、セーの。

「ち、この……、

「うわああああああああああ！」

「ええつ？」

突然、後ろのほうから悲鳴が上がった。びっくりして身体を震わ

「おれは、おれはなんてことをしてしまったんだああ……」

なんだ藤井か。じゃあいーや。

「ねえ、コズ」

「ん?」

あかりが目を見開いて、わたしのケータイを指差している。

「いま、送信ボタン押さなかつた?」

「つむー!」

慌ててディスプレイを見る。するとモニタ、「送信完了しました」と表示されていた。

藤井の悲鳴に驚いた瞬間を思いだす。あのとき、驚いた拍子にボタンを押してたんだ!

「や、やつた! あかり、わたしゃつたわ!」

「おめでとう!」

あかりとハイタッチを交わし、熱く手を握り合つ。よかつた。なんだかんだで、かなり不安だったのだ。すじくほつとした。

ひとしきり喜びをわかちあって一息ついたころ、あかりが言った。

「コズ、藤井君にもお礼言ひたいつむ

「そうね」

「おおう、あこつのおかげで送信できたんだし、お礼は言つてお

かなくちゃ。

藤井は自分の席に座つて頭を抱え、うつむいていた。こいつが急に変な声を出すのはわりといつものことだけど、こつしてあからさまに落ち込んでいるのはあまりない。ただ、どうせまたくだらないことだらうと決め込んでいるのか、周りの人は誰も話しかけていなければ。

「藤井君」

あかりがまず声をかける。わたしたちを見上げてきた藤井の顔には、悲壮感が漂っていた。う、と息がつまりながらも、わたしはあかりよりも一步前に出て、藤井に頭を下げる。

「あの、藤井くん、ありがとうね

「なにが？」

「まだかつて聞いたことのないほど低い声だ。

「藤井くんのおかげで、なかなか送れなかつたメールを送信できたの」

だから、ありがとう。そう続けようとしたらい

「うわあああ、メール！」

急にそう叫び、また頭を抱えてうつむいた。わたしとあかりは目を合わせ、お互いちょっと首を傾げる。こいつはいったいどうしたんだ。今日は普段より輪をかけておかしい。あかりは藤井の肩をたたき、振り向かせた。

「藤井君、メールがどうかした?」

すると藤井は、幽靈のようにねつとりした動きでポケットからケータイを取りだした。それを見たあかりが、あれ、と声をあげる。

「ケータイ変えた?」

「いや。これ、代用機」

そうなんだ。わたしはこいつのケータイを注意して見たことなんてないから、変わってるのにまったく気がつかなかつた。言われてみれば、このあいだまで赤いケータイを持つてたような気がするけど、いま目の前にあるケータイは黒だ。わたしは代用機を指差して尋ねる。

「それで、そのケータイになにがあつたの?」

「くりと小さく頷いて、

「ケータイって、機種によつてけつこう操作が変わるだろ? 前のケータイだと顔文字のボタンは右上だったのに、新しいのだと左上になつてた、みたいな」

「そうね。覚えはあるわ」

妹のケータイでメールを打つとき、送信ボタンの位置がわたしのものと違つてとまどつたことがある。

「おれが使つてたケータイと、この代用機もけつこう違うんだ。おれのケータイだと『メール保護』のボタンだったところが、代用機だと『メール削除』になつてんだよ」

喋りながら、だんだん藤井の声が震えていく。

あー、なるほど。なにがあつたか、なんとなくわかつてきた。

「つまり藤井くんは、保護しようとしたメールを間違えて削除してしまったのね？」

「うわあああああああああ。

再び藤井は悲鳴をあげ、頭を抱えてしまった。

わたしは基本的にあまりメールをしない人間だけど、藤井のこの落ち込みようと、わざわざ保護しようとしたということを考えれば、どういった人からのメールなのか想像はつく。

わたしとあかりは目を合わせ、お互いくぐりと頷いた。

「元気だして、藤井くん。間違えて削除しちゃつたなら、相手に素直に言つて、送り直してもらえばいいのよ」

「そうだよ。代用機の操作に慣れなくて、つて説明すれば、相手もわかってくれるし、あんがい、共感してくれるかもよ？」

「そうよね。代用機のあるあるネタで盛り上がるわよ

「あー、いいネタだね。代用機あるある」

着つたが一昔前のしか入つてなかつたりねー。あははわかるわかるー。

わたしとあかりが普段よりもテンション三割り増しで会話を繰り広げる中、藤井がぼそつと呟いた。

「……くれないんだ」

「え、なに？」

「送れないんだ、メール」

どうして、とわたしが訊く前に、藤井は続けた。

「おれが削除したメール、メアド変更メールだつたか?」

\*

メアド変更メール。

読んで字の「とく、メールアドレスを変更したときに送るメールのこと。 高校の××です。メアド変更したので、登録お願いします！ みたいなやつだ。 そのメールを削除してしまった。とにかくとまつ。

「おれ、もう<sup>たかはし</sup>高橋さん<sup>たかはし</sup>にメール送れねえよ。どうじょい……」

藤井の声は重く、激しい落ち込みようが伝わってくる。わたしとあかりはどう言葉をかけばいいかわからず、黙つて立つ立つている。

高橋さん<sup>たかはし</sup>といつのが誰かは知らないけど、この落ち込みようからして、藤井の好きな人と考えていいと思つ。ここにどうこう話はしたことなかつたけど、ちゃつかりいたらしご。なんとか言葉を絞りだし、藤井に話しかける。

「でも、メアド消しちゃつたからつて、それで終わりじゃないわ。 その高橋さんに直接会つて、改めて教えてもらつともできる」

「無理だよ。高橋さん、香川の人だから」

「香川？」

思わず声が出てしまつた。香川なんて、飛行機で行く場所だ。

「藤井くん、その高橋さんとはどうで出会ったの？ 香川なんて、遠征でも行ったことないでしょ」

「向こうが来たんだよ。去年の夏に東京ドームに野球観に行つたとき知り合ったんだ」

東京ドームで野球か。あかりも相当な野球好きで、わたしも一度、巨人対横浜戦に付き合わされたことがあるけど、藤井もそうだったとは知らなかつた。

「席が隣で、おれも高橋さんも一人だつたし同じ年だつたから、話していくうちに仲良くなつて、メアド交換したんだよ。それでいま、オールスターのチケットが取れたから一緒に行こうってメールしようとしたときに、知らないアドレスのメールが来て、誰だと思ったら、高橋さんからで。まず保護しようとしたら……」

「つかり削除してしまつた、と。

行き場のない思いを発散するように、ケータイをがつがつ頭にぶつける藤井。わたしはその姿に同情を覚えながら、藤井がこうなるのも無理はないと思つた。そんな出会いだったら共通の友人なんていないだろうから、誰かに高橋さんのメアドを訊き直すこともできない。

どうしたものかと考えていると、あかりが藤井のケータイを指差して、

「高橋さんから、一斉送信のメール來たことある？ あけおめメールとか

「來たけど……」

「それにさ、藤井君以外にメール送つた人のアドレスが載つてないかな？」

なるほど、と膝を打ちたくなる。

一斉送信のメールには、同じメールを送った人全員のアドレスが載っている。その中の誰かにメールを送れば、高橋さんの新しいメアドを訊くことができるはずだ。

わたしは自分が早口になつていてのを自覚しながら、藤井に話しかける。

「そうよ、藤井くん。いまから誰かにメール送つてみたら?」

「そうだな。やつてみる!」

せつときまでのどんよりした動きから一変、藤井は興奮したようにケータイを操作し始めた。表情も少し明るくなつていて、だけど、その明るさはすぐに影を潜めた。

「駄目だ……。メールはあつたけど、他のアドレスが載つてない」「フィルターかけられてたつてこと?」

あかりの問いに、藤井が頷く。

ああ、そうだ。いまは、一斉送信しても他の人のアドレスを見られなくなる機能があるんだつた。高橋さんもそれを使つているんだろう。

「わざわざフィルターなんてかけなくていいのに……」

あかりが眉間にしわを寄せて呟く。必死に他の方法を考えているんだろうけど、思いつかないのだ。

どうしよう、藤井にどんな言葉をかけたらいだろ。もしわたしが同じ立場で、嶋くんのメアドを消してしまつ、なんてことがあつたら立ち直れないかもしない。向こうからまた連絡をくれる根拠なんてないし。

ああでもなこいつでもないとわたしが頭を働かせていろと、

「やつだ！」

ふさぎこでいた藤井が、急に声をあげた。机に手を突っ込んでノートを取り出し、白紙のページを破ると、シャーペンでなにか書き込んでいく。わたしとあかりがぽかんとする中、藤井は得意げな顔でわたしたちに紙を見せた。

そこには、『LUV - oo - > .』と、意味不明の文字があった。

「藤井くん、これはなにかしら？」

「ちらりと見た高橋さんの新しいメアドを、思いだせる範囲で書いたんだ。あと真ん中の辺りに、『rest - e』っていうのもあったな」

さつき書いた『LUV - oo - > .』の下に、『rest - e』とつけくわえる。そのあと、藤井はおもむろに、わたしたちに頭を下げた。

「頼むー。この続きを、一緒に考えてくれ  
「え？」

予想外の言葉に、つい間抜けな声がでてしまった。

高橋さんのメアドの続きを考える？ それって、かなり厳しくない？ 力になりたいではあるけど、わたしは高橋さんのことによく知ってるわけでもない。あかりも同じことを思つたのだろう、ちょっと眉を寄せて、困つたような顔をしていた。

そんなわたしたちにかまわず、藤井はケータイを見ながら、紙にまたなか書き込んでいる。

「ヒントもあるんだ。これ、高橋さんのこれまでのメアド」

わざと書きこたメアドの下に、

メアド?『1uv - a > - ^ . bon s a i k y o 1 \_ 3 \_ @『1uv - a > - ^ . v d n k \_ 001p e n 1 - 6 @』

と書き加えられていた。

「メアド?はおれが最初に教えてもらひたメアド。で、高橋さんは今年の一月にメアド?に変更したんだ」

「『』のメアド、一いつとも似てるね」

あかりがそつまづつと、藤井は満足そつまづつの表情を浮かべた。

「高橋さん、自分なりの法則を決めてメアドを作つてゐつて言つた。だから、それがどんな法則なのか突き止められれば、新しいメアドがわかるかもしね」

やうこいつことか。なら納得だ。でも一つだけ、気になることがある。

「ねえ、藤井くん。なんで古こぼつのアドレスも残してあるの?新しいメアドを登録したら、普通消さない?」

「ああ、なんとなく、昔のメアドも記念に残しておいたと思つて」

「そ、そつなんだ」

いつたいなんの記念なんだつ。わたしがそつ思つたのが伝わつたらしく、弁解するよつに話をす。

「高橋さんに初めて会った日が、メアド教えてって言つたら、今夜変える予定だから待つてって言われたんだよ。おれのメアドを高橋さんのケータイに登録しといて、夜に新しいメアドに変えたらメールするつて。おれ、正直、体よく断られたと思つてたから、夜ホントにメール来たときめちゃくちゃ嬉しくてさ。それでなんとなく記念について

「思い出のメールアドレスつてことだね」

あかりの発言に、へへへ、と照れたように笑う藤井。こいつ、意外と恋愛には素直なのかもしれない。

藤井は真剣な表情に戻り、もつ一度わたしたちに訊いてきた。

「それで、川口、大原。手伝ってくれるか？」

最初は無理だと思つたけど、高橋さんのメアドは、どんな法則があるのかパツと見でわかるものもいくつもある。これなら、とりあえず考えてみる価値はあるかもしれない。わたしとあかりは田を合わせ、こくりと頷いた。

「そうね。やつてみましょう」「う

「力を合わせれば、なんとかなるかもしないもんね」

「よつしゃ！ サンキュー、二人とも。じゃあせつねく、考えようぜ」

藤井がガツツポーズで宣言し、わたしとあかりが頬を緩めかけたとき、

「あれ、みんな集まつてどうかしたのか？」

後ろから声が聞こえてきた。

心臓が動くのをやめて、息が止まる。

そういうえば、今朝も似たようなことがあった。不意打ちは彼の趣味なんじゃないかとすら思つ。

「なにかいいことでもあった?」

早足でわたしたちに駆け寄ってきたのは、他の誰でもない、鳴くんだつた。

3

「そつか、メアドか……」

事情の説明を受けた嶋くんが、二ぐんぐと何度も頷く。

わたしたちは手近な空席から椅子を拝借し、藤井の席をぐるりと囲んで座っていた。藤井から見て正面にわたし、右手にあかり、左手に嶋くんだ。藤井の席は端っこなので、壁と机に挟まれる嶋くんがちょっと狭そうだった。

「それで、嶋君はどうしたの？ なにか私たちに連絡？」

あかりが尋ねる。わたしはびきまきしながら返答を待つた。わたくからのメールを見てなにか言いにきたのかな、なんて考えが頭をよぎる。

だけど嶋くんはあつさりこいつ答えた。

「数学の教科書忘れたから、一樹に借りに来たんだ」

肩の力が抜けた。なんだ、わたしに用があるわけじゃなかつたんだ。つてことはたぶん、メールはまだ読んでないんだろうな。嶋くん、そんなにケータイ見る人じやなさそうだし。

脱力するわたしの横で、嶋くんは藤井に話しかけた。

「高橋さんって、去年東京ドームで知り合つた人だよな？」

「そう、その高橋さん。写メ見る？」

藤井がケータイを机に置く。そこには、巨人の「四番のユニークオーム」を来て、オレンジのタオルを持った女の子がカメラに向かって笑っていた。

セミロングの黒髪は毛先がカールしていて、大人っぽさを演出している。それに輪をかけるように唇の左下に濃いほくろが一つ。座っているから身長はよくわからないけど、細身であることは見て取れる。同じ年だと言っていたけど、大学生と言われても充分通じそうだ。つまり高橋さん、一言で言えば

「美人だね」

そう、あかりの言うとおり、美人に分類してもいい顔立ちなのだ。わたしほどではないけど。

「確かに」

し、嶋くん？ そんな、しれっと同意しないでよ。ほら、もっと美人が目の前にいるじゃない、ほらほら！

「どうう？」

藤井、なに得意げな顔をしていやがる。べつにお前の彼女でもなんでもないだろうが！

「な、川口もそう思うだろ？」

「ええ。今まで見た中で一番美人だわ」

嘘つけ、という視線を向けてくるあかり。ふふん、いいのよ。嶋

くんの前では謙虚で控えめな女の子でいるんだから。

高橋さんが美人と認められて相当嬉しかったのか、藤井は機嫌良  
々そうに笑いながら嶋くんに頼む。

「良次。よかつたら、考えるの手伝ってくれないか?」

「もちろん」

即答。昼休みはグラウンドでバットを振るのが田課のはずなのに。  
友だち想いの嶋くん、なんてステキなんだろう。身も心も本当にイ  
ケメンだ。

「じゃあちょっと、共通点を整理してみよう」

机の上に転がっていたシャーペンを取ると、嶋くんは三つのアド  
レスの『ユロバ・部』をマルで囲んだ。

「高橋さんのメアドは、どれも最初はこれで始まっている」

わたしとあかり、藤井が頷く。ただ、後ろの絵文字はいいとして、  
『ユロバ・部』はいつたいどういう意味なんだろう。わたしがそう  
言つと、藤井はすぐに答えた。

「ラブ・ジャイアンツだよ。高橋さん、大の巨人ファンなんだ」

「巨人があ……」

横浜ファンのあかりが残念そうに肩を落とす。

「相当好きらしいぜ。なんでも、私服のシャツより巨人のレプリカ  
ユニフォームの方が多いつて」

「ええ、なにそれ。そんなにヨーフォーム買つてどうするの、わたしは思ったけど、藤井は、そういうのが可愛いんだよな、とこやけている。人の好みも色々だ。」

「「」の絵文字にも、なにか「」だわりがあるのかしら？ 藤井くんとメールするときとか、よく使う？」

「どうだろ？ おれとメールするとき、基本デコメなんだよな。……あ、でもその絵文字、高橋さんのトレーデマークだつて言つてた」

「せ」

トレーデマークねえ。「」の絵文字、なんの変哲もない普通の顔だけど。気に入つてゐるつてことでいいのかな。

「「」の絵文字だナビ」

「つまつこてはこれ以上なにもないと判断したのか、嶋くんが次の話に移る。

「昔のメアドは、どうちも最後は数字で終わつてるな

メアド？ の『1—3』と、メアド？ の『1—6』を三角で囲む。

「つてことは、たぶん、新しいメアドも最後は数字で終わるつてことだよね？ でもこの数字、こつたにどうせつて選んでるのかな」

あかりが首をひねる。確かに両者には、数字といつ以外になんの共通点も見出せない。メアド？ の『1—3』は数字の「1」と「3」だと思つただけど、メアド？ の『1—6』とは桁も違つ。

「これはあれだよ。巨人の背番号

「背番号へ。」

ああでもないこいつでもないと頭を悩ませていたわたしは、思わず藤井に聞き返してしまった。

「ああ。巨人の永久欠番の背番号」

あ、とあかりが声をあげる。

「王貞治と長嶋茂雄に、川上哲治だね！」

「なるほど。巨人ファンらしいな」

嶋くんまでわかつたような顔をしている。あれ？ 話についていけないのわたしだけ？

「ちょ、ちょっと待つて。つまり、『1』の番号、1と11と16は、ぜんぶ永久欠番つてことでいいの？」

「そうだよ。『1』が王貞治、『3』が長嶋茂雄で、『16』が川上哲治。先週一緒に東京ドーム行つたとき説明したじゃん」

「え？ いや、あの。……」めん、忘れてた

忘れないでよー、とあかりが頬を膨らませる。正確には忘れてたんじやなくて聞いてすらいないんだけど、それはまあいいや。むくれるあかりから田をそらし、藤井に尋ねる。

「じゃあ、新しいメアドも最後は永久欠番の数字が入るはずって考えていいのよね？」

「たぶんな。他に残つた永久欠番は、四番の黒沢俊夫、十四番の沢村栄治、三十四番の金田正一だから、そのうちの誰かだな」

なにも見ずには残りの永久欠番の選手が出てくる。一人で東京ドームに行くだけあって、こいつも相当な巨人ファンなんだろう。

嶋くんが、余白部分に『4黒沢、14沢村、34金田』とメモし、小さく息を吐く。

「問題は、どの番号が入るかだよな」

「そうよね。一つだけじゃなくて一つ入る可能性もあるみたいだし」

最初のメアドの数字は『1\_3\_』で、王貞治と長嶋茂雄の二人組み。次のメアドでは川上哲治の『1\_6』だけ。どの番号が入るかも大事だけど、何個入るかも考えないといけない。

「私、王貞治と長嶋茂雄と一緒にしたのはなんかわかるなあ

メアドの紙を見ながら、あかりがポツリと言つた。すかさず、藤井が同意してくれる。

「ああ、おれもわかる! 」の一人は二コイチだもんな

「二コイチ? と、またわたしが話についていくてないのを察したあかりが説明を始める。

「王貞治と長嶋茂雄はね、現役時代、一人で三、四番を打つことが多かったんだよ。巨人が九年連続日本一になれた原動力はこの一人で、頭文字をとつて、『ON砲』とか『ON弾』とか呼ばれたりもしてた」

「へえ、そつなんだ。ぜんぜん知らなかつたわ」

とりあえず凄い人だつていうのは聞いてたけど、そんな二コイチみたいな感じだつたんだ。まあきっと、野球マニアの中じゃ有名な

んだろうな。

「俺も、王貞治と長嶋茂雄が一人で活躍したから、高橋さんのメアードでもセットになつてゐるんだと思う。で、大原。残つた永久欠番組でそういう人たちはいる?」

「うーん、どうだらう? 私、横浜ファンだから。それぞれの選手の基本的なことは知つてゐるけど、あんまり深くは知らないんだよね……。藤井君は?」

「おれも、名前は知つてんだけど詳しい活躍とかは微妙なんだよな」

ばつが悪そくに頭をかく。それを聞いて、あかりはケータイを取り出した。

「じゃあ、ちょっと調べてみるね」

真剣な顔で指を動かす。たぶん、ウイキペディアかなにかで調べているんだろう。

しばらくケータイをいじつたあと、あかりは、あ、と声をあげた。

「ね、ユズ。今日つて七月九日だよね?」

「そうだけど。それがどうかしたの?」

あかりが顔をあげる。瞳がきらきら輝いていた。

「うん。あのね、沢村栄治と黒沢俊夫の背番号が永久欠番になつたのは、一人同時だつたんだつて。しかもそれが球界初の永久欠番で、認定された日は、一九四七年の七月九日!」

一九四七年の七月九日? それってつまり、

「今日つてこと？」

「そう。これつて偶然なのかな？」

あかりが早口になつて意見を求めてくる。わたしたちの答えは揃つてノーダつた。

「いや。偶然にしては、なんかできずきてる気がするぜ」

「わたしも」

「俺もそつ思う。なあ、一樹。もしかして高橋さんつて……」

嶋くんは藤井を見て、言つた。

「永久欠番の選手と関係がある口に、その選手の背番号が入つたメアドに変えてるんじゃないか？」

場の空気が少し高揚したのが肌で感じられた。説得力のある仮説に、それだ！ と言つよつと藤井は何度も頷く。

「そりだよ！ おれが東京ドームで始めて高橋さんに会つたとき、今夜メアドを変える予定だつて言つてた。あれ、王貞治と長嶋茂雄に関係のある田だから、その田にメアドを変えるつて決めてたんだ！」

「藤井君、その口つて、何月何日だつた？」

あかりが訊くと、藤井は机の上に置いてあるケータイに手を伸ばし、素早く日付を調べた。

「六月二五日だ」

あかりはケータイに向き直り、一分足らずで顔を上げた。いつも

より早口で興奮気味に、わたしたちに話す。

「六月一五日は、王貞治と長嶋茂雄が初めてアベックホームラン  
いわゆる『ON弾』を打った日だつて！」

「それじゃあ、一月十八日は川上哲治に関係あるか？　この日にメ  
アド？に變えてあるんだけど」

あかりはまたケータイに視線を落とすと、しばらくしてから、満  
面の笑みで顔をあげた。

「その日は、川上哲治の背番号が永久欠番に認定された日だつて。  
嶋くんの考えたとおりだよ。高橋さんは、メアドに入る選手と関係  
のある日に、メアドを變えてるんだ！」

「つーことは、新しいメアドに入るのは、黒沢俊夫と沢村栄治の背  
番号『4—14』つてことか？」

「うん！　それで間違いないと思つ」

あかりが力強く親指を立てる。わたしたちは顔を見合させて笑つ  
た。

まずは、第一関門突破だ。

後ろに入る数字は『4—14』。それは確定した。だけど、本当に  
難しいのはこれからだ。

わたしたちは、メアド？とメアド？の顔文字と数字に挟まれたと

「ここに注目していた。メアド？は『b00ca1ckyo』、メアド？は『vdnk\_m01de』。まあ、これはどういふ意味だろう？比較的楽に共通点や意味を見出せる前半と後半に比べて、こっちは正直なんの見当もつかない。」

「メアド？は普通に読むと『ボンサイキョウ』になるけど、いつたいどういふ意味のかしら？ 高橋さんに盆栽の趣味があるとか？」「いや、そんな話は聞いたことねえし、仮にそうだとしても、そのあとで『キョウ』の意味がわからねえよ」

「メアド？は、後ろの『m01de』はこことして、『vdnk』がわからんないね」

「なにかの略なんだろうけど、ぱっと思いつくものがないんだよな。あまり聞いたことのない並びだし」

「はあー、と四人でため息をついてしまう。厳しい道のりだ。」

藤井は不満そうに下唇を突き出し、メアドの書かれた紙を見る。

「一瞬だけ見た高橋さんの新しいメアドは、この真ん中部分に『rst—e』って入つてたんだけどなあ」

「真ん中部分の中でも、絵文字寄りか数字寄り、どちらだったか思ひだせるか？」

「考えるように腕を組み、目を閉じる。」

「どつちだつたつけなあ……。ただ、絵文字のすぐ後ろでも、数字のすぐ前でもなかつたぜ。これは絶対だ」

「絵文字の直後でも、数字の直前でもない」と「rst—e」。区切りをするように小さい線が入つてゐるから、『rst』と『e』はべつの言葉なんだろうけど……。

四人とも、しばらく無言で頭を悩ませる。誰もなにも思い浮かばず、沈黙が何十秒か続いたあと、嶋くんがぱしんと手を打った。

「とにかくいまは、昔のメアドからひとつひとつ覚えていくのが。メアド? の『*boncua-hukyo*』は、川口の言つどおり、そのまま読むと『ボンサイキョウ』になるけど……」

『言にながら、余白部分に『ボンサイキョウ』と書く。

「これ、どこで区切ればいいのかな? ユズが言つたみたいに『ボンサイ・キョウ』なのか、『ボン・サイキョウ』なのか、いまいち微妙だよね」

「でもなあ。『ボンサイ・キョウ』でも、『ボン・サイキョウ』でも、意味がわからんねえよ。『ボンサイ』つつても、鉢に木い植える「盆栽」なのか、平凡な才能つて書いて「凡才」なのか」

『ボン・サイキョウ』でも、『ボン』がなんのことかわからんねえし、と続ける。

わたしも自分なりに考えてみたけど、藤井の言つとおり、どこで区切つてもいまいちしつくりこないのだ。『ボンサ・イキョウ』とか『ボンサイキ・ョウ』でも区切れるかもしれないと思つたけど、逆に混乱してしまった。

「ひひこつ風にどこで区切るかわからん」ときつて、普通、わかりやすいように途中でピリオドとかを入れないかしら?」

「あ、そうだね。私はそうするかも。嶋くんたちは?」

あかりの問いに、嶋くんは少し笑つて答えた。

「俺は、あんまりそういうのわからないんだ。メアドにこだわり

とかないし

ああ、そういうえば嶋くんのメアド、どう見ても初期設定のままだもんね。とりあえずローマ字と数字がずらりと並べられてるだけの。

「おれはあんま気にしねーかな

藤井が軽い口調で答えた。

「メアドって、自分の血口満で決めるみたいなところもあるから。友達とかに意味通じなくても、自分さえわかればいいーや、みたいな」

そつか。そういう考え方もあるのか。確かに藤井は、我が道突き進むみたいなところがある。たぶん高橋さんも同じ考え方で、だからわたくしたちはこんなに頭を悩ませているのだ。

わかりきつたことを再確認するような流れになってしまって、けつきよく話は進まなかつた。他になにがあるかと考えていると、嶋くんが顎に手を当てながら言つた。

「『』の真ん中部分も、なにか野球に絡めてあるとは思つんだ。例え

ば、後ろの永久欠番の選手と関係があるとか

「それって、メアド？では王貞治と長嶋茂雄ってことか？」

「そう

『ボンサイキョウ』が、王貞治と長嶋茂雄に関係がある？……

あ、もしかして！

「野球界を引退して、二人とも盆栽に田観めたんじゃない？」

「ないない

「うわ、三人一斉に首振ったよ。あかりと藤井はいいけど、嶋くんにまではつきり否定されてちょっとショック。」

「嶋君、この言葉がどう関わってるの？」

あかりに問われ、嶋くんは、それはわからない、と首を振った。そのあとで、メール？を指差す。

「ただ、これはわかる気がしないか？ 川上哲治君、『apple』」

あかりと藤井が、あ！と驚き、ほんとだ、そういうことか、と口々に感嘆の声をあげる。本田一慶田の、わたしだけわからない現象の発生である。まあべつにいいんですけどねー。

「あ、ごめん。ゴズは川上哲治知らないよね？」

あかりがいまさら、気遣うように言葉をかけてきた。

「うん。ぜんぜん知らない」

「でもけつこう有名だよ。聞いたことないかな？ ほら、ナントカの神様って言われてたって」

ナントカの神様？ そういうえば最近、テレビで聞いたことがあるな。

……そうだ、あれは確か！

「トイレの神様だ！」

あかりと藤井、嶋くんまでもが、一斉に噴きだした。藤井なんか、ひーひー言いながら机をバンバン叩いている。

「そんなに笑わないでよ……」

なんか、周りの人からもちらちら視線を感じる。こんな形で注目されるのは屈辱だ。

あかりが必死に笑いを抑えながら謝つてくる。

「『ごめん、ユズ。怒らないで。川上哲治の異名は「打撃の神様」だよ。その名の通り一流のバッターだったんだけど、監督としてもすごく優秀な人で、巨人の九年連続日本一のときは川上哲治が監督だつたんだよ。そのV九時代、つまり巨人の黄金時代を築いた人だから『golden』なんだろうって」

「あ、そっか。そういうことなのね」

「そうだよ。ベッピンさんになりたくてトイレをぴかぴかにしてる人じゃねーから」

それは植村花菜だろうが。

「もうその話はいいじゃない。とりあえず、メアドの真ん中も野球に関係のある言葉が来るってことで良いのかな?」

「他の意味がわからない以上、はつきりとは断定できないけど。とりあえず、そう考えておこう」

嶋くん、まだ言葉の節々が笑つてゐる。わたしは自分の顔が急激に熱を持つていくのがわかつた。他の一人ならまだしも、好きな人にこんなに笑われるなんて。

嶋くんは笑いを振り払うように、おほん、と咳払いをして、

「それから、いま気づいたんだけど、このメアド、どっちも一一文字なんだよ。これもなにがあるかもしないな」

「―――文字か……」

藤井がわたしに視線を向け、尋ねる。

「な、川口。メアドの規定文字数って、何文字だっけか」

表情は半笑い。……こいつ、また珍回答を期待してるな。わたしはイラつきを抑えて、平坦な声で答えた。

「ケータイの機種とか、会社によつて違つんじゃないから。それがどうかしたの？」

「たぶんだけど高橋さん、メアドは規定文字数いっぱいに設定すると思うんだよな。あるものはぜんぶ使わないと気がすまないつつてたし」

すかさず、私もだよ、とあかりが手をあげる。

「もつたいないよつな気がするんだよね、文字数に余裕があると」

「そつなんだ。わたしはぜんぜんそんことないけど、あんがい、あかりみたいな人は多いのかもしれない。藤井も頷き、

「高橋さんもそうだと想つ」

高橋さんのメアドは「―――文字。そのうち、九文字は『1uv-gg  
^—^』で、五文字は『rst-e』で、四文字は『4—14』で潰れる。つまり、

「新しいメアドを完成させること、あと、四文字いれればいいといふことね」

「アーティストになるな」

鳴ぐんばメアドのアート

メアド?『1234567890-』

4-14

と書いた。

「丸一つで小文字一つだ。で、一樹。『rest-e』せどの辺り  
あつた?」

「だいたい、この辺りだったかな」

言ながら、藤井がメアド?になにか書き加える。

メアド?『1234567890-』

4-14

すみつきカッ引の中のじかん、『rest-e』が入るところ  
とだらり。

あかりが笑顔で言ひ。

「なんか、こいつて書くとわかりやすいね。頑張ればいい気  
がするよ」

あかりの言ひとおりだ。高橋さんの新しいメアドを推理するなん  
て無謀だと思つたけど、こいつしてきちんと整理されれば、不思議と  
できそうな気がしてくる。わたしはもう一度、並べられたメアドを  
見直した。

メアド?『1234567890-』  
メアド?『1234567890-』  
メアド?『1234567890-』

メアード? 『 1 2 3 - 8 9 - 1 - ^ . 』 4 - 1 4 『

あとはみんなで知恵を出し合って、この丸を埋めていくだけだ。

昼休みの残り時間は一十分。この時間内に解決しないといけないわけではないけど、クラスの違う嶋くんが協力できるのは昼休みまでだ。できるのなら、少しでもメアドの穴を埋めておきたい。

「真ん中部分に永久欠番の選手と関係のある言葉が入るつーことなら、今回のメアド?には、黒沢俊夫と沢村栄治と関係のある言葉つてことになるな」

藤井がシャーペンをぐるぐる回しながら囁つた。

「で、その中に『rst\_e』が入るんだよね……。これがいつた  
い、どう関係していくんだ?」

あかりが考えるように視線を宙に向ける。わたしもつられて同じ  
ようにしてみると、特ににかひらめくわけでもなかつた。蛍光  
灯が眩しいぜ。

頭を悩ませるわたしたちの前で、嶋くんはなんでもないことのよ  
うに言つてのけた。

「俺、たぶんわかつたよ。この『rst\_e』の前後になにが来る  
のか  
「え!」

蛍光灯から嶋くんにピントを合わせる。冗談を言つているようこ  
は見えない、自信ありげな顔があつた。

「黒沢俊夫と沢村栄治の背番号は、球界初の永久欠番なんだろう？」

あかりと藤井が頷く。

「『』の二人をつなぐ最も大きなキーワードを、高橋さんがメアドに入れる可能性は高い。そう考えたら、『first』の前後にある文字が見えてこないか？」

球界初の永久欠番ということを考えれば、『first』の前になにがあるか見えてくる？

知恵をふりしぼり、考える。考えて考へて、そして、

「……あ、わかつた！」

ぱしんと手を合わせ、声をあげた。……あかりが。

「ファーストだよ！ 球界初の永久欠番、つてことはつまり、日本で最初の永久欠番。だから、英語の『first』が入るんだ！」

興奮して、一気にまくしたてる。よつぼどれしかつたみたいだ。当たつてる？ と言つのようにあかりが顔色を伺うと、嶋くんは小さく笑つた。

「俺もそう思う」

「本当？ よかつたー」

安心したように笑つて、胸に手を当てるあかり。藤井は先に解かれたのが悔しいらしく、渋い顔をしている。わたしももしかしたら、同じような表情をしているかもしない。

あかりにそんな気はないとわかつていても、嶋くんの笑顔を向かれているのを見たらなんとも言えない気持ちになる。できることならわたしが謎を解いて、嶋くんに、すごいな川口、好きだ結婚してくれ！ とか言われたかつた。

「でも、嶋君。嶋君は『rest』の前後が見えてくるって言つたけど、後ろにはなにが来るの？」

「ああ、それは……」

嶋くんが答えかけたとき、藤井が待つたをかけた。

「待て良次！ おれ、もう少しでわかりそんなんだ。あと二十秒待て！」

坊主頭を叩きながら必死に考えている。嶋くんは苦笑して、わかつたよ、と返した。やっぱり優しい。わたしだつたら無視して答え言つてるのに。

あかりにちよいちよいと肩をつつかれた。

「わかる？」  
「ぜんぜん」

英単語で『e』から始まるのはなにがあつたかな、ヒレッキから考てるけど、あいにく、このメアドに当てはまりそんのは思いつかない。素直に降参して、嶋くんの回答待ちだ。

「わかつた！」

藤井が顔をあげ、机を叩いた。ばん、と大きな音が教室に響き、

クラスの大半が驚いて音の出所を見るけど、なんだ藤井かとすぐに自分の作業に戻る。大声を出しても机を叩いてもここまで反応されない人物も珍しい。

「けつこつシンプルだつたる?」

「ああ。日本人でよかつたぜ」

男一人で笑いあつと、藤井は急にわたしとあかりのほうを見て、

「どうだ? 川口と大原はわかつたか?」

わからないよなあ、お前らは。藤井の顔にははつきりやつ書いてあつた。

くつそ、ムカつく。嶋くんにだけわからないなら諦めもつくけど、こいつがわかつてわたしはわからないなんて、屈辱以外のなにものでもない。

素直にノーと答えるのも癪なのでわたしは黙つていたけど、あかりはあつさり首を横に振つた。

「わかんない。教えて、藤井君」

「ふふん、いいだろう。そもそも、この『e』を難しく考えるのがいけねーんだよ。eから始まる英単語は……なんて持つての他だ。これは、日本語のある言葉をアルファベットにしただけなんだからな。そう、つまり、これが意味するものは? ……」

眉間にしわを寄せて歯を食いしばり、更に顔を小刻みに上下に揺らす。いや、変な演出はいいから早く言えよ。

「ダーダーん! すなわち、永久欠番の『e』だ。『永久欠番』という言葉をアルファベットにして、その頭文字の『e』だつたんだよ

「ああ、そつか！ そういうことなんだ」

感心した様に口を大きく開けて頷くあかり。わたしもすこく納得したけど、相手が藤井だからあんまり大きいリアクションはしない。なんか本当に、負けたみたいだし。

「そして、その後ろに来るのは当然、『k』だな。『永久』の『e』と、『欠番』の『k』。川口、お前はこの『e』を英単語として見てただろ？ だからわからなかつたんだよ」

最大級のドヤ顔をわたしに向けてくる。お前だつてさつき『f-i-r-s-t』わからなかつたくせに。……なんて言えるはずもなく、無難な答えを返す。

「そうね。わたし、難しく考えすぎてたみたい」

私も、とあかりが笑う。この素直さ、演技じゃないのがうりやましい。

「『f-i-r-s-t-l-e-k』か。これで、ハ文字埋まつたことになるんだけど……」

嶋くんがそう呟いたのが耳に入り、思わず振り向く。

「ハ文字も埋まつたの？ すごいじゃない！ もう一息ね」

昼休みは残り十五分。この調子でいけば、時間内にメアドを突き止めることができるかもしない。だけど、テンション右肩上がりのわたしとあかり、藤井と違つて、嶋くんは喜びの声を上げず、首をひねつた。

「……本当に難しいのはこれからかもしれない」「え？」

わたしたちの視線を一斉に浴びながら、話を続ける。

「真ん中部分に入るのは、九文字だ。それに対し、『first\_ek』は八文字。メアドを完成させるには、あと一文字足りないメアド？の真ん中部分の丸を数える。……嶋くんの言つとおり、九つあった。

「残り一文字といつのは、下手に一文字、三文字足りないより難しい」

嶋くんは腕を組みながら、変に暗く言つていて、前向きに言つているわけでもない、平坦な声を出す。

「俺は、『first\_ek』は当たつてると思つよ。いかにも高橋さんがメアドに入れそうな言葉だと思つ。だけど、それに一文字加えるとなると、なにが来るのかまったく見当もつかない」

6

昼休みは残り十分を切つた。

それでも、依然として最後の一文字がなんのかわからない。

永久欠番を『ek』ではなく『ekb』にしてみたり、『ek』と数字のあいだにピリオドを入れてみたりしたけど、どのアドレスに送つてもすべてエラーメールが返つてきた。

正直、完全に行き詰っていた。

「あ、くや。またエラーだ」

藤井がケータイに舌打ちする。さつきから適当に一文字付け加えてはメールを送っているけど、「ことじ」とく空振りしていた。もう何回三振したかわからない。

「『first－ek』は間違ってるのかな？」

あかりがぽつりと漏らす。そんなはずない、とひまでは思つていたけど、だんだん自信がなくなってきた。なにか、他にもっとふさわしい言葉があるんじゃないかといつもさりしてくる。わたしは右隣に座る彼に尋ねた。

「ねえ、嶋くんばどひ思つ？」

顎に手を当てたまま一人静かに考えを巡らせていた嶋くんは、わたしのほうを見て、

「俺は、『first－ek』が間違つてることは思わないよ。ただ、最後の一文字を突き止めるには、メアド？と？を完全に解読する「ことが重要だと思つ」

そう言われて、思いだす。そういえばわたしたちは、メアドの意味を完全に突き止めたわけではなかつたのだ。メアド？は『bōn s a i k yō』が、メアド？は『v d n k』の意味が、それぞれわかつていな。だけど……。

「でも嶋くん、そこまで解読する必要はあるの？ とりあえず野球

に関係する言葉、じゃ駄目?」

「駄目だと思つ」

清々しきほどをいつぱりと言つ切る。

「さつきからこのあたりを見ていると、なにかひつかかるんだ。おかしい部分があるような気がするんだよ」

嶋くんは、普段から優しい、穏やかな口調で話す人だけど、いまは珍しく語尾が強くなっていた。その「ひつかかるといふ」がわかりそうでわからないのがもどかしいみたいだ。わたしも嶋くんにならい、メアドに目を向ける。

メアド?『1uv - go - ^ . bonsaikyo1 - 3 - @』  
メアド?『1uv - go - ^ . vdnk - golden16@』

嶋くんの言つりかかるといふは、『bonsaikyo』や『vdnk』だな。わたしも注意して見てみるけど、ただただ意味がわからない。

「いつたいこれ、どうこつ意味なんだうね」

あかりも隣で首を傾げる。やみくもにメールを送る作戦は諦めたらしい藤井も、過去のメアドを真剣な表情で分析している。わたしも、諦めないで考えてみよう。

メアド?の『vdnk』はなにかの略称だうな?、vから始まるのを見るに、さつきの「永久欠番」みたいな日本語ではないだろ。やっぱり、野球に関係があつてvといえば、「ヴィクトリー」かな。でも、その後ろのDは? 野球に関係ありそうなD。えーっ

と……。あー。

考え始めて三十秒で、もう壁にぶち当たった。見ると、あかりは指でこめかみを「じ「じつし、藤井は頭をかき、嶋くんは下を向いている。

みんな、明らかに行き詰つてるよ。わたしと一緒にだ。

「……なあ、大原」

頭をかく手を止め、藤井があかりに尋ねる。

「本当に、王貞治と長嶋茂雄に盆栽の趣味はねーのか？」

「私は聞いたことないけど……。でも、そうだよね。そう考えでもしないと意味わかんないもんね、これ。だんだん、私が知らないだけほんとは一人とも盆栽好きだつたんじゃなかつて気がしてきたよ」

「だよなあー。ちょっとおれ、情報収集するわ

藤井が再びケータイを手に取る。ウェブに繋いで、巨人の永久欠番選手について調べるつもりらしい。じゃあ私も、とあかりもケータイをいじりだした。

「わたしもやるわ」

なんとなく流れで、わたしもケータイを開く。すると、俺もやうかな、と嶋くんまでケータイを取りだした。

…………ん？ あれ、なんか忘れてるような。

「あ、メールが来てる」

ケータイの画面を見た嶋くんが呟いた。  
わたしとあかりが、弾かれたように目を合わせる。

そ、そうだった！ 完全に頭から飛んでたけど、わたし、嶋くんにメールを送ったんだった。今朝キーパーを運んでくれたことへのお礼を、最後にちょっと大胆な言葉を添えて！

「川口から？」

差出人の名前を見た嶋くんが、顔をあげてわたしを見てきた。  
わたしは必死に平静を装う。

「あ、うん……。ぜんぜん、大したメールじゃないんだけど」「そつか」

すぐにまたケータイに視線を戻す。黒目が左右に動き、文字を追つているのがわかる。わたしはもう、高橋さんのメアドの解読どころではなかつた。どくどくどくと猛スピードで心臓が動き、その速さたるや、連續した一つの音になりそつなほどだ。 文字を追う嶋くんの瞳が、急に止まつた。そのまま視線は動かなくなり、それなのに、顔はだんだん険しくなつていく。

どうしたんだろう、というより、どこを見てるんだろう。まさか、あの、最後の一文？ それをあんなに凝視して、眉間にしわを寄せているの？

「川口っ」  
「は、はい」

嶋くんがケータイからわたしに顔を向ける。意外なことに、目を

大きく見開いて、興奮冷めやらぬといつよいうな表情をしていた。そ  
ういえば、いまわたしを呼んだ声も、高揚しているのを必死に抑え  
ているかのような声色だった。

「これ、なに……？」

ケータイの画面を指差す。

嶋くんの人差し指の先には、なんてことない、ただの絵文字があ  
つた。

「これ？ 絵文字だけど……」

「そうじゃなくて。この、絵文字の後ろにあるやつ。これはなに？」

嶋くんがさつきより強く、メールの一三行目の絵文字、『(^ - ^)』  
を指す。

なんでそんなにテンションが上がってるんだろう、と思しながら、  
わたしは左手の人差し指と中指を立てた。

「これも絵文字の一部。ピースよ」

左手を顔の横に持つていき、メールの中の絵文字と同じポーズを  
する。

それを見た嶋くんが、急におかしくなった。

あ、と声をもらし、高橋さんのメアドを見て、次にわたしを見て、  
もう一度メアドを見た。そのあとに、小さく、だけどほつと、  
こう言った。

「わかった……」「え？」

なにが？ 野球部での集合写真はよく撮るから、わたしがピースしても可愛いことなんて、とつこの昔にわかつてははずなのに。もしかして、集合写真に写っているわたしをろくに見てすらいなかつたのかな？ そんな、ショックだ。

「一樹」

そんなわたしの内心を知るはずもなく、鳴くんは真剣な表情で、こう続けた。

「わかつたぞ。高橋さんの新しいメアドが」

藤井とあかりは、まじかよ、とか、本当に? とか言って、喜びと驚きが入り混じっていた。

対してわたしは、驚き五割、残念五割。嶋くん、わたしのピースサインに見惚れたわけじゃなかつたんだ……。

「で、良次。いつたい、残り一文字はなにが入るんだ?」

藤井が身を乗り出しながら訊く。詰め寄られた嶋くんは藤井を押し返しながら、

「ダブリューだよ。小文字の『w』が、絵文字のすぐ後ろに入るんだ」

「ダブリュー?」

意味がわからないとこつよつこつ、オウム返しをする藤井。気持ちはわかる。わたしだつてぜんぜんわからないから。

「さっきの三口のメールを見て気づいたんだ。小文字の『v』を後ろにつけることで、ピースをしている絵文字を作れる。高橋さんのメアドにあつた絵文字も、それと同じだつたんだよ」

過去のメアドを見る。

メアド?は絵文字の後ろに『v』が、メアド?は『v』がある。といつことは、つまり、これつて。

「『』の『』と『』は、絵文字の一部ってこと?」

嶋くんは大きく頷いた。

「メアド?は親指を立てている絵文字で、メアド?はペースをしている絵文字だ」

わたしは、頭の中に雷が落ちたような錯覚を覚えた。

なんてことだ。わたしたちはずっと、『』の一つを文章の頭だと認識していた。一番の難関、真ん中部分の最初の一文字田だと思つていたのだ。真ん中部分の文章の意味がわからないはずだ。文字ではないものを勝手に文字だと勘違いしていたんだから。

でも、間違いに気づいたいまなり、きっと意味がわかるはずだ。わたしは、『』と『』をそれぞれ抜かして文章を読んでみた。

メアド?『onsaikyo』

メアド?『dnk.golde』

…………あれ、おかしいな。ぜんぜんわかんない。

「ああ、そつか、そういうことなんだ!」

「おれもやつとわかつたぜ。高橋さんらしいなあ、つたくよー。」

残りの一人はわかつた様子。嶋くんもうれしそうに『』と『』笑っている。

そんな、最後の最後で、またわたしだけ遅れている。

「あの、あかりさん」

「ん、なに？」

「どういつ意味なの、これ？　『オンサイキョウ』とか『ティーエヌケー』とか、ぜんぜん意味わかんないんだけど」

あかりは顔をくしゃっとむかへ、弾むような声をだした。

「違つよ、『ズ。『オンサイキョウ』じゃなくて、『オーエヌサイキョウ』って読むの」

「オーエヌ？」

ついわつせ、なにかで聞いたような気がする。あれは確か……。

「王貞治と、長嶋茂雄……？」

「わづ。わづこづ」とー。」

びしつとあかりが親指を立てる。

そうか、『オーエヌ』は王貞治と長嶋茂雄のこと。つまり、その二人は最強だと聞いたかつたんだ。後ろにある永久欠番ともしつかり関係している。

「じゃあ、メアド？ の『dk』は？ これは、どういつ意味なの

？」

「おーおー三口い。もう忘れたのかあ？」

お前には聞いてねえよ。なんて口にするはずもなく、

「なにを？」

「さつき大原が言つてただろ？ お前はトイレに夢中だつたみてえ  
だけど、川上哲治はナントカの神様つて言われてたつて」

わたしがトイレ大好きみたいな言い方はやめろ。周りの席の人たちが一瞬こっち見たじゃない。  
……でも、癪だけどいまのヒントでわかった。

「打撃の神様ね。そつか、だから『d n k』なんだ」

打撃の神様をアルファベットで略して『d n k』。やつさの、永久欠番を略して『e k』と同じだ。

これで、ずっとわからなかつた真ん中部分の謎は解けた。わたしの予想したとおり、永久欠番の選手と関係のある言葉が入っていたのだ。

「でも、なあ、良次」

わたしが理解したのを見て、満足したように腕を組んで田を細めていた藤井が急に真顔に戻り、嶋くんに尋ねる。

「なんで今回のメアドは『w』なんだ？」

それはわたしも気になつた。膝の上に手を置いて、嶋くんの説明を聞く。

「一つ目のメアドでは、親指を立ててる絵文字。で、二つ目のメアドはベース。メアドを変えることに、立てる指の数が一本ずつ増えているてるんだよ」

「あ、なんだよ、そういうことか。めちゃくちゃ単純だな」

それが逆に気づきにくくしたのかもな、と嶋くんがフォローする。今回のメアドは指を二本立ててるはずだから、『w』。たしかに、充分納得できる推理だ。きっと、高橋さんのメアドはこれで決まり

だらり。

「やつたね、あかり」

疲れはしたけど、妙な充実感がある。きつとあかりも同じ気持ちだろうと思つたけど、隣に座るわたしの友人は、納得がいかない、とこりょうつな顔だった。

「どうしたの、そんな顔して？」

「うん。だつてさ、なんか変じゃない？」

あかりの言葉に、嶋くんと藤井も会話を中断した。

「なにが変なんだよ、大原。おれはばつちり納得だぜ」「この、絵文字の中に入ったピリオドだよ」

絵文字を指差す。メアド？で使われている絵文字は『^\_\_^ . b』だ。さつきまでは、『り』も絵文字の一部だとは思わず、その前のピリオドで終わりだと思っていた。まったく、ややこしいピリオドだ、と思つたところで、あかりの言いたいことがわかつた。

「確かに変だわ。どうして終わりでもないのに、ピリオドが打つてあるの？」

「ほんとだ。おれ、興奮してて変だと思わなかつた……」

果然とするわたしと藤井。しかし、嶋くんはその質問を予想していたようだ、ためらわずにこりつてきつた。

「やつのピリオドも、絵文字の一部だからだよ」

きょとんとするわたしたち三人に、補足説明をする。

「ほり、一樹。高橋さんはその絵文字を、自分のトレードマークだつて言つたんだよな？」

「ああ、そうだけど」

「じゃあ、さつき俺たちに見せてくれた写真とその絵文字を見比べると、わかると思つよ」

大人になぞなぞをだす子どものようこにやつと笑つた。

そんな笑いかたもするんだ、嶋くんかわいい、と感激しているわたしの横で、藤井がケータイを机の上に置いた。画面には高橋さんの写真が表示されている。

高橋さんはやつぱり、わたしほどではないにせよ美人だった。こうしてまじまじと見てもその印象は変わらない。

次に、もう一度絵文字を見る。『^—^ .b』。うん、絵文字だ。

そしてもう一度高橋さん。カールした髪はやつぱり大人っぽく、わたしも今度やってみようかなとか思う。それからやつぱり、わたしの泣きぼくろには及ばないけど、高橋さんのぼくろもなかなか印象的だ。うん、唇の左隣のぼくろは……つて…

「わかつた？」

嶋くんがさつきと同じ笑顔で尋ねてくる。わたしは「ぐくく頷いた。

「そういうことだったのね」

「うん。さつき、メールの絵文字のことを訊いたとき、俺にピース

してくれただろ？ それでわかつたんだよ。位置は違つけど、川口にもほくろがあるから

苦笑する。あのときの驚いた顔は、そういう意味だつたらしい。藤井とあかりも絵文字の意味がわかつたらしく、やられたー、とか言つて掌で顔を覆つたり、苦笑いと普通の笑顔の中間みたいな表情をしている。

わたしたちからすればやられたと思つけど、高橋さんからすれば、じく自然なことだつたに違ひない。彼女には、唇の左隣のほくろが印象的だという自覚があつたんだろうから。

あのピリオドは、ほくろだつたのだ。自分の顔のパーツの中で欠かすことのできないほくろが入つてゐるからこそ、高橋さんはあの絵文字を「トレードマーク」だと言つたのだ。まったく、こんなところに落とし穴があつたなんて。

腕時計を見る。昼休み終了まで、あと五分。

「藤井くん。メール送つてみたら？」

「ああ、そうだな。サンキュー川口」

藤井がメールの宛先欄に、アドレスを打ち込んでいく。

『l u v - g ^ - ^ . w f i r s t - e k 4 - 1 4』

これでたぶん、間違いはないはずだ。そう思つのに、なんだか変に緊張してくる。それは藤井も同じのようで、本文に『メアド変更了解しました。ところで、オールスターのチケット取れたんだけど、一緒に行かない？』とだけ書くのに、何度も打ち間違いをした。

「それじゃあ……、送るぞ」

目を閉じて、送信ボタンに指をかける。わたしたち三人の視線が、ボタンを押す後押しになる。ほとんど躊躇う間はなく、藤井はメールを送信した。画面に「メール送信中」の文字が躍り、すぐに「送信完了しました」に変わる。

「送信、したね」

「あとはエラーメールが来ないのを祈るだけね」

「これでエラーだつたら、マジでもうなんも思いつかねえよ」

「大丈夫だ……たぶん」

喋りながら、誰もケータイから目をそらさない。エラーメールは、メールを送信してから十秒足らずで来る。もう大丈夫という時間まで、気になつてケータイから目をそらせないのだ。

沈黙の中で、一秒一秒と時間が過ぎる。周囲の席でお喋りをする人たちの声が耳に入つてくるけど、それも右から左に抜けていく。時計の針が一つ進んだときに、ようやく、嶋くんが口を開いた。

「エラーメール、返つて来ないな」

あかりが頷く。

「来ないね」

それでやつと、わたしたちは顔をあげ、目を合わせあつた。みんなの頬が一斉に緩む。

「成功つてことで、いいのよね?」

「うん。エラーならとっくに返つてきてるはずだ」

「藤井くん」

よかつたね。そう続けようとしたとき。

藤井のケータイが光った。

画面を見る。新着メール一件受信しました。

喜びは一気に干上がり、代わりに不安が湧いてくる。まさか、エラーメール？ それにしては来るのが遅すぎるけど、でも、なにかの不都合で遅れることだってあるかもしね。

藤井はケータイを取り、腿の上に置く。わたしたちの位置からは死角になつて画面が見えない。ケータイを見る藤井の顔が、ぐしゃつと潰れた。

「大丈夫？」

あかりが声をかけると、藤井は無言でケータイを机の上に戻した。

『え、ホントに？ 絶対いく！』

本文は短いけど、周りはデコレーション絵文字で可愛く装飾されていた。一目見て、女の子のメールだとわかる。

「一樹、これつて……」

「ぐりと頷いて、下を向いたまま、

「高橋さんからの返事」

不安と緊張が一瞬で消し飛んだ。藤井になんと言おうと一瞬考え

たけど、出てきたのはけっこうへ、一番シンプルな言葉だった。

「藤井くん、おめでとうー。」

あかりと嶋くんもそれに続き、おめでとう、と笑う。

藤井はずつとうつむいて、顔をあげない。わたしたちは二人で顔を合わせ、にっこりと笑って、この充実感をわかつた。時間にすれば、ほんの一十五分弱。だけど、ものすごく濃い一十五分だった。

「みんな、マジでありがとな」

藤井が顔をあげる。嶋くんがわたしたちを代表して、涙ぐむ藤井の肩をたたく。

「いいよ、これぐらい。よかつたな」

わたしとあかりも、笑顔で大きく頷く。

へへ、と藤井は顔をぐしゃぐしゃにして笑った。目元をじじじとぬぐい、

「まつたくお前らって奴はー！」

机の中に手を入れて、袋にも入っていない、裸のままのメロンパンを取りだした。

「お礼に、おれのクリーミーメロンパンやるよ。誰から食べる？」

笑顔で半分ほど食べられたメロンパンをつきついた藤井に、わたしたちも満面の笑みで答える。

「いやそれはいらない」

「遠慮しておくれ」

「藤井君、食べていこよ」

「えー、なんだよー。川口、お前にこうひととき気に遣つて自分のお願い言えないタイプだろ？ な、おれは笑わねえから、素直に食つていいんだぞ」

なぜわたしに矛先を向ける。

「本当に、いまお腹いっぽいだから。藤井くん、好きなんでしょう？」

「わたしたちはいいから、ぜんぶ食べて」

「お前ら、いつたいどんだけ優しいんだよ」

おれは幸せだぜ、とか言いながら、メロンパンにかぶりつぐ。なんでこいつは裸のまま机に入れてたメロンパンを平氣で食べられるんだ。

「じゃあ、俺はもう帰るよ」

嶋くんが苦笑しながら席を立つ。そうだ、もうすぐ昼休みが終わる。これから五限目の授業があるんだった。

使っていた椅子をもとの場所に戻す嶋くんを見ていると、なんだか名残惜しくなってきた。今日は部活がないから、嶋くんとはしばらくともに話せない。

せめて、わたしのメールについて、ちょっとぐらい触れてほしかったな。わざわざメールでお礼までしなくてよかつたのに、とか、その程度でもいいから。

藤井から数学の教科書を借りる嶋くんを見ながら、そんなことを

思っていた。あかりからも、なんとなくわたしを気遣つよつた雰囲気を感じる。

「川口、大原。またな」

「あ、うん。またね」

だけどけつときょく、なにも言えないまま手を振る。でも、しようがないよね。自分から、わたしのメール見てどうだつた？ とか言つのも変だし。嶋くんの背中を見送りながら、負け犬の遠吠えのよつた言い訳を頭の中で繰り返す。

なんか虚しいな、わたしも席に戻りつと立ち上がったとき、嶋くんが足を止めて、振り返つた。

「あ、そうだ。川口」

そして、わたしの手つへ引き返してくる。

なんだう。まさか……、と根拠のない期待が胸の中で膨らむ。

「さつきのメールのことなんだけど」

じきん、と心臓がはねる。嶋くん、わたしの真正面に立つてゐる。吐息がかかりそうなほど近い、といつわけではないけど、でも、近い。

喉の奥から、なんとか声を絞り出す。

「あれが、どうかしたの？」

嶋くんはぽつが悪そつて類をかいだ。

「『めんな。俺、今日まで気づかなかつたよ。一人でキーパーもコツブも運ぶのは、大変だよな』

あれはちょっと大げさに言つただけで、べつにそんな、大変と言つほど大変でもないのよ。

そう言おうとしたのに、口からでてきたのは、あ、とか、いや、とか、意味不明な言葉だつた。

嶋くんはわたしをまつすぐ見据えて、はつきりと言つた。

「これからは、ちゃんと手伝ひ

頭の中で花火が上がつた。

やつた。嶋くんが朝、キーパーを運ぶのを手伝ってくれる。といふことはつまり、一人きりの時間が必ず保障される！ かなり短い時間だと思つけど、そんなの関係ない。やつた、やつたー！

「 ように、みんなに言ひておくから  
「え？」

自分の耳を疑つてしまつた。この人、いまなんて言つた？

「さつき一樹が、川口は遠慮してなかなか自分のお願いを言えないタイプだつて言つてただろ？ それで気づいたんだよ。いままでは、俺たちに気を遣つて大変だつて言えなかつたんだよな？」

「あ、うん。いちおう、ちょっとは……」

やつぱり、とこりょうに、嶋くんは唇を結んだ。

「『めんな。だから、みんなに言ひておくよ。川口が大変そうにしてたら、キーパー運ぶのぐらい手伝つてやれつて。あのメールはそ

「うこう」となんだよな？」

「いや、あのその」

「手伝ってくれるマネージャーがいるって、当たり前のことじゃないのに、みんなそれを忘れてるんだよな。俺がちゃんと言つておく。気づくのが遅れて、悪かった」

最後にもう一度頭を下げる、じゃあまた、と鷗くんは去つていった。

わたしは突つ立つたまま、教室から出て行く大きな背中を見送つた。

これからは、ちゃんと手伝つ。わたくしの鷗くんの言葉が頭の中で何度も再生され、ヒローのよひに響く。あのとき感じた幸福感は、一瞬にして崩れ去つてしまつた。わたし、内心、すっくはしゃいでたのに……。

しばらく動けないでいたわたしの背中を、誰かがぽんと叩いた。あかりだ。

「う……、うんな」とも、あ、あるつも

必死に笑いをこらえいる。あかりはそのまま、肩を震わせながら席に戻つていった。

「あー、つまかった。……あれ、川口、どうした？ 変な顔して」

メロンパンを食べ終わつた藤井が怪訝そうな顔をする。

あなたが余計なこと言つから変な勘違いされたじゃないのよこのアンポンタンが。ちょっといいやつかもなんて思つた過去の自分をぶん殴りたい。

「なんでもないわ。じゃあね、藤井くん」  
「あ、ちよつと待てよ」

机の中に手を突っ込み、紙パックのお茶を取りだす。

「これ、さつき飲んだんだけどさ。席に戻るついでに、捨ててくれね？」

無言で受け取る。サンキュー、と藤井が笑つたので、適当に愛想笑いを返した。

「ミミ箱の前に立つと、誰も見ていないことを確認して、パックを逆さに持ち、思いつきり握りつぶす。ストローの先からお茶の雫がこぼれる。そのまま手を離してミミ箱に捨て、席に戻る。

昼休み終了のチャイムを聞きながら、わたしは大きなため息をついた。

藤井も藤井だけど、嶋くん……。

高橋さんのメアドを推理するときの嶋くんは、本当にカッコよかつた。わたしからは思いも寄らないところからヒントを見つけ、意味を解読し、どんどん確信に迫つていった。純粋にすういとthoughtた。

だけど、だけどね……。

教室のドアが開き、先生がやつてくる。取り出した教科書を机の上に置きながら、わたしは心の中で叫んだ。

なんでメアドの解読はできても、乙女心の解読はできないのよー。

\*

その後、授業が進むにつれて、気持ちはだんだん落ち着いてきた。心のもやもやも、完全にとは言わないけど、まあ八割がたは払拭できた。

そんな中でわたしは、嶋くんのあの洞察力を思い出すと、ちょっと笑えないなと思った。

高校に入つて一年と二ヶ月。

三年間隠し通すと決めた秘密が誰かにばれる気配はないけれど、まだまだ油断できない。

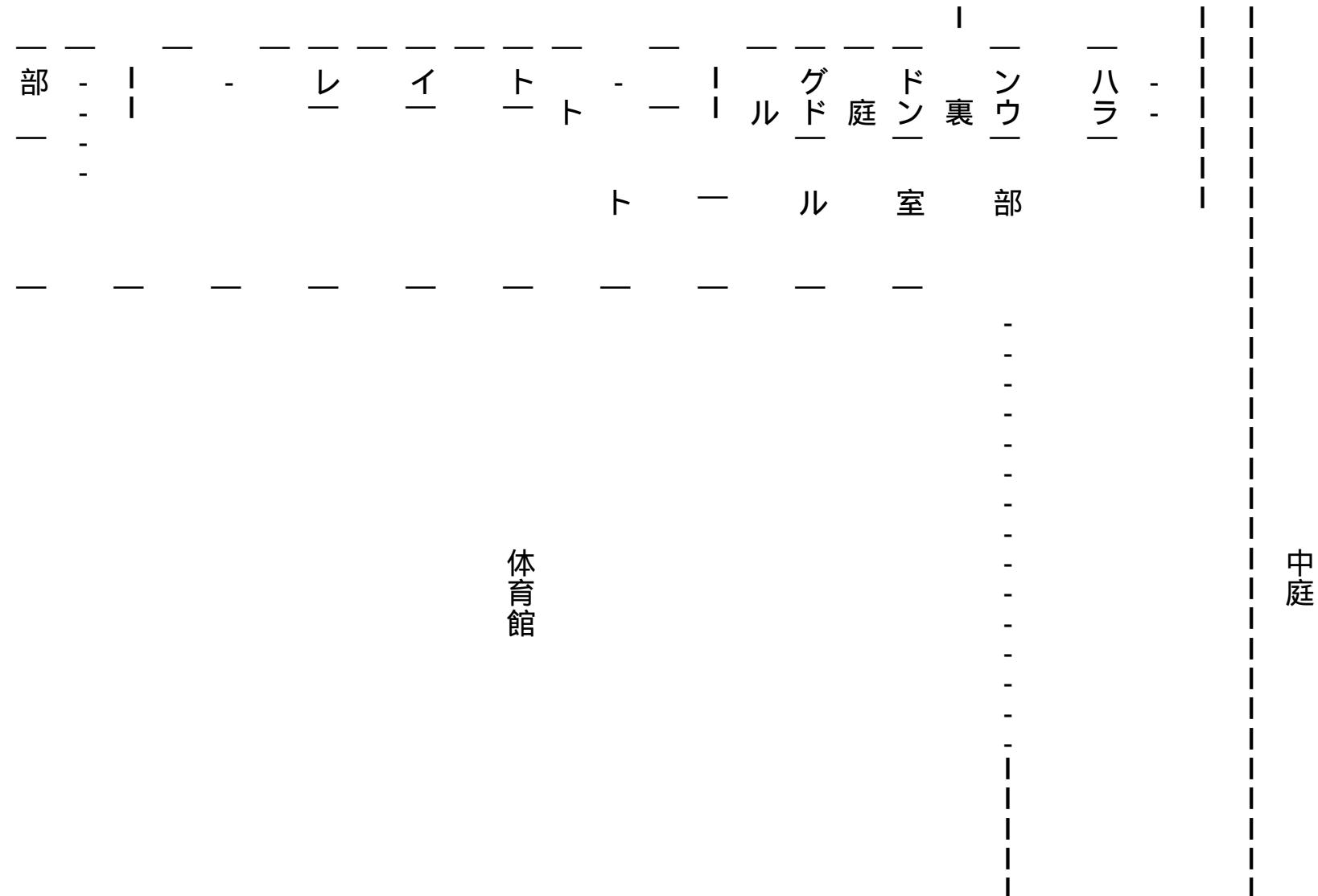
特に嶋くんは、一番気づいてほしくない人なのに……。

## 体育館周辺見取り図（前書き）

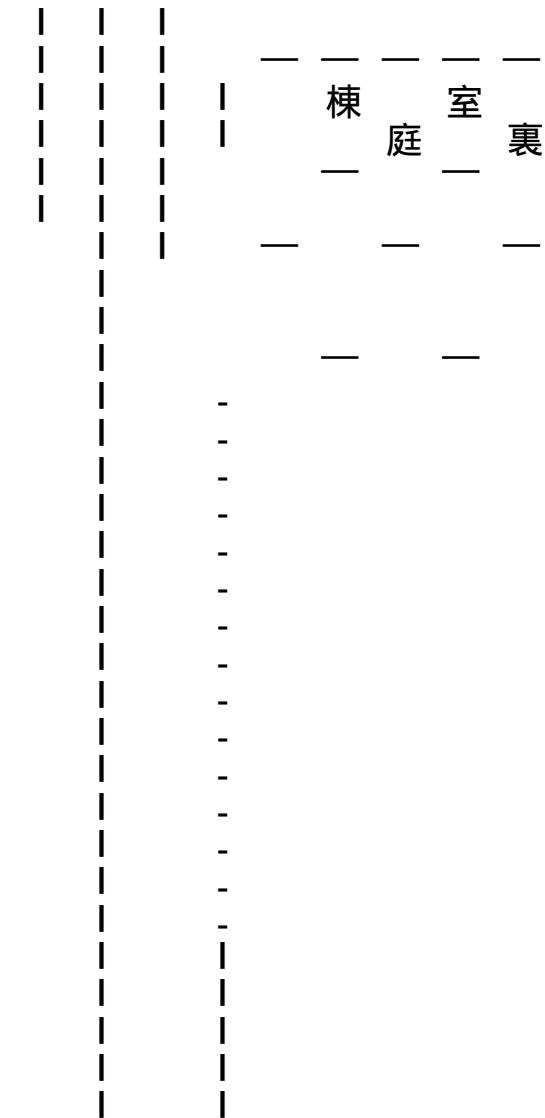
第一章は見取り図があつた方がわかりやすいと思つので、下手ですが作成しました。

携帯の方は見づらいかもしません……。すみません。

体育館周辺見取り図



グラウンド



物事には、なにげにも限度つてものがある。

ケーキを作るのにある程度の砂糖は必要だけど、度を過ぎると甘くなりすぎて気持ち悪くなるし、言いたいことをすべて口に出すと反感を買つけど、我慢しきれるとあとで思つてもよらない形で爆発してしまつ。

どんなことでも、限度を超えると裏田に出てしまつものだ。わたしはいま、それを痛烈に実感していた。

「雨を降りしてくれなんて、言つてないつづーの……」

火曜日の放課後、部室へ向かう途中のこと。  
空から、ぱらぱらと雨が降ってきた。

一限目の体育で外に出たときあまりにも暑かつたから、もつちよつと曇つてくれないかなあと思つたけど、曇りすぎて雨まで降られるのは迷惑だ。

わたしはため息をつきながら、鞄を頭に乗せて雨避けにする。すぐ止めばいいなと思つたけど、勢いはだんだん強くなつていぐ。グラウンドに出られないほどではないけど、一時間も練習すれば髪から雨が滴るぐらいには濡れそうだ。

ジャージに着替えてグラウンドに出ると、バックネット裏のベンチには、既に後輩マネージャーの武田瑞樹たけだ みずきが座っていた。日除けパラソルで守られたベンチにはキー・パーが置いてある。瑞希が先に作つておいてくれたのだ。

「キー・パーありがとう、瑞樹」

「いえ、ぜんぜんですよ」

今日の瑞樹は長い髪を二つ結びにしていた。髪型だけ見れば大人しそうだけど、喋り方はハキハキしてて、声も大きい。先輩相手にも変に遠慮するタイプじゃないから、話してて気持ちの良い後輩だ。瑞樹はわたしの顔を見ると、少し眉をひそめた。

「ユズ先輩、もしかして眠いですか？」

「え？ なんでわかつたの？」

「いや、なんか目がとろんとしてるから」

教室であかりにも同じことを言われた。少しばかりが開いてきたと思つてたのに。わたしは素直に白状する。

「昨日ね、BSでやつてた深夜映画がおもしろくて、遅くまで起きて観てたの。それで一時間ぐらいしか寝てなくて」

「なんの映画観てたんですか？」

「トロロン」

「ふ、と瑞樹が噴出す。

「だから田がとろんとしてるんですか？ あはは、なにそれ  
「わたしも、まさかこんなオチがつくとは思わなかつたわ」

あかりには、トロンを観て田がとろんだねと言われた。悔しいけど少し笑つてしまつた。

瑞樹はちょっと冗談っぽい笑顔で、

「眠たいからつて、練習中油断しないようにしてくださいよ。ボールが飛んできたら危ないです」

「はいはい。大丈夫ですつて」

身体は重いし田はあんまり開いてないけど、さすがにそれは大丈夫。わたしは余裕を持つて、そう返事をした。

そのあと、部員が揃つたところで練習は始まり、キヤツチボールに入るころには掃除当番で遅れていたあかりもやつて來た。グラウンドに到着して最初に言つたのは、

「やりづらじね」

だつた。雨の中の練習が、つてことだらつ。わたしも瑞樹も、まったく反論しなかつた。

昨日の夜も雨が降つたせいでグラウンドの土は湿つてゐる。小さい水溜りもいくつかできていて、そういうところを歩くたびに靴やズボンのすそが汚れてしまう。でも、マネージャーのわたしたちはまだいい。本当に大変なのは選手のみんなだ。

湿つた土の上を少し走るだけでスパイクの靴底にびっしり泥がついて、足がかなり重くなつてしまつ。その泥を落とすには、スパイ

クを脱いで靴底を叩くが、スパイクを履いたまま飛び跳ねて、空中で両方の足をぶつけあうかする必要がある。わざわざスパイクを脱ぐ時間がないから、みんな後者の方をとつてるんだけど、グラウンドのあちこちで選手がぴょんぴょん飛び跳ねるのはちょっと面白い光景だった。

「後半は室内練習になるかもねしれませんね」

一向に止まない雨の中、瑞樹が言つ。パラソルの下にいるわたしたちはまだいいけど、濡れたままずっと練習する選手たちは風邪を引くかもしない。野村先生はそういうことに気を配る人だから、途中で屋外練習を切り上げる可能性は充分ある。

「トレーニングルーム、押さえてたまうがいいわね

あかりと瑞樹が頷く。

トレーニングルームは、体育館の一階にある筋トレ用の道具が一通り揃つた部屋のこと。外で練習できないときはそこで筋トレをすること多かつた。ただ、利用するには事前に体育教官室で予約が必要だ。

「あたし行きましょうか？」

すばやく事態を察し、瑞樹が手をあげる。じゃあお願ひ、と言おうとしたとき、

「やあつべええ！ グローブ体育館に忘れた！」

そんな悲鳴が聞こえてきた。顔を見なくても誰だかわかる。グローブを忘れるなんてアホなことをやらかし、しかもそれを大声で叫

ぶなんて、あいつしかいない。

ちょうどいいや。わたしは体育館に向かおうとする藤井を呼び止めた。

「藤井くん。ついでに、トレーニングルームの予約入れてくれない？」

キャッチボールの相手を待たせるのが気がかりらしく、藤井は早口にオッケー オッケー、と答え、一目散に走り去つていった。

「藤井君、走つてゐあいだに忘れたりしないかな？」

あかりが心配そうに呟く。わたしはそれに、大丈夫よ、と返した。

「さすがの藤井でも、そんな短時間で忘れたりしないって。『はじめてのおつかい』に出かける五歳児じやあるまいし」

と、思ったのは、見事に間違いでした。

グラウンドに戻ってきた藤井は、バックネット裏のあかりと瑞樹を見た途端、

「あ、トレーニングルーム忘れた！」

と叫んだ。わたしは送球ミスをしたボールを取りにいっていたところだったからバックネット裏にはいなかつたけど、それでも藤井の声はしつかり聞こえた。あいつの頭は五歳児レベルなのか。

頭が痛くなつてくる。それと同時に、忘れかけていた眠気が急に蘇ってきた。

田を揉みながらバックネット裏に戻ると、あかりがわたしの名前を呼び、

「あとで時間を見て予約入れてきてくれない?」

と言つた。わたしは頷き、眠たいとき特有のろれつの回らない声で、うん、わかつたーと答えた。

2

キャッチボールのあとはノックが始まった。いつもなら、野村先生にボールを手渡すのと、たまにある送球ミスのボールを取りに行くぐらいしか仕事がないんだけど、今日は大忙しだった。

グラウンドがぬかるんでるせいでボールがすぐ汚れるから、どんどん雑巾で拭いていかないとボールが足りなくなる。だけど、雨が降つてゐるせいで送球ミスも倍増するから、それも取りに行かないといけない。わたしもあかりも瑞樹も、選手のみんなに負けないぐらいい動き回つた。

そんなわけだから、トスバッティングが終わつて十分間の休憩に入ると、三人とも口を揃えて

「疲れたー」

と言つて、バックネット裏のベンチに座り込んだ。お喋りをする気力もなく、ぱらぱらと雨がパラソルを叩く音だけが響く。フルゾーンに生えた樹の下で雨宿りをする選手たちも同じのようで、話をする人はほとんどない。黙つて座つてゐる人がほとんどだった。

そんな中でも、嶋くんだけは雨に濡れながら黙々とネットにボー

ルを投げ込んでいた。ときどき首を傾げて、握りかたを変えたり、ボールを離す位置を変えたりしている。

きっと、ノックのときに送球が逸れたのを気にしてるんだ。今度はスローモーションで腕を振る嶋くんを見て、わたしはそう思った。なにかしつゝことなことがあつたり、反省点をつけたりしたら、嶋くんはいつもこいつやって休憩時間をつぶして確認する。練習のときはいつも一番大きく声を出してるし、本当に、どんなときでも手を抜かない人なのだ。

わたしは嶋くんのこいつこいつが一番好きなんだな。一心不乱にボールを投げ続ける彼を見て、そんなことを思つ。顔は無意識にニヤけてたかもしれない。

急に、パラソルを叩く雨音が大きくなつた。雨が強くなつてきたのだ。土砂降りってわけではないから、練習はまだ続けるんだろうけど……、と思つたところで気づいた。

わたし、まだトレーニングルームの予約入れてない！ 早くしないと、他の部にとられる。

わたしはベンチから立ち上がり、あかりたちに声をかけた。

「ちょっと行つてくるね

一人とも、こいつこいつしゃーーー、と手を振つて送りだしてくれた。グラウンドを出るとき、ちらりと腕時計を見る。四時三分。休憩は四時十分までだから、無理に急がなくとも間に合つ。

\*

公星高校の体育館は、グラウンドに背を向けて建っている。しかも残念なことに、裏口や側面からの入り口がなく、あるのは正面玄関だけ。つまり、体育館の右側か左側を通りて正面に回り、そこから中に入るしかない。

左側のルートは、右手に体育館、左手にはプレハブ一階建ての部室棟と、ハンドボールグラウンドがある。部室棟を通り過ぎると公衆トイレがあつて、次にハンドボールグラウンドが出てくるという感じだ。通称は『部室ルート』。

右側のルートは、通称『裏庭ルート』。その名の通り、体育館の裏庭を通り。その裏庭、樹や花が植えられていて少し見通しは悪いけど、さりげなく高級な黒土を使つてるらしくて、『他の土を持ち込まないでください』と大きく書かれた看板まで立てられている。庭は体育館の真ん中ぐらいの地点で終わつて、そのあとは『部室ルート』と同じように、アスファルトの道を歩く。左手には体育館、右手にはフェンス。どのルートも、歩いて一分ぐらいで体育館に着く。

わたしは『部室ルート』を通りて体育館に向かつた。雨に濡れないうに、体育館の軒下を通り。部室があるだけあつて、この時間でもけつこう人通りはあつた。知り合いも何人かいたから、頑張つて上品な笑顔を作つて挨拶を交わした。

部室と公衆トイレを通り過ぎると、左手にはハンドボールグラウンドが見えてくる。ちなみに、『ハンドボールグラウンド』って言つても、アスファルトとか人工芝つてわけじゃない。わたしたちの使つてるグラウンドを小さくしただけの、土のグラウンドだ。ハンド部は火曜日が定休日だから、誰もいなかつた。

そのハンドボールグラウンドを半分ほど進んだところで、『部室ルート』は終わり。右に折れて体育館の正面に回り、中に入ろうとしたとき、

「……ん？」

思わず声が出た。

正面入り口の辺りが泥で汚れてる。靴底にたくさん泥がついた人がこの辺りを通ったんだ。見ると、『裏庭ルート』へ続く道も泥で汚れていた。くつきり足跡がついてるわけではないけど、ちょんちょんと泥が続いている感じ。しかも、茶色い泥に混じって黒い土まである。

校内で黒い土があるところといえば、裏庭しかない。たぶんその人は、『裏庭ルート』を通りてここまで来たんだろうな。そういながら体育館に入ると、玄関の靴を脱ぐ場所も泥で汚れていた。さつきの人はどうやら体育館にも入つたらしい。誰だか知らないけど、ずいぶんいろいろ汚して回るやつだ。

わたしも靴を脱ぎ、体育館に入る。いちおつ靴箱は設置されてあるけど、どうせすぐ出るんだから、いちいち入れなくてもいいや。他の靴はぜんぶ靴箱に收められてるのに罪悪感を感じないでもないけど、まあいいよね。

バスケ部のドリブル音を聞きながら、階段を上がる。二階には男女更衣室とトイレ、トレーニングルーム、体育教官室がある。トレーニングルームの予約は、体育教官室にある名簿に記入すればオッケーだ。

わたしは教官室のドアを叩き、失礼します、と言つて中に入る。振り返ってきた体育教師たちに軽く会釈。頭を上げて、入つてすぐ

右手の机にある『トレーニングルーム利用名簿』に近寄る。

「あれ？」

間抜けな声が出た。それと同時に、めりやくちやがつくりきた。

トレーニングルームはもう予約されていた。それも、他の部活にじゃない。野球部にだ。代表者記入欄には藤井一樹とある。予約を入れた時間は四時四分。隣にあるデジタル置き時計を見ると、ちょうど四時六分になつたところだった。

藤井が責任を感じて、休憩時間を潰して予約を入れにきてくれたのだ。わたしとすれ違わなかつたのは、『裏庭ルート』を通つて帰つたからだろう。けつこういいとこあるじやん、と思つ。まあ、予約を入れに行く前にわたしたちに一声かけてくれれば、本当は一番よかつたんだけど。

と、そこまで思つて、ひらめいた。

あの、体育館前の泥。あれは、藤井が通つた跡だつたんだ。確か、藤井のスパイクは先週買い換えたばかりの新品だつたはず。靴底のトゲがすり減つていないぶん、他の人よりも多く泥がつく。そんなスパイクで歩けば、当然、通つたところに泥はつく。体育館の正面入り口から部室ルートに続く道にあんな泥はついてなかつたから、藤井は行きも帰りも『裏庭ルート』を通つたんだろう。

体育館まで来たのが無駄足になつて、ちょっと切ない気持ちになりながらわたしは階段を下り、靴を履いて外に出た。

正面入り口の前は相変わらず泥で汚れていた。その少し右にある

蛇口で、体育教師の渡辺先生がしかめつ面でバケツに水を溜めている。傍らには「テッキブラシ。泥を水で流して、掃除するつもりらしい。

そういえば、この体育館の正面入り口の辺りには下水道がないから、泥とかで汚れても雨で流れないと聞いたことがある。この渡辺先生は神経質で有名で、管理している裏庭を少しでも荒らされてもかなり怒るらしい。いつもして体育館の辺りを汚されるのも我慢ならないんだろう。相当イラついているらしく、顔をあげた渡辺先生とばつちり田があつたわたしが、こんにちは、と挨拶しても、

「まつたく、野球部は……」

と、吐き捨てられた。

なによ、野球部だからなんだってのよ。文句があるならはつきり言えつづーの。

そんな悪態が口から出そうになるのを抑えて、わたしはそのまま、『部室ルート』を通りてグラウンドに帰った。行きと違い、帰りは誰も知り合いに会わなかった。

\*

グラウンドでは、嶋くんは相変わらずスローイングのチョックをしていた。他の部員も体力が回復したみたいで、素振りをしている人や、キャッチボールをしている人もいる。

その中には藤井の姿もあった。樹の下でストレッチをしている。ちょうどスパイクの裏が見えたけど、黒土はついていない。たぶん、どこかで落としてきたんだろう。

「おかえり。遅かったね。ビームまで行つてたの？」

バツクネット裏に戻ると、でボールを拭いていたあかりが顔をあげた。冗談を言つてゐるわけではなさそつた感じだつた。わたしは隣に座りながら答える。

「ビームでつて、普通に、体育館までよ。でも、藤井が先に予約入れてた」

「え？」

あかりが素つ頓狂な声をだした。驚いてるつていうより、わたしの言つてる意味がわからなつて感じだつた。とりあえず、ちゃんと一から説明する。

「だから、さつきあかりがわたしに、空いてる時間にトレーニングルームの予約入れてきてくれつて言つたでしょ？ それでいま行つてきたら、もう藤井が予約入れてたのよ。わたしの着く少し前に。なんかちょっとがつかりしたわ」

次に代打で出すぞと言われて打つ氣満々でネクストバッターズサークルで待機してたのに、前のバッターがサヨナラヒットを打つて、けつきてくなにもしないまま試合終了するところな気持ちになるんだろうなとか思った。

要点を正確に摘んだわたしの説明に、あかりはなぜか目を丸くした。何度も瞬きをして、こつと答える。

「いや、私、ユズに予約してなんて頼んでないよ  
「え、うそ？」

髪を結び直す手が止まるわたしに、あかりはせりつと囁いてのける。

「私がお願いしたのは、瑞樹だよ。コズにはなにも言つてないよ」  
頬つぺたに思いつきりビンタされた氣分だった。必死に、あのと  
きのことを思いだす。あくびを噛み殺しながらバックネット裏に戻  
つたそのとき、あかりは確かにわたしの名前を……。

「あ……」

呼んでなかつた。そうだ、あのときあかりは確かに、瑞樹と言つ  
たのだ。それをわたしが勝手に聞き間違えていただけだ。

「じめん、わたしが勘違いしてた……」

「私に謝る」とじやないと思うけど……。でもコズ、そんな間違  
するなんて、ほんとに眠たかつたんだね  
「うん、まあ……」

自分の間抜けっぷりに呆れてしまつ。わたしはもつと、「知的な  
オンナ」を目指してははづなのに。

「それじゃあ、いま瑞樹がいないのも、体育館に行つてるからなの  
？」

「うん。コズのちょっとあとに行つたよ。私と瑞樹は、コズはトイ  
レに行つたと思つてたから」

あかりの言つてははづ、部室棟の隣にある公衆トイレのことだう  
う。そりやあ、遅かつたね、なんて言葉が出てくるよな。向こうな  
ら、歩いて一分ぐらいだから。

それにしても藤井め。どうせなら最初から予約入れておけよ。そしたらこんなことにはならなかつたのに。

なんてことを思つたけど、雨に濡れながら嶋くんのスローアイシング練習を手伝う藤井を見ると、まあ許してやってもいいかな、という気になつた。

外での練習はほゞなくして切り上げになつた。雨は強くはならぬけれど弱まる様子もなく、これ以上やると風邪を引く可能性があると野村先生が判断したからだ。次の日曜日には練習試合もあるから念のため、とのこと。

予約を入れておいたのは、無駄じやなかつたな。

ダンベルやランニングマシーンでトレーニングする選手たちを見て、なんかよくわからない感慨に浸つた。

いまわたしがいるのはトレーニングルーム。外で練習できないとなると、投手陣はここに集まつてシャドーピッチングやランニングをする。野手陣はとくに、屋根のあるところで素振りをしたり、紙ボールでトスバッティングをしたり。場所を見つけてできる練習をするつて感じだ。

「これ、ここに置いておくね」

シャドーピッチングをする石川くんの横に、水の入つたボトルを置く。

室内練習ではみんなバラバラになるから、キーパーの水をボトルに移し替えて、練習してる選手たちのところに届けるのがまず第一の仕事だ。じゃあ第一の仕事はなにかとくと、これはあんまり決まってない。手助けを求められたらするつて感じで、マネージャーから自発的に動く仕事は、実はこのキーパー届けでだいたい終了。

あとは、とつあえず選手たちの近くにて、手伝いをお願いされた  
らできるようにスタンバイしておく。

……けど、ここでは練習の手伝いはぜんぶ機械がやってくれるし、  
マネージャーはいなくていいよね。

わたしはそう判断して、トレーニングルームをあとにした。体育  
館を出て中庭を突っ切り、教室棟の一階と特別教室棟の一階をつな  
ぐ渡り廊下に行く。この渡り廊下、幅は広いし屋根はあるしで、雨  
の日は絶好の練習場所になる。今日もけつこうつな数の選手たちがこ  
こで練習していく。隅にはあかりたちもいた。瑞樹は制服姿の女の  
子となにか話をしていたけど、わたしは到着する頃には、

「じゃあ瑞樹、また明日」

「うん。ナオもめげずにバイト頑張ってね」

と言葉を交わして、制服姿の子は校門の方へ歩いていった。

「友だち？」

わたしが訊くと、瑞樹はじへつと頷いた。

そのあと、あかりと瑞樹は昨日やつてたドラマの話をしだしたけ  
ど、わたしは十メートルほど向こうで素振りを続ける嶋くんをぼん  
やりと見つめていた。

なんだか、スイングが鋭くなつたみたい。真剣な表情でバットを  
振る嶋くんを見て、わたしはそう思った。

一週間前の甲子園県予選で、嶋くんは相手ピッチャーの球威に押  
され、捉えたはずのボールをスタンドまで運ぶことができなかつた。  
そのあとけつよく一点差で試合に負けて、先輩たちは引退。その

日以来、嶋くんは以前にも増してバットを振るようになった。あれをホームランにできなかつたのが、相當悔しかつたみたいだ。

「ゴズ先輩、まーた見てる」

瑞樹がからかうように笑いながら、肩に手を置いてきた。急に身体に触れられて一瞬びくつとしたけど、苦笑いで振り向く。

「わかる?」

「わかりますよ。めっちゃ露骨ですもん」

瑞樹は軽く周りを見回して、小声で訊いてきた。

「ゴズ先輩つて、なんでそんなに嶋先輩のこと好きなんですか?」「えつ?」

そんなこと訊こちやう? てか、なんでと言われても、どう答えればいいか困る。あかりも好奇心丸出しでじつち見てるし、はぐらかせない雰囲気だった。

「じゃあ、いつ好きになつたんですか? やっぱり野球部で練習する姿を見て?」

「あ、それは違う。好きになつたのは野球部に入る前よ」

瑞樹は目を大きく見開いて、顔全体を使って驚きを表現した。

「じゃあ、クラスとかで好きになつて、それで嶋先輩を追いかけてマネージャーになつたんですか?」

だいたい当つてるけど、それも違う。わたしは首を振つて訂正し

た。

「中学のときに好きになつて、それで嶋くんを追いかけて公星に入つたの。マネージャーになつたのは、まあ、そういうこと

事実ではあるけど、なんか口に出すと恥ずかしい。あかりは聞いたことがあるから特になにも言わないけど、瑞樹は手を口許に当て、えーっ、と声を出した。リアクション芸人になれるタイプだ。

「すっごいー そういうえばユズ先輩、家遠いって言つてましたもんね。同じ中学の人も、ほとんどいないんでしたつけ?」

「うん、まあ

ほとんどっていうか、わたしを除いたら一人しかいない。その人とも話したことないから、入学したときは顔見知りゼロに等しかつた。

瑞樹は声をひそめて、更に質問を続ける。

「でも、どこで嶋先輩と知り合つたんですか? 中学違うんでしょ?」

「嶋くんが野球の試合に出てるのを偶然見かけたの」

あかりが、にっこりと笑つて補足説明をする。

「武広中との試合だよね」

以前あかりにこの話をしたとき、試合の様子をよく覚えていた。当時からマネージャーをやつていたあかりにとつても、かなり印象に残る試合だつたらしい。

わたしが頷くと、瑞樹の瞳が輝きを増した。早く続きを、とその

顔は語っていた。

「中三の春先にね、わたし、ちょっと落ち込んでて……。ぼんやりしながら国道を歩いてたの。そしたら、武広市民グラウンドの前を通ったときに、なんか声が聞こえてきて。野球の試合だなってわかつて、なんとなく立ち止まって、フェンスの向こう側から試合を観てたんだ。そしたら……」

あのときのことば、きつと、この先一生忘れない。

夕日の落ちかけたグラウンドで行われていた、野球の試合。守備についていたほうのチームには、明らかに「負け」モードが漂っていた。守備についている野手もマウンドに立つピッチャーも、拳句の果てにはベンチにいる控え選手たちもまともに声を出してなくて、早く試合終わらねえかなと思つてるのがバレバレだった。朝会で校長の話を聞く態度よりはまあマジぐらいのレベルだった。

そんな中で一人、キャッチャーの人だけはずーっと声を出して、みんなの士気を高めようと頑張っていた。グラウンドの中で、その人の声だけが響いていた。

「そのキャッチャーが、嶋先輩だったんですか？」

頷く。

でもあのときのわたしはひねくれていて、なんでそんな意味ないことしてんの、バカじゃないか、なんて思つてた。それでもなぜかその場を離れることはできず、一緒に歩いていた人もなにも言わなかつたから、しばらく試合を観続けていた。

なんとか守りを終えて攻撃に移ったとき、わたしはどうしてこのチームがこんなに諦めムードなのかわかった。相手ピッチャーの投げる球は中学レベルとは思えないほどものだつたからだ。無理だよ、こんなのが打てっこない。そう思うのも無理はない、むしろ当然のことだった。

思つたとおり、先頭バッターはあつさり三振。次のバッターも、まるで同じシーンを再放送したみたいに三球三振。

得点板を見ると、この回が終わるとコールドで試合終了だ。さあ、ラストバッターは誰かな。そう思つて観ていると、打席に立つたのは、あの、一人だけ声を出していたキャッチャー　嶋くんだった。

「そのときには、自分でもびっくりしたんだけど、なにか、期待みたいなものを感じたの」

「期待ですか？」

「うん。この人ならなにかやってくれそうな気がするって。ホームランを打つんじゃないかなって、本氣で思つたわ

でもそれは間違いだった。

一球目、ストレートに振り遅れて空振り。二球目は、ストレートを意識しすぎて、ゆるいカーブにぜんぜんタイミングが合わなかつた。

わたしは自分の期待がしほんじくのがわかつた。そりやそうだよね、そんなに都合よくホームランなんて打てないよ。

どうせ、次も空振りする。わたしは冷めた目に戻つて、そんなことを思つた。だけど、次の三球目、ストレートになんとかバットを当つた。完全に振り遅れだつたけどぎりぎりでバットに当たり、打球になつた。続く四球目、五球目も同じだ。ボールに喰らいついて、ファールで粘つていた。

「」のまま終わってたまるか。なんとかして墨に出てやる。  
そんな気迫が伝わってきた。

グラウンドの外にいるわたしにまでわかるぐらいだから、当然、ベンチの人たちにはもつと伝わっている。さつきまでろくに声も出していなかつた人たちが、急に真剣な眼差しをバッター・ボックスに向けるようになった。

そして、マネージャーが一言、頑張れ嶋君、と声を出したのをきっかけに、ベンチから応援が始まった。頑張れ嶋、負けるな良次。そんな声が行きかつて、バットがボールに当たるたびに、大歓声があがるようになった。

それに応える様に、バッターはだんだんタイミングが合ってきて、当てるのがやつとだつたボールが、少しずつ前に飛ぶようになつた。ライトに飛んだヒット性の当たりが辛うじてファールになつたときは、なぜかわたしも自分のことのように悔しくなり、それと同時に、しぼんだはずの期待がまた膨らみ始めた。

この人なら、もしかしてヒットを打てるんじゃないか。打席に立つ背番号二番を見て、わたしはそう思った。

そして、次の投球で、とうとうボールはフェアゾーンに飛んだ。だけどそれはどう見ても当たり損ないの、ボテボテの打球だつた。ショートが前進してボールを捕球する。タイミング的にはアウトだつたけど、送球が少し横に逸れた。そのせいで、ファーストの人がベースを踏むのと、バッターが一塁ベースに頭から突っ込むのがほぼ同時だつた。

アウトかセーフか。みんなの視線が審判に集まる。  
審判は腕を大きく広げて、セーフと宣言した。

その瞬間、ベンチからあがつた歓声は、ダイナマイトでも爆発したのかと思うぐらいの大きさだった。甲子園の出場が決まった高校でもここまでするかな、ぐらいの大きな大きな声で、選手たちはよろじびあつた。

そしてなんといつても、ヒットを打つた彼。記録上はヒットじやなくてショートのエラーだし、審判によつてはアウトにされていたかもしれないのに、それでも、腕を思いつきり突き上げて、一墨ベース上で大きな大きなガツツポーズで吼えた。なんて言つてゐるのかまったく聞き取れない、ただただ純粹な雄たけびだった。

「次のバッターが凡退してけつときよく負けたんだけど、そんなことはどうでもよかつたわ」

どんなに恵まれない状況でも、ひたむきに、がむしゃらに頑張つていけば乗り越えられるかもしれない。

あのガツツポーズは、わたしにそう思わせるには充分だった。

「じゃあ、そのときに見た嶋先輩が忘れられて、高校まで追いかけてきたつてことですか？」

「うん、まあ、そういうこと」

わたしが首を縦に振ると、瑞樹はしみじみと息を吐いた。

「壮絶な人生ですね……」

「そ、それはどうも。」

「でもユズ、よく嶋くんの受験する学校がわかつたよね」

ボトルで水を飲んでいたあかりが、口許を拭いながら言った。そ  
ういえば、前にあかりにこの話をしたとき、言つてなかつたつけ。

「友だちのいとこに、あかりたちと同じ中学に通つてゐる子がいたか  
ら。訊いてもらつたのよ」

「あ、そうじゃなくてさ。嶋くんずっと、公星と武広のどちらを受  
けるか迷つてたんだよ。受験届けを出す当田に公星に決めたつて言  
つてたから、よくわかつたなあつて」

「あ、ああ。そういうことね。もちろんあの……女の勘よ」

「うわ、すつ……勘ですか」

瑞樹は感心したように両手の掌を合わせた。

「きつと、嶋先輩を想ひ気持ちが導いてくれたんですね……すうい、  
ユズ先輩」

そんな絶賛されるようなことでもないんだけど……。つか、瑞樹  
つて意外と口マンチスト？

あかりは興奮する後輩を見て笑つたあと、そのままの顔でわたし  
を見上げてきた。

「でも、残念だな。武広中との試合はよく覚えてるけど、ユズが  
観てたのは気づかなかつたよ」

気づいてればもつと早く友だちになれたのにね、と言いたげだつ  
た。わたしは、気づかれてよかつたな、と思いつつ、作り笑い  
を返す。ごめんねあかり。

ちなみに、あの試合で嶋くんに真っ先に声をかけたマネージャー  
はあかりだったらしい。

「私もどうかして空気を変えないとつて思つてたんだけど、どうしたらいいのかわかんなくて。そしたら、嶋君のあの粘りでしょ？ 気づいたら、声出して応援してた」

と、前にこの話をしたとき、あかりは言つていた。

「まあ、そんなところだからさ、わたしの話は。一人はなんか、そういう感じの人、いないの？」

瑞樹はまだ色々と質問したそうな顔をしてるけど、これ以上話すと言つちゃいけないことまで言つてしまいそうで、強引に話を逸らす。あかりも瑞樹も大好きだけど、どうしても言えないことだってあるのだ。

「私のタイプはねえ」

えへへ、つて感じの笑顔を浮かべるあかり。あー、知つてる知つてる。何度聞かされたことか。

「あだ名は『番長』で、髪はリーゼント。ブログは基本短文で、最後は必ず『口・口・シ・ク！』で締めるような人かな」「あかり先輩、どんだけマニアックな趣味してるんですか！ てか、そんな人いるんですか？」

「いるんだよねえ、これが。気になつたら『ハマの番長』で検索してみてね」「は、はあ……」

困惑気味にそう答える瑞樹。

とりあえず、あかりのことはこいとして……。

「瑞樹はどうなの？ 好きな人とかいないの？」

「いないんですよね、これが。そういう人がいなくても、いまは普通に楽しいです」

そう言つたあと、練習する部員たちにちらりと視線を向けて、

「あ、でも、野球部の中だつたら藤井先輩みたいな人がタイプです」「ええっ？」

思わず、そんな声をあげてしまった。ふ、藤井だと！

「アレのどじがいいの？」

「アレつて……。ゴズ先輩、さりげなく毒舌ですよね。あたし、ああいう感じの一緒にいて飽きなさそうな人がいいんです。常に新鮮な気分でいれそうだし」

「そうなんだ……」

あいつ、ただつるさいだけなのに。ものは言いよつだ。

そのときに、ふと気づいた。藤井はさつき、嶋くんの隣で素振りしてたはずなのに、いつの間にかいなくなつてゐる。

「あかり。藤井はどうしたの？」

「ああ、靴下変えるつて部室に行つたよ。水虫になりそうでキモチわりいつて」

「ふーん」

我ながら氣のない返事をする。なんとなく訊いてみたけど、そんなに興味のある話題じゃないし。そんなわたしの態度がおかしかったのか、瑞樹が軽く笑つた。

「ユズ先輩つて、藤井先輩が嫌いなんですか？ セツキからひどい扱いしますよね」

「そういうわけじゃないけど……」

嫌いまではいかないけど、うざいやつだとは思つてゐる。口を開けばわたしをイラつかせるし、いちいち声とリアクションが大きいし、名前が一樹だし。うざい要素を挙げていけばキリがない。瑞樹はわたしの内心を見透かすようにやつと笑つた。

「じゃあもしかして、あれですか？ ユズ先輩、トレーニングルームの予約を入れに行つたとき、藤井先輩とすれ違つても気づかないふりしてたとか？」

そんなことしてない。そもそも、

「わたし、藤井とはすれ違つてないわよ」

会つてもいらないなら、無視することすらできない。それぐらいの軽い気持ちで答えたんだけど、瑞樹は眉を寄せた。

「なんかの『冗談ですか？』

「まさか。こんなことで『冗談言わないわよ』

わたしが至つて眞面目だと知つた瑞樹は、ぱちぱちと何度も大きな瞬きをした。

「あたし、『裏庭ルート』から体育館まで行つたんですけど、藤井先輩とすれ違わなかつたんです。あたしがグラウンドを出たときは、まだ藤井先輩は帰つてきてなかつたのに。だからきっと、先輩は『

部室ルート』を通つて運動場に帰つたんだなつて思つてたんですけど……』

わたしを見上げてくる。ちょっとと考えて、やつと意味がわかつた。瑞樹は、わたしが『部室ルート』を通つて体育館に行つたことを知つている。だからさつき、わたしと藤井が途中ですれ違つたと思つていたんだ。だけ……。

「会つてないわ」

わたしは体育館に向かつたときのことを思いだしながら、はつきりと断言した。

「わたし、藤井には会つてない。ビリでも、  
「あたしもです。会つてません」

瑞樹が首を横に振る。事態を把握したあかりが、え、と呟き、わたくしたち二人に尋ねてくる。

「じゃあ、藤井君はビリを通つてグラウンドに帰つてきたの？」

雨が渡り廊下の天井を叩く音をBGMに、わたしと瑞樹が綺麗に声を揃えた。

「わかんない」

4

わたしがグラウンドを出て体育館へ向かつたのが四時三分。藤井が体育教官室でトレーニングルームの予約を入れたのが四時四分。

「あたしがグラウンドを出たのは、ユズ先輩が行つたちょっとあと、たぶん、二分後ぐらいです。でも、あたしがグラウンドから出たとき、まだ藤井先輩は帰つてきてませんでした」

そりやそうだ。体育館からグラウンドまでは歩いて約一分かかる。藤井が予約を入れた一分後に瑞樹はグラウンドから出たことになるから、普通に考えて、そのときはまだどっちかのルートを歩いている途中だろう。

「なのに、どうして誰も藤井に会つてないの？」

わかりません、と言つみづて、瑞樹が首を傾げる。

「あたし、『裏庭ルート』では誰にも会いませんでした。……あ、正面入り口の辺りで泥を落としてる渡辺先生とすれ違いましたけど、それだけです」

正面入り口の辺りで渡辺とすれ違つた、か。じゃあちょうど、わたくしが帰りの『部室ルート』に入つたときぐらいに瑞樹は体育館に来たんだ。わたしがもう少し遅いか、瑞樹がもう少し早ければ、体育馆前で鉢合わせしてただろうな。

「『裏庭ルート』についた足跡はどうだった？ 藤井の足跡が行きと帰りの両方ついてたとか、なかつた？」

「ええと……、わかりません」

瑞樹は困ったように笑った。

「いちおう、体育館前と同じように、軒下の辺りに足跡はあつたんですけど……。あの足跡、綺麗に靴底の形がわかるような足跡じゃないじゃないですか？だから、行きの足跡なのか帰りの足跡なのか、よくわかんないんです」

「ああ、そつか」

藤井の足跡は、スパイクについた泥がちょんちょん落ちてるだけの、本当なら「足跡」と言つていいいのかよくわからないものだ。そんなんだから、行きの足跡か帰りの足跡かはもちろん、片道か往復かもわからない。落ちてる泥の量を見て、一回通ったのか二回通ったのかなんて、わたしたちには判断できないし。わかるのは、最低一回は『裏庭ルート』を通つたってことだけだ。

「コズ先輩はどうでした？『部室ルート』に藤井先輩の足跡は残つてなかつたんですか？」

「実はそれも、よくわからないのよ。『部室ルート』は人通りが多くて、アスファルトがもともと泥で汚れてるから。藤井の足跡があつても、わからないと思うわ」

「そうですか……」

歯が痛いのを堪えるような顔で、瑞樹は宙を睨む。その隣で、あかりが表情を明るくした。

「もしかして藤井君、トイレに行つてたんじゃない？ 予約を入れ

たのは四時四分だけ、そのあとすぐ体育館から出たとは限らないわけでしょう。ユズが教室にいるときに藤井君はトイレから出て、グラウンドに帰ったんだよ」

「そのあとに『部室ルート』を通りて帰ったから、あたしに会わなかつたつてことですね？」

「そう。それなら、辻褄が合つんじゃない？」

難しい数学の問題が解けたときのような笑顔でそう訊いてくる。うれしそうなあかりには悪いけど、わたしはかぶりを振った。

「あかり。残念だけど、それは違うわ」

「なんで？」

「わたしが体育館に入るとき、入り口に藤井の靴がなかつたの」

あのときの玄関の様子を思いだす。靴を脱ぐところは泥で汚れてはいたけど、靴は一足もなかつた。これははつきり覚えてる。

「藤井君の靴がなかつたって、ユズ、靴箱をぜんぶ見回したの？」  
「それはしてないけど。でも、わたしたちは、トレーニングルームの予約を入れに行つただけなのよ。わざわざ靴箱に入れなくていいやつて、コンクリートのところに脱ぎっぱにしない？ わたしはそうしたけど……」

瑞樹に視線を向ける。

「あたしも脱ぎっぱにしました」

「でしょ？ わたしたちと同じ立場だったら、ほとんどの人は靴箱に入れないんじゃないかな」

そして、藤井は考えるまでもなく「靴箱に入れない」側だ。あか

りもそれはわかつてゐみたいで、納得したよつに頷いた。

「 そつだね。じやあつまり、コズが体育館に着いたときこゝ、藤井君はもう外に出てたつてことか

「 ますます不思議ですね」

瑞樹の言つとおりだつた。それじやあ尚更、わたしか瑞樹がどこかで会つてなくちゃいけないのに。

改めて、体育館周辺の構造を思いだす。

正面入り口を出ると、右に行けば『裏庭ルート』、左に行けば『部室ルート』。すぐ正面には中庭がある。

この中庭、裏庭みたいに地面が土で花が咲いてて、つてわけじやなく、単なるだだつ広いコンクリートの広場なんだけど、他に呼びようがないから「中庭」と呼んでこる。

そこまで考えて、ピンと来た。

「 体育館から出た藤井は、中庭に誰か知り合いを見つけたんじやない？ そこでじばらくダラダラ喋つて、そのあいだにわたしが体育館に入る。で、わたしが外に出てくる前に藤井はその人と別れて、『部室ルート』を通りてグラウンドへ。これでどう？」

わたしは『部室ルート』を歩いているとき、注意して中庭を見てたわけじゃない。眠たくて目がしょぼしょぼして、下を向いて目頭を押さえながら歩いたりもしていた。そんなんだから、中庭に誰かがいても気づかなかつただらつ。話し声は、雨音にかき消されて耳に入らなかつたのだ。

我ながら、この推理にはけつこう自信があつた。だけどあかりは、

わざわざわたしがしたよつい、はつきつと首を振つて否定した。

「それはないよ、コズ」

「なんですよ？ 藤井つて、なんだかんだだけつ じう友だち多いから、そういうことありそうじゃない？」

「それはそうだけど、ひょっと考えてみてよ。あのときは、雨が降つてたんだよ」

そんなことは言われなくてもわかってる。それで話し声が聞こえなかつたつて思つたんだから。

わたしがそう反論する前に、あかりは人差し指で宙を指した。

「雨が降つてるときつてさ、こんな風に、天井があるところで話さない？」

「あ……」

そうだ、あかりの言つとおりだ。現にいま、わたしたちだって、渡り廊下の天井で雨除けしながら喋つてる。誰だって不必要に雨に濡れたくない。

「中庭に藤井君の友だちがいたら、わたしが氣づかないわけがない。天井のあるところ 体育館の入り口の前ですよ」

そんなところに藤井がいたら、わたしが氣づかないわけがない。完璧に思えた推理は、あつさりと覆された。

「あつとこつ間に、白紙ね……」

「うん。どうやつたんだろうね、藤井君」

あかりと一緒に頭を抱える。こんな謎が解けたところでなにか貰

えるわけでもないんだけど、気がついてしまったからには放つておけない。わかんないままにしておくなんて、気持ち悪すぎる。

雨音に負けないぐらこの大きさで、ぱしん、と手と手を合わせる音が響いた。瑞樹だ。先輩マネージャーたちの視線を受けながら、後輩は鼻息荒く言った。

「あたし、わかりました。藤井先輩が、どこを通りでグラウンドに帰つたのか」

\*

「いいですか？ まず、『裏庭ルート』の構造を思い出してください」

もう完全に謎が解けた気になつてゐる瑞樹は、ドラマや小説の中の探偵のようにもつたいぶつて話し始めた。

「初めの半分ぐらいは庭で、あの半分は普通にアスファルトだね」「そうですね。この庭がくせ者だつたんですねー。」

庭にアクセントを置いて、力強く言い放つた。

「庭に生えた樹が邪魔で、『裏庭ルート』は少し見通しが悪くなるんです。そのせいであたしは、藤井先輩に会つてないと思ってたんですよ」

「え？ ちよ、ちよっと待つてよ」

推理の続きを予想できて、ついつストップをかける。

「つまりあれつてこと？」瑞樹は本当は藤井とすれ違つてたけど、樹が邪魔で見えなかつたつて言いたいわけ？」

「いくらなんでも、それは無理がありすぎる。ジャングルじゃないんだから。

瑞樹は、ち、ち、ち、と人差し指を振つて、

「そんなわけないじゃないですか。でも、言い方が少し悪かつたですね。あたしは藤井先輩と会つてはいません。ただ、見えるはずのところにはいたんです。それが、樹が邪魔で見えなかつたんですよ

「んん、どういづ」とだ？ 首をひねるわたしの横で、あかりが少し自信なさげに言つた。

「つまり、瑞樹が裏庭を歩いているとき、藤井君はその先のアスファルトの部分にいたつてこと？ 樹が邪魔で見えなかつたけど、二人とも『裏庭ルート』を通つてたつて言いたいの？」

「そうです！」

満面の笑みで肯定する。わたしは間髪いれず、問題を指摘する。

「でもそれだと、瑞樹が裏庭を抜けたときに会つちやうじやない

「そう、そこなんですよね。問題はここからです」

いいですか、と言つて、顔を近づけてくる。

「藤井先輩は『裏庭ルート』を通つてグラウンドに帰るつもりだった。でも途中で引き返して、『部室ルート』から帰つたんです！」

「えーーーっ？」

わたしとあかりが声をあげる。ちょっと声が大きくなってしまつて、近くで腹筋をしてた平野くんがこっちを見た。曖昧な笑顔を返す。

平野くんが筋トレに戻るのを見廻してから、瑞樹に向き直る。声を抑え気味にして、

「なんだそんなことを？　まさか、ただの気まぐれで、なんて言わないでしちゃうね？」

「当たり前じゃないですか、コズ先輩」

「まにも、まあまあ落ち着きたまえよコトソソンくん、とでも言いくつさうな調子だった。

「藤井先輩が引き返して『部室ルート』を通つたのは、単なる気まぐれとか、散歩がしたかったからとか、そういうんじゃありません。『コウイ』を感じたからです」

一瞬、瑞希の『コウイ』がなんのことかわからなかつた。頭の中でしばらへ考へて、やつと『尿意』に変換される。

「藤井先輩は尿意を感じ、トイレに行きたくなつた。だけど、『裏庭ルート』にはトイレがない。最寄のトイレは、体育館一階の男子トイレ。体育館に引き返すべきかと考へたとき、思つたはずです」

すつ、つと息を吸つて、一息に言つた。

「体育館に入つて、また靴を脱いで階段を上つてトイレに行へようは、部室棟の隣にある公衆トイレに行つたほうがいい」と

「あ、そうか！　そういうことね」

部室棟の隣にある公衆トイレ。確かに、わざわざ体育館のトイレに行くよりは、そっちを使つほうが手つ取り早い。あかりもしきりに頷いている。

「そうだね。私でもそつする。だから藤井君は、来た道を引き返してもう一度体育館の前を通り、『部室ルート』からグラウンドに帰つたんだね」

「そう、そういうことです。藤井先輩が『裏庭ルート』にいるときに、ユズ先輩は体育館に入つたんです。そして、あたしが裏庭を抜ける前に藤井先輩は来た道を引き返して角を曲がり、『裏庭ルート』から姿を消した。これで、すべての辻褄が合います！」

えつへん、と胸を張る瑞樹に、ぱちぱちと拍手するあかり。謎はすべて解決した、というような雰囲気だつた。

だけど、わたしはなにか違和感を感じていた。なんだろう、なんか見落としてる気がする。

体育館から出るときのことを思いだす。

靴を脱ぐところは相変わらず泥で汚れてて、入り口付近も、来たときと変わらず、藤井の足跡があつて……。

「あー！」

違和感の正体がわかつた。突然声をあげたわたしに、あかりと瑞樹が驚いたような目を向けてくる。その視線を見返しながら、一気にまくし立てた。

「瑞樹、違う！ あのとき、藤井は正面入り口の前を通つてない！」

「え、な、なんですか？」

「足跡よ。藤井は、汚れたままのスパイクで体育館まで来てた。だから、正面入り口のあたりは泥で汚れてた」

「それは、知つてますけど……」

「わかる? つまり、藤井が『裏庭ルート』を引き返して『部室ルート』を通つたんなら、正面入り口から『部室ルート』に続く道にも、藤井の足跡が残つてなくちゃいけないのよ。でも、それはなかつた」

わたしが体育館から出て『部室ルート』に向かうとき、渡辺に悪態をつかれてムカつきながらも、ちゃんと足元は見ていた。そこに、藤井の足跡はなかつたのだ。体育館前は、『部室ルート』と違つて汚れてなかつたから、藤井が通つたのならすぐにわかるはず。水で濡れてもいなかつたから、渡辺が洗い落としたということもない。

絶句している瑞樹の横で、あかりがわたしを見上げて言った。

「また、ふりだしつてこと?」

わたしは小さく頷いた。

「残念ながらね」

5

各自自由に喋りすぎて疲れたから、マネージャー用のボトルで水分補給をする」とした。

「……はい、ユズ」

「ありがと」

あかりからボトルを受け取る。適度に冷えた水がさりとひく喉を通つていくのが気持ちいい。飲み終わると、瑞樹に渡す。

「藤井君、いつたいどうやつたんだううね？」  
「さあねえ……。ってか、藤井遅くない？」

わたしたちがこうして話し始めてから、もう十分は経っている。部室に靴下を替えに行つたんなら、とっくに帰つてもいい時間帯だ。

「ほんとだね。どうしたんだろう。どうやつたのか訊きたいのに」「だめ。そんなことしないで」

ほとんど条件反射で反対する。あいつに答えを尋ねるなんて、プライドが許さない。

「そう言つても、私たちじゅうまい無理そうじゃない？」  
「んなわけないでしょ。もうちょっと考へねばぜつたいわかな」

瑞樹がボトルのキャップを閉めながら、ユズ先輩ってこんなに負けず嫌いでしたっけ、とあかりに小声で訊いているのが聞こえてきた。

ええそうです。普段はあんまり表に出せないけど、筋金入りの負けず嫌いです。しかも負ける相手が藤井っていうのが一番納得いかない。これが嶋くんならむしろ話すことができうれしいぐらいなのに。

「川口、部室の鍵貸してくれないか?」

「あかりが持つてるよ」

「あ、なんだ。じゃあ大原、鍵貸してくれ」

「さつき藤井君に貸したよ。たぶんまだ、部室にいるんじゃないかな」

「一樹に? そういえばあいつ、まだ戻ってきてないな。わかつた。」

サンキュー、二人とも」

「うん、じゃあね……って、嶋くんッ?」

考えるのに夢中になつてて気がかなかつた。わたしに話しかけてきたの、嶋くんじやん!-

いま気づいたように(本当にいま気づいたんだけど)名前を呼ばれた嶋くんは、ただけど、とこうように振り返つた。

「あ、いや、ごめん。……なんでもない」

だけど、わたしはつい、はぐらかしてしまつ。こんなときに雑談の一つでもできるようになればかなり変わるはずなのに。そんなわたくしの心情を知っているあかりが、背中を向けた嶋くんを呼び止めてくれた。

「ね、嶋君。ちょっと待つて」

一瞬わたしを見て、田を細くする。あかりがなにを言おうとしているのか、なんとなく予想がついた。

「私たち、三人で考えてもどうしてもわからないことがあったんだ。昨日の藤井君のメアードのときみたいに、少し考える手伝ってくれない？」

「ああ、いいよ。なに？」

「すつごい不思議なことがあつたんだよ。……ね、コズ」

「え？ う、うん」

「このタイミングでわたしにバトンを回すのか。わたしは声が上ずらないように抑えながら、嶋くんに例のでき」とを説明し始めた。

「あのね、嶋くん。実はさつき……」

視界の隅で、あかりと瑞樹がにやにやしているのが見えたけど、気にする余裕は無かった。

\*

話を聞き終えた嶋くんは、なるほどな、と言つて、考えるように下を向いた。

「よかつたですね、ユズ先輩」

うわ、びっくりしたあ。油断していたわたしの耳元に、瑞樹が突

然顔を寄せてきた。無邪氣な一年生はにやつと笑つて、いつ続ける。

「これで謎が解ければすつきつしますし、嶋先輩ともこりこり話せるじゃないですか」

「それはそうなんだけ……」

「こんなことで嶋くんの練習時間を削りてしまつていいのかな？早く練習を再開したいけど、断つきれずにこやいや考へてくれてるんじやないか」と思つて、ものすくへ申し訳ない。

「ね、嶋くん」

もういいから、練習再開していいよ。  
そう言おつとしたとき、嶋くんが顔を上げた。

「川口が体育館から出でてきたとき、水道で渡辺先生がバケツに水を溜めてたんだよな？」

「え？ うん、そうだけど」

「そして、武田が角を曲がつて体育館の正面に行くと、バケツを持った渡辺先生が掃除をしていた」

「はい、そうでした」

瑞樹とわたしは顔を見合わせる。いったいなんの確認だろ？  
そんなわたしたちに、嶋くんはなんでもないことのようにわざわざと言った。

「わかったよ。一樹がどこを通つてグラウンドへ帰つたのか  
「えつ？」

マネージャー三人、綺麗にハモつた。

「いまのでわかつたんですか、嶋先輩？」

「たぶんね。これは、一樹が野球選手だから起こったことだよ。マネージャーだつたら、『裏庭ルート』で普通に武田とすれ違つていたと思ひ」

野球選手だから起こつたこと？ 意味がまったくわからない。混乱するわたしたちに、嶋くんは軽く手を振つた。

「でも、俺も百パーセント自信があるつてわけじゃないんだ。たぶん当たつてるとは思ひナビ、確定ではないといふか……」

「あ、そつなんですか。じゃあやつぱり、藤井先輩が帰つてきたときに説くしかあつませんね」

それしかないのか。くつそ、悔しい。心の中で舌打ちするわたしの横で、嶋くんはゆつくり首を振つた。

「いや、俺の考えが正しいかどうかは、ハンドボールグラウンドに行けばわかるよ」

「え、なんでこじでハンドボールグラウンドが出てくるんですか？」

「それはちょっと、話すと長くなるんだナビ……」

「じゃあ嶋先輩、いまから行つてみてくださいよ。部室に行くつ

もりだつたんなら、通り道じゃなこですか」

嶋くんが、いいけど、と頷くと、

「じゃあ、コズも行つてきこよ、ハンドボールルート。嶋君と一緒に

「え？」

じたくさに紛れて、あかりがそんなことを提案してきた。

「ああ、そうですねえ！ さすがにマネージャーが揃って離れるわけにもいきませんから、あたしとあかり先輩は残つときます。つてわけで、ユズ先輩、行つてきてくださいよ」

してやつたりと言わんばかりに、瑞樹まで便乗。」  
「いつら、連携よすぎるだろ！」

「や、でも、鳩くんが……」

「ね、嶋君もいいでしょ？」ユズが一緒に「俺は『ざんざん』『いいサビ』」

「このかよー、いや、断られたらシヨックだね。でも、このかよー！」

躊躇うわたしの背中をあかりが肘でさりげなく押して、嶋くんの隣に並べる。それを見守る瑞樹の顔には、なんて言うか、人をイジるとき特有のにんまり顔が張り付いていた。先輩に向かつてこのヤロー。

「じゃ、行くつか

嶋くんが歩きだす。そうなったからには、もう、ついでいくしかない。後ろを振り返ると、瑞樹だけでなくあかりまであのこんまり顔を浮かべて、

卷之二十一

と、朗らかに手を振つてくれた。

雨に濡れなじように、できるだけ屋根のあるところを歩いた。だけど、そんなに都合よく広い屋根があるわけじゃない。一人で歩くなら平気でも、一人だとちよつときつときつときりかな、ぐらいの幅が多い。

つまり、一人で歩いているわたしたちは、自然と距離が近くなってしまう。

そのせいで、わたしは嶋くんとともに話せなかつた。緊張して声が出ないし、人とすれ違うたびに、いまの人がクラスメイトだつたらどうしようかと不安になつたりした。早くハンドボールコートに着け、と呪文みたいに頭の中で繰り返していた。

なにを話すでもなく歩いて、体育館が見えてきたとき、やつと嶋くんが口を開いた。

「川口は、正面入り口を出てすぐ渡辺先生に会つたんだよな？」  
「うん、そうだけど」

そつが、と言つてまた口を閉じる。嶋くんから話しかけてくれて、なんとなく気が楽になつたわたしは、ずっと気になつていたことを訊いてみることにした。

「ねえ、嶋くん。どうしてハンドボールコートに行けばわかるの？  
教えられる範囲でいいから教えてくれない？」  
「ああ、いいよ。さつき川口たちの推理を聞かせてもらつたけど、たぶん武田は、かなり惜しいところまでいつてたんだと思つ

瑞樹が？ 確かにわたしたち三人の中では一番納得いく推理だつ

たと思つけど、それでも矛盾点があつたはずだ。

いまは口を挟まず、黙つて嶋くんの話を聞くことにする。

「武田の考えたとおり、一樹は最初『裏庭ルート』に来て、途中で来た道を引き返して、『部室ルート』からグラウンドに帰つた。でもそれは、トイレに行きたかったからじゃない。『裏庭ルート』の途中で渡辺先生に会つたからだよ」

「渡辺先生に？」

「そう、渡辺先生に」

ちょっとだけ得意げに笑つて、嶋くんは話を続けた。

「渡辺先生つて、裏庭を管理してるだろ？だから、裏庭の方へ歩いていく一樹を呼び止めたんだよ。普通のスニーカーならまだしも、あのとき一樹はスパイクを履いていた。そんなもので庭を通られたら、せっかく手入れした土が荒れてしまうから」

そつか。確かにあの渡辺が、スパイクで裏庭を通ろうとするやつを見過ごすはずがない。呼び止めてなんやかんやと文句をつけるのが目に見えている。

「じゃあ、藤井は渡辺にいぢやもんつけられて、仕方なく『裏庭ルート』を引き返して『部室ルート』から帰つたってこと？」

「ああ、そうだよ」

いかにもありそうな話だ。正面入り口の前でわたしを見たとき、まったく野球部は、と苦々しげに吐き捨てたのも、直前に藤井を見たから出た言葉だったと思えば納得できる。

でもまだ、大きな謎が残つてる。中庭を歩きながら、わたしはその疑問を嶋くんにぶつけた。

「でも、嶋くん。それだと、足跡はどつなるの？ 藤井が『裏庭ルート』を引き返して『部室ルート』へ行つたんなら、その通り道に、足跡みたいに泥が付いてるはずじゃない。でも、それはなかつたのよ」

「それにもちやんと理由があるよ。裏庭を通るなと注意された一樹は、体育館の方へ引き返した。だけど渡辺先生は、体育館の入り口を泥で汚されるのも嫌だった。だから、体育館前を汚さないように通れつて言つたんだ。で、川口だったら、そう言われたらどうする？」

「ふざけんじやねえクソジジイ、って言つて、無視してそのまま帰る。なんて言えるはずもなく、とつあえず無難だと思われる答えを返した。

「『』めんなさいって謝つて、『』かでスパイクの泥を落としますつて言つかな」

「たぶん一樹も、そう答えたんだと思つ。で、考えてみてほしいんだけど、『裏庭ルート』でスパイクの泥を落とせそなとこりつてある？」

えーっと、アスファルトの上に落とすのはさすがに非常識だから、それ以外の場所。つてことは、裏庭しかないな。

……いや、待てよ。

裏庭の立て看板を思いだす。あれには、他の場所から持つてきた土を混ぜないでくださいと書いてあつたはずだ。スパイクにはグラウンドの土がついている。裏庭に泥は落とせない！

「『』にもないわ。『裏庭ルート』には、スパイクの泥を落とせる

といひはない……」

「そり。渡辺先生がいるから、看板を無視して裏庭に泥を落とすことはできない。やうなるともかく、泥を付けずに体育館前を通る方法は一つしかない」

わかつた？ と叫び、鳴くんがこっちを向く。わたしは小さく頷いた。

「スパイクを脱いで体育館前を通ったことね」

中庭を通ることもできるけど、それだと畠に当たつてしまつ。靴下は濡れちゃうけど、屋根のある道を行つたほうがいいと判断するのが普通だ。

いま思えば、藤井が、水虫になりそうで気持ち悪いと靴下を替えに行つたのも、このとき濡らしてしまつたからなんだ。よく考えると、スパイクを履いたままだと水虫になりそうなほどつまり、指先までは濡れない。穴の空いたスパイクならともかく、藤井のは新調したばかりだつたんだし。

「野球選手だから起つたこと、つていうのは、スパイクを履いてたからね？ スニーカーなら、渡辺に注意されることもなく裏庭を通れたし」

「うん、そりこり」と

前方にハンドボールグラウンドが見えてきた。鳴くんはそれを指差し、

「たぶんだけど、一樹は体育館の前を通つたあと、ハンドボールグラウンドでスパイクの土を落としたと思うんだ。グラウンドに帰つ

てきたとき、バイクに泥はついてなかつたから

\*

藤井がバイクを叩いて泥を落とした跡は、一瞬で見つかった。グラウンドの端っこ 体育館から一番近いところに、茶色い泥の中に混じって黒土があつた。裏庭を通つたせいで、靴底に黒土が付いていたのだ。この色は、ハンドボールグラウンドにはまずありえない。

「すごいね、嶋くん」

ハンドボールグラウンドから離れて、体育館の側面の軒下で雨宿りをしつつ、わたしは言った。

「ラッキーだつたんだよ。俺、一年のときは渡辺先生が体育の担当だつたから、どんな人なのかよく知つてたし」

「そんなことないよ」

嶋くんの言葉を首を振つて否定する。わたしだつて渡辺がどんなやつか知つてたけど、ぜんぜん気づかなかつた。あかりも瑞樹もだ。わたしたちが三人揃つて考へてもわからなかつたことを、嶋くんはあつさり解いてみせた。これは胸を張つてもいいことだ。

「わたし、嶋くんの推理を聞いてるとき、純粹に、すごいなつて思つたんだから。こう、謎がするする解けていく感じがして「サンキュー。なんか、そこまで言われると照れるな」

本当に照れくさやうに笑つて、頬をかく。そんな嶋くんの姿に、わたしは思わず、口を滑らせてしまつた。

「それに、す「ぐく、かつ」

「」今まで言つて、あとの言葉は条件反射で飲み込んだ。  
す「ぐくかつ」よかつた。

そんな大胆な言葉、言えるはずない。一片の嘘もない本音だけ、恥ずかしすぎて言えない。

「か？」

嶋くんが不思議そうな顔で聞き返してくる。  
「うしょ、なんて言つて」まかそう。俯いて、必死にそんなことを考える。だけどだんだん、無理に取り繕う必要はないのかな、なんて思えてきた。これはわたしの本音なんだから。それに、嶋くんはきっと、そんなことを言われても不快に思う人じやない。

「あのね、嶋くん！」

意を決して顔を上げ、嶋くんの瞳を真つ直ぐ見据える。嶋くんは一瞬、びっくりしたような表情になつたけど、視線をそらさず、わたくしと目を合わせてくれた。ぴりつとした、だけどどこか暖かい雰囲気の中で、わたしは続く言葉を言い切つた。

「わたし、嶋くんのこと、す「ぐく、かつ」

「あ「れえー、良次に川口じやねえか！ なにしてんだよ、こんなところで」

はずだつたのに、後半の言葉は、無駄にでかいその声によつ

て完全に洗えられた。

「一樹！ 今までなにしてたんだ？」

「予備の靴下<sup>くつした</sup>に置いたのかわからなくて、ずっと探してたんだよ。いっそり平野の筆箱の中に入れといたの忘れてたわ。で、お前らはなにしてたんだ？」

無遠慮にずかずかとわたしたちのほうに歩いてきて、藤井はそんなことを尋ねた。嶋くんは少し困ったよ<sup>う</sup>り、「あ、いや、と口<sup>くち</sup>もり、

「そういえば、川口。ごめん、最後のほう聞こえなかつたんだけど、なんて言つた？」

「あ、それはさ、あれだよ。あの……」

わたしの口は、勝手に動いて言葉を発した。

「すつじぐ、感動したつて言つたの！ 嶋くんの推理がどんどんつながつてくのが、感動したつて！」

「なんだ、そういうことか」

わざわざかしこまつて言わなくともここのこと、ここよつたな笑顔。そしてすぐ、藤井に向き直る。

「部室の鍵貸してくれ。バッティングの本取りに行きたいんだ」

「ああ、ほり」

鍵を受け取ると、サンキュー、と言つて、嶋くんはそのまま部室に歩いていった。

わたしはその背中を、なんとも言えない気分で見送った。やつを

までの「この雰囲気はどう？」

「あれ？ で、なんで川口まで一緒にいたんだ？」

藤井はこまわりやんなことを語りてくれる。答える坂井もひらひらない。わたしは空氣の読めないチビを置き去り、そのまま練習場所に向けて歩きだした。

「あ、おい川口！ おれを置いてくんなよー」

「……うつせえよ、アホ」

「あれ？ いま、おれのことアホうつた？ うわー、やっぱうつお前、ほんとは口悪ついよなあ」

あー、うつせえうつせえ。テメエがイラつかせるからうつなんだうつが。

後ろでギャーギャー騒いでるうつたのを放つておこて、わたしはそのまま、早歩きであかつたちの元へ帰つていつた。

朝、駅に向かつて歩いている途中、植え込みに咲く花が目にいった。花びらが六枚の白い花だった。

純粹一途に恋する乙女ことわたし、川口柚香は、歩道にしゃがんでその花をそつと手に取った。

もちろん、花占いをするためだ。同じ野球部の彼 嶋良次くんに片思い中のわたしとしては、根拠のない占いでもいいから、とりあえずなにかに励まされたいのだ。

息を止めて、そつと一枚目の花びらに手を伸ばす。嶋くんはわたしのこと……

「好き」

ふちつ、と花びらをちぎる。続いて、一枚目の花びら。嶋くんはわたしのこと……

「大好き」

花びらをちぎる。三枚目に手を伸ばす。嶋くんはわたしのこと……

「この世界中の誰よりも大好きー！」

ちぎる。

そんな感じで花占いを繰り返し、最終的に、嶋くんは家に帰るとわたしに会いたくて会いたくて震えるという結果になつた。非常に

よろしい。

朝からこんなステキな占い結果が出て、今日はいい日になつそうだな。わたしは上機嫌に鼻歌を唄いながら、駅に向かつた。

その予感とは程遠い一日になるとも知らず。

2

昼休み、お弁当を食べ終えたあと。

わたしは英語の予習をし、あかりはプロ野球の選手名鑑を読んでいた。隣の席に座つてはいるけど、それぞれ自分のことに集中していて特に会話は交わしていない。教室内もなんだか静かで、一言で言えば、穏やかな午後のひとときだった。

そんな静寂を破つたのは、わたしから見て斜め前の席から聞こえてきた、

「あつー。」

という声だつた。それに続いて、かしゃん、となにかが床に落ちる音。

なんだろう、とわたしは教科書から顔を上げた。声を上げたのはクラスメイトの佐藤夕子さんだつた。左手の人差し指を押さえている。机には乱暴に開けられたスナック菓子の袋が置かれていた。

「どうしたの、佐藤さん？」

なんとなくただごとではなさそうな雰囲気だつたので、あかりと一緒に席を立つて佐藤さんに近寄る。そしたら、ぎょっとした。佐藤さんが押さえている指から血が流れていた。それも、けつこうな量が。

「大丈夫ッ？ とりあえずこれ、使って」

ポケットからハンカチを取り出す。佐藤さんは、ありがと、と言つてハンカチで人差し指をくるんだ。黄色の生地に、じわじわと赤が染み込んでいく。

「どうしたの、それ？」

「ちょっとミスっちゃつて。お菓子の袋がなかなか開かなくてイライラしたから、筆箱に入つてたカッターで開けようとしたら、強く切りすぎちゃつて。指まで切っちゃつた」

「どんだけ力強く切つたんだよ。

あかりが屈んで、机の下に落ちていたカッターを取る。さつきの音は、これが床に落ちた音だつたのだ。

あかりは出血が続く佐藤さんの人差し指を見て、心配そうに眉を寄せた。

「保健室に行つて、手当してもらつたほうがいいね」

\*

公星高校の校門をくぐると、田の前には大きな建物が三棟、川の字に並んでいる。左から、教室棟、特別教室棟、理科室棟だ。三つの棟を過ぎるとコンクリートの広場、通称中庭が広がつていて、その先には体育館がある。

保健室があるのは理科室棟の一階。わたしたち一年四組の教室は教室棟の三階にあるから、まあまあ遠い道のりだ。

「えーー、じゃあヨシノリ、自分ひとりでお菓子食べるために、彼氏とお喋りするの切り上げたの？」

「ちょっとお、そんな大きい声で言わないでよ」

教室棟の正面玄関を出て理科室棟へ向かう途中、あかりと佐藤さんがそんな会話をしていた。

ちなみに佐藤さんは「紹介のときに「好物はヤクルトです」と  
言つて以来、あからから「ヨシノリ」と呼ばれている。休み時間に  
一緒に喋つてるのもよく見るし、けつこう一人の仲はいい。

対してわたしは、佐藤さんとそこまで話したことはない。もちろん、朝教室で会えば笑顔で挨拶はするし、なにか話をされれば愛想よく受け答えするけど、必要以上に話しかけることはない。もっともそれは、他のクラスメイトにも言えることだけど。例外はあかりぐらいだ。

「あのお菓子、なかなか売つてないレア物でさあ。今朝寄つたコンビニでやつと見つけたんだよね。誰にも邪魔されずに一人で食べようと思つてたのに……」

「天罰だね、天罰」

けらけらと笑うあかりに、佐藤さんがメンチを切る。この二人の  
ノリはいつもこんな感じだ。

「彼氏よりお菓子を優先する女子高生っていなくない? ねえ、ユ

「そうねえ。わたしだつたら、一緒に食べるかな」

口に出した瞬間、しまったと思った。予想通り、佐藤さんは驚いたように、

「え、なに、川口ちゃん、彼氏いんのッ？」

「ものすゞ」い喰いつきつぱり。こんな言い方をしたら当たり前だ。蝉の鳴き声をバックに、わたしはやんわり首を振つた。

「ごめん。もしいたらの話よ。いないわ、彼氏なんて」「へえー、意外。川口ちゃん、男子に人気あるのに」

ふふん。 知つてゐる。 知つてゐる。

「そんな」とないよ。わたし、あんまり男の子と話さないし」「あー。まあ、川口ちゃんはお淑やかだもんね。たぶん男子からしたら、高嶺の花なんじゃないかなー」

高嶺の花。なんていい響きだろ。当然与えられるべきポジショーンよね。

特別教室棟の前を通り、校門のすぐ右に売店があるおかげで、辺りにはパンやジュースを持った生徒がたくさん歩いている。

「あ、そうだ。そういえば、」

佐藤さんは何かを思いだしたよついで好奇心で輝く瞳をわたしに向けた。

「川口ちゃんって、六組の嶋良次のことが好きなの？」  
「え？」

自分でもびっくりするぐらい間抜けな声が出た。次いで、あかりに田をやる。なにも喋っていないよ、といつふうに首を振った。

「あの、佐藤さん。なんでそつ思つたの？」

「一昨日の昼休みさ、なんか野球部の会議みたいなことしてたじやん？」 教室で

藤井のメアド騒動のことだ。佐藤さんは、あれを野球部の話し合いでだと解釈したらしく。

「そのとき、嶋良次もいたでしょ？ で、川口ちやんの様子が、なんかいつもと違つて見えたんだよね。妙に緊張してるつていうか。じりやおかしいぞと思つて」

「そ、うなんだ。意外とみんな、見てるのね」

「うん。……まあ、嶋良次つてけつこう田立つし」

なんとなく含みのある言い方。意味はわかる。

ミーハーな女子高生にとって、野球部のキャプテンというブランドはかなり大きい。最近になって急に、教室の隅で交わされる「カッコいい男子会議」で嶋くんの名前が挙がるようになつたのは知つていた。

「アタシ以外にも、同じこと思つた人はいるみたいだよ。いまちょっととした噂になつてんだ」

「噂……」

それはぜんぜん知らなかつた。あかりも同じようで、知り合いがテレビに出演したことを聞かされたような表情をしている。

「でもこれつて、よく考えたらチャンスじゃない？」

生ぬるい風ではためく髪を耳にかけながら、わたしは考えをめぐらせる。

キャプテンになつた途端、嶋くんにキャーキャーする「一ハーラー層でも、相手がわたしとなれば敵いつこないと身を引くはず。前々から、あつちの人たちには黙つていてほしいと思つていたのだ。牽制するには絶好の機会じゃないか。

わたしは笑顔を作り、大きく頷いた。

「その通りよ。わたし、嶋くんのことが前から好きなの」「おお、やっぱり！ マネージャーとキャプテンの恋つて、素敵じゃん。アタシ、影ながら応援してるよ」

出血しないほつの手で握りこぶしを作る。小さことはいえ、いぢおつ怪我をしてるつてことを忘れさせるよつな元気さだ。 理科室棟に着く。中に入ると、冷房のおかげでだいぶ涼しかった。一番奥にある保健室田指して廊下を歩きながら、佐藤さんは楽しそつこ、

「つてか川口ひちやん、もつぱひちやつたら?」「田シノリ、気が早すぎだよ……」

あかりが呆れたようにため息をついた。

「野球部は部内恋愛禁止なんだから、すぐには告白なんてできないよ

よ

あれ、ちょっと、あかりさん？ セつか牽制しようとしたのに、それ言つちやうと意味ないじやん。

佐藤さんは目を大きく見開き、

「えー、もつたいない！ 川口ちゃんなら、ぜつたい即オッケーもらえるの！」

変な嫌味や皮肉は微塵も感じられない口調だった。うれしい気持ちを隠して、胸の前で手を横に振る。

「そんなことないよ。わたし、不安でいっぱいだもん」

「大丈夫だつて。そりや、嶋良次つてちょっと硬派っぽいけど、川口ちゃんならこけるよ」

ふふふ。いいぞいいぞ。もつと言ふもつと言へ。

「そうかなあ？」

「そうだよ。だって川口ちゃんがいゝ可愛い子つて滅多にいないもん」

それまで佐藤さんのナチュラルな褒め言葉に舞い上がっていたわたしは、いまの言葉で一気に現実に引き戻された。

わたしが可愛いことは、わたし自身が一番よくわかつてゐる。家に帰ると毎日、再現率バツグン、天然素材百パーセントの姿見で全身チェックしてゐるんだから。顔も可愛いし、スタイルだつていい。肌だつて綺麗だ。

でも、だからこそ。

「……わたしの場合、顔は武器にならない」

意図せず、思つたことがぽろりと口から出てしまつた。佐藤さんはもちろん、あかりまで目を丸くする。

「いや、川口ちゃん、そんなことないよ。嫌味とかじやなくして。めちゃくちゃ可愛いから」

「そうだよ。コズがそんなこと言つなんて、珍しい

「『』めん。あの、そういうのじゃないの」

わたしは早口に弁解した。

「嶋くんって、内面を重視する人だと思うの。だから、外見なんて関係ないだうなーって」

「いやー、でも、男だし。顔は大事だよ。川口ちゃん可愛いんだから、自信持つて」

「あ、ありがと『』」

「めんね。自信は大いに持つてるよ。  
気がつくと、保健室はもうすぐ近くだった。階段を過ぎればすぐそこだ。

「ヨシノリ、もつ血は止まつた?」  
「うん、『』おつか」

あかりと佐藤さんの声にまぎれて、誰かが階段を下りてくる足音が聞こえた。なんとはなしに目を向けてみると、  
その途端、背筋がひやりとした。

二階から、一人の男子生徒が下りてきた。中肉中背で、髪は長く  
も短くもない。銀色のフレームの眼鏡をかけていて、目はちょっと  
釣り目気味。間違いない。

熊代くんくまじゆだ。この学校で唯一、わたしと同じ中学から来ている、  
熊代隆康たかやすくんだ。

なんで彼がここに? ?

「どうしたの、コズ?」

あかりに軽く背中を叩かれた。それでやっと我に帰る。なんでもクソもない。理科室棟に生徒がいるのは当たり前じゃないか。

「「めんあかり、なんでもない」

熊代くんはそのまま保健室とは逆方向に歩いていった。すれ違うとき会釈ぐらいはされるかもしないと思つたけど、特にそういうことはなかつた。当然か。わたしたちは同じ中学だったけど、話したことは一度もないんだから。

なんとか気持ちを落ち着けて、あかりたちと保健室へ。白いスライドドアは綺麗に閉められていた。失礼しまーす、とお決まりのセリフを言つて、ドアを開ける。

「あれ、尾花先生じゃないですか

室内を見たあかりが、驚いたように声を出した。

養護教諭の真弓先生と一緒に中央の長椅子に腰掛けっていたのは、社会教師の尾花先生だった。少しほつちやりしてるのが可愛いと、生徒から人気のある三十代半ばの男教師だ。どうやら、二人で話をしていたらしい。生徒の姿は見えない。

尾花先生はちょっとこめかみを人差し指で突いた。

「ちょっと頭痛がしてね。薬を貰いに来て、そのあと少し話を

ふーん。……ま、そんなこともあるのかもしれないけど。

それじゃあ僕はこれで、と挨拶して、尾花先生は保健室から出て行つた。スライドドアが閉まる音を合図にしたように、

「あなたたちは、どうしたの？」

先週まではかけていなかつた縁なし眼鏡を押し上げて、真弓先生がそう訊いてきた。歳は二十代の後半。どういづわけかだいぶ日焼けしていく、それを『こまかすためか、いつもより濃い化粧をしている。ちなみに、『真弓』というのは苗字だ。下の名前は知らない。佐藤さんが前に出て、怪我した指を見せる。

「カッターで指切つちやつたんです。出血はこまかく止まつたんですけど」

真弓先生は、そこまで近づく必要ある？と思つぐらう顔を近づけて傷口を見た。

「そこまで深くないわ。消毒して絆創膏を貼れば大丈夫」

ちょっと待つて、と言い残して、キャスター付きの『』棚のほうに歩いて行く。たぶん、薬箱を出すつもりなんだろう。立ちっぱなしもあるので、わたしたちは保健室の中央にある長椅子に腰掛けた。

部屋の右側にはカーテンつきのベッドが三つ並べてあって、中央には机と長椅子。左側には薬品の入った『』棚とミニ冷蔵庫、奥のほうには裏口とトイレがある。室内にトイレが備えついているのはちょっと珍しいかもしだいけど、それ以外は特に変わりない普通の保健室だ。

「てかせ、ありがとね、一人とも。特に川口ちゃん」

佐藤さんが申し訳なさそうにハンカチをわたしに見せる。

「ハンカチ貸してくれたのに、こんな血だらけにしちやつたし。洗

つても落ちなかつたら弁償する」

「そんなことしなくて大丈夫よ。同じものが家にあるし」

「マジで？ 川口ちゃんて、ほんといい子だよね」

あかりがにやつと笑つて、肘で突いてくる。なによ、その冷やかすような顔は。

薬箱を取つてきた真弓先生が、わたしたちとはテーブルを挟んで反対側の椅子に座つた。

「ちょっと染みるだろうけど、我慢してね」

取り出したガーゼに消毒液を垂らす。それを見た佐藤さんが、う、と微かに声をもらした。気持ちはわかる。あんなに大量の消毒液を染みこませたガーゼがいまから自分の傷口に当たられるなんて、想像するだけで痛い。

「さ、手を出して。すぐに終わるから」「は、はい」

佐藤さんがちょっと震える声で返事し、人差し指を差し出す。真弓先生は眼鏡を押し上げて、ゆっくりとガーゼを近づけていく。

「あー、あだだだ！ あいたた痛い痛いッ！…」

保健室に佐藤さんの悲鳴が響き渡る。が、頑張れ、佐藤さん！ 負けるな、佐藤さん！

「……はい、消毒終わり。ごめんね、痛かつたでしょ？」「

「いえ、ぜんぜんデスヨ」

「ヨシノリ。無理あるから、それ」

「真弓先生は絆創膏を取り出すと、佐藤さんの指に鼻が付きやつこなるぐらい顔を近づけて、慎重に貼つていった。

「オッケー。しばらくしたら治るわ」

やつと絆創膏を張り終えた真弓先生が顔を上げる。漫画なり、きらつと輝く汗が一筋頬を伝いそうなぐらい表情をしていた。最後に、絆創膏を貼り直すときは傷口を充分に乾かしてから貼ること、などの軽い注意事項を聞いて、わたしたちは立ち上がった。

「それじゃあ、真弓先生。どうもありがとうございました」

三人で会釈する。真弓先生も笑顔で手を振ってくれた。外に出ようとして、スライドドアに手をかけたとき……。

がちやつと音を立てて、ドアが開いた。わたしたちの正面にあるスライドドアが、ではない。奥にある裏口のドアだ。

「じめんコキエ、遅くなつちやつた。でもちやんと買つてきたから」

ショートカットの女の人が、駅ビル内の百貨店のビニール袋を提げてやつてきた。歳は大体、真弓先生と同じぐらいに見える。コキエつてこつのは真弓先生のことだらうけど、この人いつたい誰？

「ほんとありがとうね、エリ。大変だったでしょ？」

「そりやもう。暑いだけならまだしも……」

真弓先生と謎の女の人の会話を聞いていたわたしの背中を、あかりがとんとん叩く。

「どうしたのコズ? 行こ」

「ああ、うん。ごめん」

保健室を出て廊下を歩く途中、あかりに小声で訊く。

「ね。さつきの人誰だっけ。なんか、真弓先生とすっごい親しそうだつたけど」

「え、原先生のこと? カウンセラーの先生だよ。特別棟の一階にあるでしょ、カウンセラー室」

あかりはまじまじとわたしの顔を見て、

「つてか、先週の保健体育の授業で来てたじやん。渡辺先生の手伝いで」

「……えーっと、そうだっけ?」

「そうだよ。もう忘れたの?」

「あはは。……うん」

ちゃんと人の顔は覚えなよー、とあかりがため息をつく。なにも返せる言葉がないので、笑つて受け入れた。

「ま、原先生、普段は眼鏡かけてるのに今日はかけてなかつたもんね。それで印象変わつて、わからなかつたんじやない? ところでさ……」

廊下を歩きながら、佐藤さんはじことなく照れくさそうな顔をわたしに向けた。

「アタシ、人のこと苗字で呼ぶの苦手なんだ。柚香って呼んでいい?」

わたしは笑顔で頷いた。

「もちろん。でも、柚香じゃなくてコズでいいよ。そっちのほうが短くて呼びやすいでしょ？」

「まじで？ やつたね！」

うれしさをぶつけるように、佐藤さんは体当たりで入り口のドアを開ける。その強さたるや、半ばタックルの領域。怪我の原因といい、佐藤さん、力加減するの苦手？

「アタシのこともタ子でいいから。じゃ、アタシ先に教室行くね！ お菓子パーティーしようよ。準備してるからー！」

そう言つて、理科室棟を出ると、佐藤さん改めタ子ちゃんは全力ダッシュで教室棟へ向かつていった。わたしはその後ろ姿を見て、思わず笑つてしまつた。

「なに？ お菓子パーティーって、さつきのあのお菓子だけやるの？」

「まあ、ヨシノリはけつこう、ノリに任せたんだから。……でも、よかつた」

わたしを見上げて、あかりは口許を緩める。

「コズって意外と人見知りじゃん？ だから、ヨシノリに嶋くんの話したの、なんかうれしかつたよ」

「あ、ああ。まあね」

「うん。ヨシノリもや、コズと仲良くなりたいなーって前から言ってたんだ。それでさつきもあんなによろこんでたんだと思つ。これ

からもつと話してさ、友だちになりなよー！」

顔をくしゃっとさせて、満面の笑顔。屈託のない笑みといつ言葉がこれ以上似合う表情はない。

あかりは、どうしてわたしが嶋くんのことを打ち明けたのか気づいていないのだ。人見知りな友だちがクラスメイトに心を開いたんだと解釈して、素直によろこんでくれている。まさか、周りの同級生を牽制するためだとは、夢にも思っていない。

「……うん、頑張るわ」

わたしはそう返しながら、心の中で小さくため息をついた。

昼休みの時点ではわたしの精神状態はあまりいいものじゃなかつたけど、本当の悲劇は部活中に訪れた。

日が落ち始めてきた六時十五分ころ、選手のみんなは主練をしていました。六時半からベースランニングが始まるから、それまで余つた時間は各自好きなトレーニングを、ということだ。

わたしたちマネージャー陣はバックネット裏のベンチに座つて、ほつれたボールを縫つたりスコアブックのデータをまとめたりしていたけど、それらの作業はあまりはかどつていなかつた。なぜなら……。

「なんで今日、こんなに気持ち悪い暑さなんですかねえ？」

ひぐらしの大合唱が響く中、瑞樹が心の底からうんざりしたようにうとうき出す。わたしとあかりは緩慢な動作で首を縦に振つた。日が落ちてきて直射日光が弱くなつたぶん、かえつて身体に張り付いてくるねつとりした蒸し暑さが強調されている。断つても断つても、データに誘つてくる勘違い男みたいな不愉快さだ。こんな中で作業に集中できるわけがない。

「せめてもうひとつ爽やかな空気になつてほしいよね……」

ほんやつした顔でボールを縫いながら、あかりが愚痴をこぼす。

「反則ですよね。せっかくお団子にしたのに、空気 자체がもあつとしてたら意味ないですよ」

我慢できない、と嘆つよう瑞樹が頭を振る。嘆つとおり、今日の瑞樹はお団子ヘアーだった。頭に血が上りやすいせいで髪を高い位置で結べないわたしからしたら、羨ましいヘアースタイルだ。

「あたしたちでこれだから、動いてる選手たちはもつとキツイでしょうね」

「そうよね。熱中症にならないといいけど……」

言いながら、わたしはライト側のファールゾーンに目を向ける。そこに設置されたネットに、嶋くんがボールを投げ込んでいた。さつきやつた試合形式ノックでは、ランナーが盗塁する場面もあつたけど、嶋くんはきつちりセカンドベースでランナーを刺していった。昨日は送球が荒れていたらしいけど、すぐに修正できるのがすごい。いまボールを投げ込んでいるのも、調子のいいときのスローイングを忘れないためだろ？。ほんと、ビックリでも眞面目で努力家だ。

暑さに負けかけていたけど、そんな嶋くんを見ているとわたしも頑張らなくちゃという気になってきた。グラウンドには水の入ったボトルがいくつか置かれている。そろそろ水が無くなるころだから、補充しよう。わたしはスコアブックを閉じ、立ち上がった。

「ボトル回収していく。……あ、いいよ瑞樹。休んでて」

あたしがやりますよと立ち上がりかけた後輩を制する。いつも率先して雑用をやってくれる一年生に甘えっぱなしじゃ申し訳ない。……それに、嶋くんの近くにもボトルがあるから、回収ついでに軽く話ができるかもしないし。

一つ二つとボトルを回収し、三つ目、嶋くんの近くにあるボトルに近づく。ゆっくりと腰を落としてボトルを拾いながら、ボールを投げる嶋くんを見る。手抜きの「て」の字も感じられない真面目な表情。かっこいいなあ、もう。その奥に藤井さえ見えなければ、写真に撮つて部屋に飾りたいぐらいなんだけど。

嶋くんが一息ついたのを逃さず、わたしは声をかけた。

「嶋くん、頑張つてね」

「ん？ ああ、ありがと」

会話終了。またボールを投げ始める。……まあ、練習中はこんなもんよね。

さつさと次のボトルを回収し、と嶋くんに背を向ける。まあ、次は……。

「危ねえ、川口ッ！」

後ろからそんな声が聞こえてきた。なんだろう、と振り返った瞬間。

左頬に衝撃が走った。絶えられず、顔がのけぞる。手に持つていたボトルがせんぶ地面に落ちる。頬を手で押さえたままふらふらと後ろに何歩か後退して、わたしはグラウンドにうずくまつた。左頬の衝撃が徐々に痛みに変わっていき、それに伴つて熱を帯びていく。

頬にボールが当たつたんだ。わたしはやつと、それを理解した。わかつた途端に痛みが三倍ぐらい増した気がする。目からは涙が溢ってきた。

「ユズ！ 大丈夫？」

あかりの声が聞こえてきた。次いで、背中をさすりられる感触。

「大丈夫っ？ 息はできてる？」

小さく頷く。

「そつか。よかつた」

ほつとしたようこ言ひ。ぜんぜんよくない。すつじい痛い。顔の骨折れるかもしねない。

周りに人が集まつてくるのが足音でわかる。ひそひそと交わされる会話に混じつて、よく通る声が聞こえてきた。

「大原、保健室に連れてってくれ。俺もあとで行くから」

野村先生だ。あかりはわたしの肩に手を回した。

「歩ける？ 一緒に保健室、行こ」

なんとか立ち上がり、あかりに支えられて歩く。グラウンドから出る直前、

「あかり先輩。これ

と、瑞樹が氷の入った袋を渡してきた。あかりはそれを受け取り、わたしの左頬に当てる。キンキンに冷えているはずなのに、痛みや痺れのほうが圧倒的に強くて、あまり冷たさが感じられなかつた。

「ありがとね、瑞樹。それから、ごめんね。あとよろしく」

「任せてください。ユズ先輩、あたしもあとで行きますから」

「気遣つてくれる瑞樹に、わたしは小さく頷くのが精一杯だった。

\*

「……うん、骨には異常ないと思つわ。腫れもそんなにひどくないし」

長椅子に座るわたしの顔をしばらく観察して、真弓先生はそう結論を出した。

「左耳が聞こえ辛いとか、そういうこともないのよね?」  
「はい。それは大丈夫です」

左頬に氷袋を当てたまま、わたしは答えた。  
時刻は六時半を少し過ぎたころ。保健室内にいるのはわたしたちだけ。

ボールが当たった直後に比べて、痛みはだいぶ和らいやわできた。それにしたがつて、徐々に気持ちも落ち着いてきた。

「嶋君に感謝しないとね、ユズ」

隣に座るあかりがほつとしたような笑顔で言った。

「平野君とキャッチボールしてた藤井君が暴投して、それがユズに当たったんだけど、その直前に嶋君が手で弾いて勢いを殺してたんだよ。そのまま当たつてたら本当に骨が危なかつたかも。けっこう強い送球だったから」

「そりだつたんだ……」

嶋くん、わたしのためにそんなことを。うれしい、と思つ気持ち半分、藤井のヤローはいつたいどれだけわたしに危害を加えれば気が済むんだあんチクショウと憤る気持ち半分。手放しに喜べないし、怒れもしない感じだつた。

「大丈夫だとは思つけど、数日たつても痛みが引かないときは病院に行つてみて。領収書があればお金は学校から下りるから」

「はい。どうもすみません」

「もう少しあつたら、湿布を貼りましょうね」

そう笑つて、真弓先生は立ち上がりて冷蔵庫の方へ向かつた。訊くならいましかない。わたしは顔から氷袋を離し、あかりに向き直つた。

「あかり。わたしの顔、どうなつてる？ 悪とかできてない？」

あはは、とあかりは笑つた。……どう見ても、言い難いことを「」まかすときの笑い方で。

「……うん、できてる」

わたしはがつくりと肩を落とした。

「あ、でも、アレだよ？ 腫れはあんまりひどくないんだよ」

なによそれ。つまり、癌はけつじうひじうじことじやない。

「心配しなくても、一週間もたてば内出血は治まるわ。それまでは湿布で隠すことね」

真弓先生が、お茶の入ったコップをわたしたちの前に置く。あかりは、どうもありがとうございます、とお礼を言つてたけど、わたしはそんなことをする余裕がなかつた。

一週間も、顔に痣が。わたしの、誰もがうらやむこの顔に、痣が。ショックで氣絶しそうだつた。しかも、それを隠すために顔に湿布を貼つてなきやならないなんて。わたしの美貌が台無じじやない。

「でも、あなたたち野球部だつたのね。お風に来たときも、日焼けしてゐるなとは思つたけど」

わたしたちの反対側の椅子に座つて、真弓先生は言つた。

ちなみに、わたしの名誉のために言つておくけど、わたしはそこまで日焼けしていない。通販で定期購入している高価な日焼け止めを休憩時間ごとに塗り替えてるし、そもそも太陽に当たる機会が他の部員よりは少ないから。一見して外の部活をやつているなどわかるのはあかりのほうだ。

「私も今年、姪っ子が野球部に入つたのよ。まだ小学生なんだけどね」

「へえ、女の子で野球部つて珍しいですね。私は昔から野球好きでしたけど、自分でやろうつて思ったことないですよ」

「まあ、その子は男勝りだからね。漢字の一に姪つて書いて『一姪<sup>かずき</sup>』っていうんだけど、もう、名前とは真逆のおてんば娘になっちゃつて。このあいだの日曜に初めて試合の応援に行つたんだけど、あんなに暑い中でよく動けるなと思つたわ」

「もう慣れちゃいましたよ。ね、コズ？」

首を縦に動かす。

「そうなの？ すごいわねえ。私なんか、一試合観ただけなのにあ

つという間に日焼けしちゃって。普段日に焼ける機会がないから、余計参つちやつたわ」

「あー、あんまり日に当たることがないならきついですね。私は中学でもマネージャーしてたんですけど、最初の頃は大変でした。汗もすごかつたんじゃないですか？」

「そうなのよ。まあ、汗は最初から覚悟してたから、化粧もしないですっひんで行つたんだけどね。ここまで焼けるとは思わなくて」

思わぬ盛り上がりをみせるあかりと真弓先生の隣で、わたしは会話に参加することもせずぼんやりしていた。

一週間、顔に、痣。一週間、顔に、湿布。

その事実がわたしのテンションを絶賛ガタ落とし中だった。すぐには立ち直れそうもない。

雑談に勤しむ養護教諭と野球部マネージャーの隣で、負のオーラを発するもう一人のマネージャー。そんな構図が数分続いたあと、やや乱暴に裏口のドアが開かれた。

「ユズ先輩！ 大丈夫ですか？」

もう一人のマネージャーの登場だった。瑞樹は着替えもせずジャージのままで、大量の鞄と制服を持つていて。あかりが驚いたような表情で訊いた。

「私たちの鞄と制服、持つててくれたの？」

「はい。ベーランが終わるともつ部活終了したんで、すぐ帰れるようにと思つて」

靴を脱ぎ、保健室内に入つてくる。ちなみに、『ベーラン』はベースランニングの略だ。

「骨とかには異常ありませんでした?」

「大丈夫みたい。心配してくれてありがと」

「本当ですか? よかつたあ——」

胸に手を当てて、大げさに息を吐く。最初の頃は、この大げなリアクションはわざとやっているのかと疑つてたけど、最近これが瑞樹の素だとわかつてきた。人のことで一喜一憂できるところのは、少し羨ましいではある。

「ありがとね、瑞樹」

「いえいえ。あ、そりやつ」

鞄と制服を机に置くと、瑞樹は今日の夕飯を告げるかのような気軽さで言つた。

「もうすぐ、野村先生と藤井先輩と嶋先輩が来ますよ。あたしは走つて先に来たんですけど」

……え?

思考が一瞬フリーズする。いまからここに来る? 誰が? 野村先生と、藤井と 嶋くんが?

「真弓先生、湿布! 湿布貼つてください、こますぐ!」

「え、どうして? もう少し冷やしてからのほうがいいと思つたけど」

そんな悠長なこと言つてられるか! 野村先生は、わたしの怪我の具合を確認するために近づいて来るだらつ。そのとき、先生のそばに嶋くんがいたら……。

癌のできた顔なんて、嶋くんに見せられない!

「いいから早く！　いますぐ貼つてください湿布をお願いします！」

湿布をツ！」

「わ、わかった。わかったから、落ち着いて。ね？」

わたしの剣幕に圧倒されたらしく、眞弓先生は腰をあげた。若干、興奮してナイフを振り回す危ない人を見るよつた目になつてたけど、それはこの際どうでもいい。

息を整えながら裏口に目をやる。まだ開く気配はない。よし、いいぞ。先生がわたしの顔に湿布を貼り終えるまでは、そのままでヨロシク。

ぽん、と両肩に手を置かれる。右肩はあかり、左肩は瑞樹だった。

「ユズって、なんだかんだで乙女だよね」「カレに傷を見られるなんてイヤ！　ですか。かわいいですねー」

一人して盛り上がりしている。もう、言い返すのも面倒くさい。お願い、眞弓先生。早く湿布持ってきて。なんか変な汗かいてきたから。

そんなわたしの想いが通じたように、先生は早々と戸棚から湿布を取り出し、戻ってきた。

「じゃあ、貼りましょうねー」

「お願ひします」

顔から氷の袋を外す。先生は手元のタオルを取つて、袋の水滴で濡れたわたしの左頬をぬぐつた。

そして、黒縁眼鏡を押し上げながら、小声でこんな質問をぶつけてくる。

「ねえ、川口さん。もしかして、野球部に好きな人でもいるの？」

「えッ？」

「ああ、やつぱりそうなんだ」

「あの、いやべつにそんなことは……。あの……」

軽く深呼吸。声を小さくして、続ける。

「なんでわかつたんですか？」

先生はくすっと笑つて、

「そりゃあわかるわよ、あなたの態度を見たら。野球部に好きな人がいるから、顔の痣を見せるのが嫌だったのね」

わかるわかる、と笑い混じりに言つて、湿布のフィルムを剥がす。

「私もね、こないだの野球観戦で……」

続く言葉を、真弓先生は飲み込んだ。裏口のドアが開いたからだ。

「失礼します」

野村先生が入つてくる。それに続いて、藤井も。そしてその後ろには、嶋くん。一人ともまだユニフォームだ。

「あ、先生。すみません、けつきよく部活に戻れなくて」

あかりと瑞樹が立ち上がり、嶋くんから隠すようにわたしの前に立つた。その隙に、真弓先生が湿布を貼る。

「いや、それは構わんよ。ところで川口、大丈夫か？」

「はい。痛みももつほとんどないですか」

あかりと瑞樹にありがとうとアイコンタクトして、近づいてくる野村先生にひょこと顔を見せせる。もう湿布は貼つてあるから、癌は見えない。

「軽い打撲ですね。一週間もすれば治ります

「そうですか。それはよかったです」

野村先生の表情が緩む。縦にも横にも大きい身体で顎鬚まで生やしている四十五歳の野球部顧問は、一見すると厳ついけれど、よく見ればけっこう優しい瞳をしている。

その野村先生の後ろから、ぱたぱたと騒がしく足音をたてて、藤井が近寄ってきた。

「川口、まじ、じめんな！ ほんつとに悪かった！」

わたしの前に立つなり、手を合わせて深々と頭を下げる。ま、女の子の顔にボールをぶつけたつてことを考えれば、最低限の誠意よね。

「大丈夫よ、藤井くん。わたしはもうなんともないから」「ほんとかあ？」

顔をあげてそう訊いてくる。演技ではなく本気で責任を感じている。普段ちゃんとほらんなこいつがあまり見せない表情だった。完全にイラつきが消えたわけではないけど、まあ許してやってもいいかな。

「ほんとかほんとか。もうぜんぜん痛くないわ

藤井は、よかつたあ、と胸をなでおろしたあとで、鞄から財布を取り出した。

「ちょっと待つてろよ。お詫びやるから」「え？ いや、お金なんていらないわよ」「なに言つてんだ。おれ、そんなに金ねえよ」

財布からぐしゃぐしゃのレシートを出して、机の上の鉛筆を取り、裏になにか書く。そして、

「これ、肩たたき券！」  
「…………」

でかでかと『一回五分』と書かれたレシートを渡された。藤井の後ろで、瑞樹と真弓先生が必死に笑いをこらえている。

「(+)希望なら、肩もみ券にもなるんだぜ?」「そ、そ、そ、う、な、ん、だ。あ、り、が、と、う、…」

こちおうポケットの中にしまつておく。家に帰つたら捨てよう。こいつに肩触られるの嫌だし。

「川口。本当に大丈夫なのか？」  
「あ、うん」

ずっと藤井の後ろで黙つていた嶋くんが、やつと口を開いた。元気ですよとアピールするために、わたしは大きな笑顔を作る。

「もう痛くないわ」

「そつか。でも、『ごめんな。俺がボールを捕れてれば……』  
『え？ そんなことないよ』

嶋くんのおかげで軽症ですんだのであって、なにも謝ることなんてない。むしろ、わたしがお礼を言わなくちゃいけないのに。

「だが、まあ、なんともないならよかつたよ」

わたしたちの会話は、野村先生がそう言つたことで断ち切られた。

「骨になにかあつたら、本当に一大事だつたからな。……ただ、歩くのが大変なら、家まで送つてくれ」

「いえ、そこまでしていただかなくて大丈夫です！」

慌てて首と手を振る。家までは遠いし、なにより、ついでに両親に挨拶を……なんてことになつたら笑えない。  
先生はふつと口許を緩めて、

「そこまで元気なら大丈夫だな。じゃあ、俺はもう帰るよ。お前らも、長居するとい悪いからもう帰れ」

「そうですね。でもその前に、着替えていいですか？」

藤井が半笑いでユニフォームの袖をつまむ。  
野村先生はちらりと真弓先生に目をやつた。

「じゃあ、保健室はもう閉まる時間だから、他の場所で着替える」「いえ。ぜんぜん大丈夫ですよ、着替えてからで。私も特別急いでるわけじゃないですし」

真弓先生は気さくに笑つて左右に手を振つた。野村先生はまだ少

し遠慮がちだつたけど、そうですか、と納得してくれたようだ。

「お前ら、あんまりゆつくり着替えて先生に迷惑かけるんじゃないぞ。……じゃあ、すみません、私はお先に失礼します。眞弓先生、どうもありがとうございました」

ペニシリと頭を下げる、野村先生は来たときと同様、裏口から外に出て行つた。

戸が閉まるのとほぼ同時に、嶋くんがぱしんと手を打つ。

「じゃあ、俺たちも着替えよう。眞弓先生、ベッドを借りてもいいですか？」

カーテンを引いて、更衣室代わりにしようとひらひら。

「どうぞどうぞ。じゃあ私はそのあいだ、外に出ておくわ。そうしたら、みんな一齊に着替えられるわよね？」

「はい。どうもすみません」

「いえいえ。じゃあ、終わつたら呼んでね」

テーブルの上からケータイを取つて、保健室から出て行く。

保健室には野球部が五名残された。嶋くんは鞄と制服を手に立ち上がると、

「俺たちがベッドで着替えるよ。着替え終わつたら呼んでくれ」

行くぞ、と藤井の背中を叩く。カーテンを閉める直前、覗かないでくださいねー、と瑞樹が笑顔で釘をさした。

わたしたちも各々制服を取つて、着替えを始める。その途中で、あかりがぽつりと言つた。

「真弓先生って、ちょっと変わってるよね」

「どうが？ 普通にいい人じゃない」

「ああ、うん。いい人だとは私も思うけど……」

あかりは急に口を開じ、じつとわたしを見つめてきた。わたしはシャツのボタンを閉めながら見返す。

「なに？」

「……もしかしてユズ、氣づいてない？」

訊きながら、あかりはちゅんちゅんと鼻の頭を叩いた。

「なにそれ、どういう意味？」

「やつぱり……」

あかりは小さくため息をつくと、続けてこう言った。

「眼鏡だよ。真弓先生、眞とこまとでぜんぜん違う眼鏡になつてた

4

「真弓先生の眼鏡が昼と夜とで変わっていた。

考えもしなかったことを言われ、わたしは思わず話を返してしまつた。

「え、 そうなの？」

「うん。 いまは黒縁の眼鏡だけど、 お昼は薄いピンク色の縁なし眼鏡だったじゃん」

お昼の真弓先生を思いだす。あのときかけていたのは…………そ  
うだ。あかりの言つとおり、縁なし眼鏡だった。そして、さつきわ  
たしの顔に湿布を貼つてくれたときは黒縁の眼鏡。ぜんぜん気づか  
なかつた。

すでに着替え終わつてゐる瑞樹が、ケータイを片手に話に入つて  
くる。

「偶然ですね。あたし、さつき保健室に来る途中でカウンセラーの  
原先生に会つたんですけど、薄いピンク色の縁なし眼鏡かけてまし  
たよ」

「うそ？」

話を返すあかりに、こんなことで嘘つきませんよ、と瑞樹は答えた。

「でも原先生、お昼に見たときは眼鏡かけてなかつたよ」

「え？ じゃあもしかして、真弓先生がお昼にかけてた眼鏡つて、

原先生のだつたんですか？」

「だと思ひ。しかもそれ、伊達眼鏡だつたし」

わたしは驚いて、リボンを結ぶ手を止めてしまった。

「え、伊達だつたの？」

「うん。だつて真弓先生、お昼は明らかに見づらうにしたじやん。ヨシノリの指を見るときとか、すつこい顔近づけてたし」

ああ、言われてみればそうだつた。タ子ちゃんの傷を見るとき、そこまでしなくていいだろ、ぐらいの距離で観察していたつ。対して、さつきわたしの顔を見るときは、そんなに近づかなくても見えていた。つまり、昼休みにかけていた眼鏡は伊達で、いまのは本物ということだ。

「原先生、伊達眼鏡だつたのね……。でも、なんで真弓先生はわざわざ伊達眼鏡を借りたのかしら？」

「真弓先生は先週まで眼鏡なんてかけていなかつた。だから、伊達でもいいからとりあえず眼鏡をかけていないと落ち着かない、なんてことはないと思うんだけど。」

「それもわかんないよね。そもそも、本物の眼鏡はどうしたんだろ。う。壊れちゃつたのかな？」

「壊れたつて、なんで？ あ、瑞樹、エイトフォーダー借して。……ありがと」

「うつかり割つちゃつたとか、壊れる理由はいろいろあると思つよ。で、原先生、お昼に保健室に来たとき、頼まれたもの買つてきたよ。って真弓先生に言つてたでしょ？ あれつて、眼鏡を買つてきたつてことじやないかな？」

エイトフォーを振りながら、わたしは疑問をぶつける。

「でも眼鏡つて、気軽にあつかいに頼めるやつなものじゃなくない？ 普通、かける本人が直接買いに行くものでしょ？」

「ああ、そつか。視力検査とかもあるもんね」

首をひねるあかりの横で、瑞樹がジャージをたたみながら、

「てか、真弓先生、なんで急に眼鏡にしたんでしょう。伊達眼鏡で見づらそうにしてたってことは、先週までコンタクトだつたってことですよね？」

「そうよね。コンタクトを買い忘れたのかしら？」

「ますます謎が深まるね……」

あかりが顎に手を当てる。うふ、その通りだ。でも、それより。

「あかり。早く着替えない？」

わたしも瑞樹も、もう着替え終わっている。わたしたちだけならまだしも、嶋くんと藤井に加えて真弓先生まで待たせているのに、悠長にお喋りをしている時間はない。

「あ、こめさん。急ぐね」

あかりは慌てて、ワイヤーシャツのボタンを閉め始めた。まったく、着替え終わつてからゆっくり考えればいいのに。

上着にエイトフォーを吹きかけているわたしの背中を、とんとんと瑞樹が叩く。振り返ると、そつと耳打ちされた。

「嶋先輩に、ボールから守つてくれてありがとうございました？」

「ううん、まだ」

「わざわざお詫びをしたけど、途中で野村先生が喋つたからタイミングを逃してしまったのだ。

「じゃあ、帰つたひやんと詫びてください」

片手をつぶつて、いつ続けた。

「一人つきつになるチャンスがあると思いますから」「え？」

「ひとつのこと？」

瑞樹は意味ありげに笑つて、わたしから離れていた。訊いても教えませんよ、と言外に語つている。

ちらりとカーテンの引かれたベッドを見る。あの向いに、嶋くんはいま着替えている。いや、たぶんもう着替え終わつて、わたしたちからの合図を待つているはずだ。

一人つきつて、ほんとに、嶋くんと一人つきつになるの？ でも、瑞樹の冗談かもしないし。いや、だけど、瑞樹つてこんな冗談は言わない子だと思つし。……ああ、もう一

考えれば考えるほど落ち着かなくなつてくる。なんとか冷静になりと椅子に座り、息を吸つて吐いてを繰り返す。大丈夫だ。落ち着け、落ち着け。嶋くんのいるベッドを見る。……うん。

結論。ここで落ち着くのは無理。

「ちょっとトイレ行ってくる」

鞄から香水を取り出し、保健室のトイレに入る。ドアを後ろ手に閉めて、はー、と一息。

瑞樹のやつ、変なこと言つて。予告されると余計に緊張するじゃない。いや、突然二人つきりこされても緊張するんだけど。

つてか、普通にいいトイレだな。初めて入った保健室のトイレを見渡して、わたしはそう思った。

芳香剤はいい香りだし、洋式の便座も綺麗に保たれていて、手洗い場もそこそこ広い。歯ブラシが立てかけてあるのを見るに、真弓先生は食後にここで歯を磨いているんだろう。

せつかく入ったんだから手ぐらい洗おうかな。そう思つて洗面台の前に立つたとき、

「あれ？」

歯ブラシが立てかけてあるコップの隣にあるものを見て、そんな声を出してしまった。

そこには、掌サイズの長方形の箱が一つあった。これには見覚えがある。お母さんも、確か同じものを持っていた。

……どうしてこれがここに？

わたしは「右目用」と書かれたほうを手に取つて蓋を開ける。

予想通り、中にはプラスチックケースが収められていた。そのプラスチックケースの中身がなんなのかは見なくてもわかる。コンタクトレンズだ。

保健室のトイレに、コンタクトレンズの箱。しかも側面には、ご丁寧に『真弓幸恵様』と書かれている。これは間違いない、真弓先生のコンタクトだ。

どういうこと？ コンタクトがあるんなら、どうしてお昼はみんなに見づらそうにしてたの？ なかの拍子で眼鏡が割れてしまつ

たなら、コントラクトをつければいいのに。

保健室のトイレの中で、わたしはしばらく立っていました。

5

着替えを終えたあと、藤井が保健室に戻ってきた眞弓先生に日焼けの理由を訊いたのがきっかけで、しばらく雑談をした。内容は主に、先生が姪っ子の一姉ちゃんの野球観戦に行つたときのことと、小学生でも意外と本格的なフォームで投げるとか、汗をかきすぎてペットボトルの水を三本も飲んでしまったとか、そんなことを話しました。

時計の針が七時を過ぎたころ、眞弓先生にもう一度頭を下げ、わたしたちは保健室を辞した。

「うわ、もう暗くなつてる」

外に出るなり、あかりが驚きの声を上げる。言つとおり、もうすっかり日が暮れていた。保健室はずつとカーテンが閉められていたからわからなかつたのだ。

「なんか不思議な感覚よね」

夕方に保健室に入つて、出たらもう夜。ちょっとしたタイムスリップをしたような気分になる。

「空気は相変わらず蒸し暑いですけどね」

隣で瑞樹がぼそつと呟いた。

わたしたちマネージャーは、基本的に三人揃つて帰る。と言つても、電車通学のわたしたちと違つて、瑞樹は徒步通学だからすぐに

別れるんだけど、いちおつ校門までは一緒に。嶋くんや藤井は、近くにいる適当な人と並んで帰ることが多い。

そんなわけだから、保健室を出てすぐ、女子三人男子一人で固まつて、二つのグループの間にはなんとなく距離が空いた。いちおつ五人並んではいるけど、妙な溝がある。

……なによ瑞樹。一人つきりになる気配なんてないじゃない。

隣を歩くお団子頭を軽く睨む。それに気づいた瑞樹は、わたしに向かつて意味ありげな笑み。そんなに心配しないでくださいよ、大丈夫ですから。そう言われているような気がした。

「あ、尾花先生」

あかりが前方を指差した。見ると、特別教室棟からっぽっちゃり体型の男教師が出てくるところだった。

「お疲れ様です。いま帰りですか？」

嶋くんがそう声をかけると、尾花先生は苦笑して、

「小テストの採点が溜まつててね。って、どうしたの、それ？」

わたしを見た途端、先生の表情が急変した。今度はわたしが苦笑いを浮かべる番だ。

「ちょっと、ボールが当たつて。でもぜんぜん、大した怪我じゃないです」

「そつか……。痕が残らないように、今日はちゃんと冷やして寝るんだよ」

「うわあ、尾花先生、優しい。鳴くんも」ねぐらご飯の利いたセリフを言つてくれるといいんだけど。

「はい。少しでも痕が残ると大変なので、ちやんと冷やします」「少しでもか……。やはり、女の子は顔になにかでないと相当気を遣うんだね」

わたしとあかり、瑞樹が揃つて首を縦に振る。

「相当遣うよ。ねえ、瑞樹？」

「はい。毎日お手入れします」

「田立つとこにさきびができたひ、絆創膏で隠したりね」

わたしがそつぱつと、尾花先生は遠くを見るような視線で、ぽつりと呟いた。

「そんなに必死に隠さなくても、あつのままでいいの」

「はい？」

「……あ、ごめん、なんでもないー。」

まつとじたような表情で、ぶんぶんと手を振る。

「」ねん。じゃあ、また明日。部活で忙しいのはわかるけど、ちひると宿題はやっておいてね

尾花先生はそそくわとわづかで、中庭のまづへ歩いていった。先生が去つたあと、鳴くんは苦々しい顔で呟いた。

「帰つたら、世界史のプリントやらなこと……」

隣で藤井が、おれも、とほやき、あかりも唇を噛みながら頷く。

宿題は早めに終わらせておくものでしうが、あんたう。

特別教室棟を過ぎて校門が見えてきたとき、瑞樹が唐突に声を上げた。

「あ！　コズ先輩、そういえばあたし、校門出てすぐのコンビニに親が迎えに来てるんです。すみません、今日はそれで帰りますね」

明らかに、横を歩く男子一人にも聞こえるように声を大きくしている。まさか……、と思つていると、あかりまで「こんな」とを言つだした。

「そういえば、瑞樹の家の近くに本屋さんあつたよね。私、買いたい雑誌があるんだよねー」

「そりだつたんですか？　じゃあ、そこまで送りますよ。あかり先輩も乗つてください」

「いいの？　やつたー。あとで、藤井君と瑞樹の家、同じ方向、じゃなかつた？」

「あ、そうでしたね。藤井先輩も乗りますか？」

な、なんだこの不自然なほどスマーズな話運び。こいつら、わたしがトイレに入つてる間に打ち合わせしてるー

「え、まじで？」

藤井、うれしさを隠し切れない笑顔でガツツポーズ。お前、ぜつたい期待してただろ！

そして、あかりはどうかくさに紛れて「こんなことを頼む。

「じゃあ、嶋くん。駅までコズと一緒につてくれない？　コズ、

けつこう怖がりだからさ。一人じゃ不安なんだつて

「え、ちょっと、あかり……」

「ああ、うん。わかった」

顔色を伺う間もなく、嶋くんはあつさり了承する。

なにそれ、ほんとに、駅まで嶋くんと一緒にきりなの？  
校門に差し掛かった。ああ、学校から出かけるの、なんて思う間もなく、三秒足らずで校門を抜ける。コンビニは右、駅は左だ。  
つまり、ここからわたしと嶋くんは一人つきり……。

「じゃあコズ先輩、そういうことで」

「ちょっと待つて」

離れようとする瑞樹の腕を掴み、顔を寄せる。

「どうしたんですか？ いちおつ、親を待たせてるのは本當ですか  
ら、急がないとまずいんですよ。いまさら怖気づいたなんて言わな  
いでくださいよ」

「違うわよ。あの、瑞樹……」

正直に言えば、いま、不安でいっぱいだつた。緊張もしている。  
でも、嫌だと思う気持ちは微塵もなかつた。それどころか、大き  
すぎる緊張や不安に隠れてはいるけど、うれしいと思つてすらいる。  
そう、やっぱり、なんだかんだで好きな人と一緒に帰れるという  
のはうれしいことなのだ。わたしはいま、身をもつてそれを実感し  
ていた。

だから、気を回してくれた後輩には、ちゃんと書いておかないと  
いけない。

「ありがとね。ほんとに」

瑞樹は一瞬迷ふとしたけど、すぐに笑って、わたしの肩を叩いた。

「それは、嶋先輩に言つてください。……じゃあ、ゴズ先輩、嶋先輩、また明日！」

元気に手を振つて、瑞樹たちはコンビニに歩いていった。しばらく三人の背中を見送つたあと、嶋くんは鞄を肩に掛け直した。

「俺たちも行くつか」

「あ、うん」

並んで歩きだす。

「わあ、なんだろ？」「これ、すりじゃんけん緊張する。緊張するんだけど、なんか……楽しい。」

隣を歩く嶋くんを横田で盗み見て、わたしはしつつそり気合を入れる。

「んなの、滅多にない機会だ。どうせなら思いつきり楽しもう。」

6

学校から駅までは、徒歩でだいたい七、八分。普段はこの近道をありがたいと思つけど、今日ばかりは、もっと遠ければいいのと思つ。

「へえ。嶋くんのお兄さん、社会人野球してるんだ」「うん。そこまで強いチームじゃないんだけどね」

嶋くんと歩き出して一分弱。のんびりと続けていたとつとめのな

い話は、こつこつと話題に移つて行った。

「ポジションは？」

「センター。で、打順は一番。俺と違つて足速いから」

「え？ 嶋くん、そんなに足遅くないと思つけど」

「ぜんぜん。あつちは比べ物にならないくらい速い」

「ちょっと悔しかつて口をどがらせる。かわいい。」

駅までの道のりは、公星の生徒がちらほら見受けられた。普段なら、嶋くんと二人で歩いてるのを見られるのが少し恥ずかしいと思うかもしないけど、今日はなぜかぜんぜんそんな気がしない。逆に、見せつけてやるうつむけ思つ。

「肩も強くてや。バックホームの練習に付き合つて、す」こ球がくるんだよ」

「嶋くんだつて、外野守るときこい送球するじゃない。それより速いの？」

「うん。向こうのほうがぜんぜん速い。投げ方とかそんなに変わつてる様子はないのに、とにかくいい送球なんだよね」

なにが違うんだろうとこいつうに、何度も腕を振る。すぐに終わつてくれればいいんだけど、なにか考えが浮かんだらしく、鞄からボールを取り出して投げマネを始めた。当然、会話は中断される。

わたしは嶋くんに見えないように足元の小石を蹴つた。

あかりと話していると、ああ、この子は本当に野球が好きなんだなと思う。だけど、嶋くんの場合は違つ。この人は本当に野球のことしか頭にないんだなあ、だ。

本気で甲子園を目指している嶋くんにとつて、他のことは一の次なのだと嫌でもわかる。一緒に帰れるのはうれしいけど、もうひょつと、わたしのことも興味を持つてよ。

投球フォームに満足したらしく、ボールをしまってから、嶋くんは尋ねてくる。

「そういえば、川口はいる？ キョウだい？」

「……あ、うん。いちおう、妹が一人」

「妹かあ。似てる？」

「まあ……、似てるとはよく言われるかな。嶋くんは？」  
「俺はあんまり兄貴に似てるって言われないんだよな。弟もいるんだけど、そっちともぜんぜんだし」

「あ、知ってる。勇太郎くんだよね。元気？」

話題が逸れたことにほっとして、つい勢いで言ってしまった。やば、と思つたときはもう遅い。嶋くんは目を丸くしていた。

「あれ？ 俺、勇太郎の話したことあつたっけ？」

「あ、ううん。あの……あかりから聞いたの」

苦しい言い訳にも、特に不審に思つた様子はなく、へえ、と軽く頷いた。よかつた。

これ以上この話題が続かないよ、わたしは話を変えた。

「そういえば、今日は部活、早めに終わつたんだね。いつもはもうちょっと遅くまでやるのに」

「ああ。野村先生が早く川口の様子を見に行きたいから練習は早めに切り上げたんだ。みんなも川口のこと心配してたよ。だけど、大人数で押しかけるのも迷惑だからって、俺たちだけで行くことにしたんだ」

「なんか、申し訳ないな。気を遣つてもらつたみたいで」「まさか。そんなことないって」

やうかなあ？ とか返しながら、わたしは、嶋くんが来てくれたのはキヤブテンとしての責任感からか、個人的な感情からなのか、どういだらうと考えていた。

隣の美少女がそんなことを考えているとは露とも思つていないと嶋くんは、ふと思ひだしたよつて訊いてきた。

「やうじえは、川口。なんあんなに湿布を貼つてほしがつてたんだ？」

「え？」

考えに没頭していたわたしは、質問の意味がよくわからなかつた。

「保健室に入る前や、中から川口の声が聞こえてきたんだよ。早く湿布貼つてください、つて。あれ、じつしたんだ？」

「え！ あ、あれのこと？」

聞こえてたのかよッ！

「うふ。なんあんなに焦つてつたのかなつて」

まさか、あんたが来るからだと云ふのはもなぐ、わたしは必死に言いわけをする。

「あの、なんとなく、早く貼つたほうがいいなあ、なんて思ひやつて……」

「でも、打撲つてある程度は冷やしてから湿布を貼つたほうがいいんだよ」

「知つてゐるけど、なんかさつきま、早く湿布を貼らないと大変なことになりやうな気がして……」

理由になつてないような気がするけど、嶋くんは、そうなんだ、の一言で軽く流した。なんかおかしいとは思わないのだろうか。思わないか、この人は。

ちりんちりん、と後ろからベルが鳴る。自転車だ。わたしと嶋くんは慌てて脇に寄つて、自転車の通る道を空けた。けど、この歩道、実はけつこう狭い。自転車が通るスペースを空けるために、わたしたちはお互いの身体が触れそうになるぐらい密着して歩かないといけなかつた。

どうしよう、今日、いつもと違つてゆつくり汗を拭く時間もなかつたから、汗臭くないかな？ それに、顔に湿布も貼つてるし。いちおう香水はつけたけど、こんなことなら、瑞樹のエイトフォーもつと噴きかけておけばよかつた。残り少ないからつて変な遠慮とかしないで、ぜんぶ使えばよかつた。

タイヤが回る音を残して、自転車が通り過ぎる。嶋くんはわたしから離れていくて、元の距離感に戻つた。

自転車が通り過ぎるのは、換算すれば一、三秒だったはずなのに、緊張のせいでも異様に長く感じられた。それなのにいま、嶋くんと離れるときはすくなく惜しく感じた。こんなに接近する機会なんて滅多にないのに。どうせなら、わたしが嶋くんの汗の臭いを嗅いでやればよかつた。

ちらりと隣の嶋くんを見る。なにともなかつたかのように、涼しい顔で視線を前に向けていた。恥ずかしそうな様子とか、うれしそうな感じはぜんぜんしない。

……こんなに可愛い女の子と身体が触れそうなぐらい接近したんだから、もつとよりこんだつていいじゃない。

「いまの人、すごかつたね」

「えつ？」

前を向いたままの嶋くんが唐突に口を開いた。なんのことかわからぬわたしは戸惑う。

「自転車に乗つてた人だよ。見なかつた？」

「ごめん、見てなかつた。なにか変わつたことあつたの？」

「あの人があけてた眼鏡、フレームが虹色だつた。すつごい派手」

笑い混じりに言つ。虹色のフレームの眼鏡……。確かにそれは、あんまり見ない。

「わたしも見ておけばよかつた」

「うん。あれはほんとに、見る価値あつたよ」

その眼鏡が相当ツボだつたらしく、嶋くんは声を出して笑いそうになるのを必死にこらえていた。

無邪氣というかなんといふか。野球をしてるときは一生懸命声を出してみんなを引っ張つてるのに、いまはそんな面影が微塵もない。そんな嶋くんに、すっかり毒氣を抜かれてしまつた。さつきまで感じていた不満とかどうでもよくなつてくる。嶋くんの笑いが納まつたころ、わたしは、じゃあもう一つ眼鏡の話をしてやろう、という気になつていた。

「ねえ、嶋くん。眼鏡つて言えば、面白い話があるのよ」

「え、どんな話？」

「うん。あのね、さつき保健室で

\*

わたしが一連の真弓先生の眼鏡と視力のことを話し終わると、嶋くんは興味深そうに、へえ、と呟いた。

「原先生は実は伊達眼鏡で、それをわざわざ借りる真弓先生か……。確かに、変な話だな」

「でしょ。しかも、真弓先生がコンタクトをつけないのもおかしいわよね。すつぐく見づらそうにしてたのに。なにか理由があるのかな？」

大通りを歩きながら、わたしたちはそれぞれ頭を悩ませる。駅までの道のりはもう半分を過ぎていた。

赤信号で立ち止まつたとき、嶋くんが訊いてきた。

「先週まで、真弓先生は眼鏡をかけていなかつたよな？」

「ああ、うん。そうね。かけてなかつたわ」

「そつか……」

嶋くんは顎に手を当てて、視線を下に向けた。一昨日の昼休み、藤井の頼みで高橋さんのメアドを考えるときも、こんなポーズを取つていた。きっと、考えるときの癖なんだ。

信号が青になる。並んで歩き出す。

「コンタクトつてさ、普通、眼鏡をかけたくない人がやるものだよな？」

横断歩道を渡り終えたあと、そう訊いてきた。

「うん。眼鏡が似合わないとか、スポーツをする人とかに多いと思う。……あ、でも最近になつて、コンタクトの上から伊達眼鏡をかける人も増えてるわよ」

「え、なんで？」

「ファッショニ一環でかな。最近のファッショニ誌とかでも伊達眼鏡をかけた人が多くてね。流行りのオシャレ道具みたいになつてるから」

「女子つて、眼鏡もおしゃれの道具にするのか。すごいな」

いや、いまどき、男子でも伊達眼鏡ぐらいかけると思うんだけど。大通りに入つたせいで、がぜん人通りが多くなつてきた。道行く人にお店の勧誘チラシやポケットティッシュを配る人もいるし、居酒屋の勧誘の声も聞こえる。その中を歩く女子大生を見て、わたしはもう一つ伊達眼鏡の使い道を思い出した。

「あと、すっぴんをこまかすために伊達眼鏡をかける人も多いわよ。ほら、あっちを歩いてる人みたいに」

「すっぴん？」

不思議そうな顔を向けてくる嶋くん。わたしは説明する。

「ちょっとギャルっぽい人が多い学校とか大学とかだと、普通にみんなお化粧してるでしょ？ で、朝起きられなくてお化粧する時間がない日は、すっぴんのままだと恥ずかしいから伊達眼鏡をかけてごまかす人が多いの。ウチの学校はお化粧禁止だからぴんと来ないかもしれないけど」

すっぴんをこまかす、と嶋くんは小さく繰り返した。

「それつて、大学生とかじやなくて、普通の女人の人もやるかな？」  
「え、どうだろ？ 四十代とかになると、どうなるかわからんないけど……。でも、二十代とか三十代前半なら、やる人もいるんじやないかな」

「そっか……」

そう呟いて、嶋くんはまた、顎に手を当てて視線を下に向けた。転ばないかなと心配になつたとき、顔を上げてわたしを見た。

「わかつたよ。眞弓先生の一連の行動の理由が

今日はつまみが二十パーセントオフでーすーへいへい、席が空いてるのはこまの内だよー！

居酒屋の勧誘にかき消されないようボリュームを上げて、わたしは嶋くんに尋ねた。

「本当にわかったの？」

「うん」

「ぐぐりと首を縦に振る。あまりにもあつせつしていたので、本当なのかな？と逆に疑わしくなつてしまつ。

「あの、嶋くん。真弓先生はすっぴんを隠すためにずっと眼鏡をかけていたとか言わないわよね？」

「言わないよ。そもそも真弓先生、ずっと化粧してたひ？」

ああ、よかつた。女性が化粧しているのがどうかは見てわかるんだ。

「じゃあ、どうしてすっぴんを「まかすのに伊達眼鏡つていいのでわかったの？なにか関係あるの？」

「あるよ。大アリだ。でもその前に、川口の誤解をとかなきや」

誤解？わたしがなにを誤解してるつていうんだろ？

は、まさか！キミは俺が野球にしか興味がないと思つてるみたいだけど、実は違うぜ的なアレか？本当はキミにも興味しんしんだぜ、ずっと好きだったんだぜみたいなやつか？

「わかった！ 誤解でもなんでもといて」

「あ、うん……。なんでそんなに興奮してるんだ？ えっと、川口が誤解してる」とは、真弓先生の眼鏡についてだよ

ですよねー。そんなわけないですよねー。

「さつき川口は、お昼は伊達で、放課後は本物になつてたつて言つただろ？」

「言つたわ。でもそれ、間違つてる？ 目の悪い真弓先生が見づらそうにしてたから伊達で、見やすそうになつてたから本物つて考えるのが普通だと思つんだけ」

「そうだよな。でも、今日の場合はずつと違つんだよ」

嶋くんは口で言葉をいつたん区切り、少し強い口調でこう続けた。

「昼休みにかけていたのが本物で、放課後にかけていたのが伊達なんだ」

「えっ？ でも、わたしたちが昼休みに保健室に行つたとき、真弓先生は本当に見えづらそうにしてたのよ。本物の眼鏡なら、視力が上がつてよく見えるようになるはずでしょ？」

「なるね。普通の状態で眼鏡をかけるな」

「普通の状態でつて……」

嶋くんは人差し指を右目の下に当てる。

「真弓先生は昼休みも放課後も、ずっとコンタクトをつけていたんだよ。だから、本物の眼鏡をかけていた昼休みは視力が下がつて、伊達眼鏡をかけていた放課後は正常な視力になつたんだ」

「いや、おかしいでしょ。普通、コンタクトの上から眼鏡はかけないわ」

わたしの反論に、待つて、というように掌を見せながら、嶋くんは言つ。

「そう考えた方が自然じゃないか？ 昼休みにかけていた眼鏡は原先生の物だつたんだ。川口たちは普段から原先生が伊達眼鏡をかけていたと考えたみたいだけど、学校でずっと伊達眼鏡をかけている人つてあまりいないだろ？」

まあ確かに、わたしも原先生が伊達眼鏡をかける理由がよくわからなかつたけど……。

「けど、だからってそれだけが理由じゃないでしょ？ 教えて、嶋くん。どうして真弓先生はコンタクトの上から眼鏡をかけてたつて思うの？」

「そうしないといけない理由が……眼鏡をかけないといけない理由が、真弓先生にはあつたんだよ。真弓先生、このあいだの日曜に姪っ子の野球の試合を観に行つたつて話してたろ？」

頷く。

「真弓先生は言つてたんだよ。そのときは、汗が凄いだろ？ つて予想してたから、化粧もしないですっピンで行つたつて」

「ああ、うん。それはわたしも聞いたわ」

先生ぐらいの歳になると、すっぴんで外に出るのは勇気のいることのはずなのになあ、と思つたのを覚えてる。高校生でも、すっぴんが嫌で伊達眼鏡をかける人がいるのに。……あ。

「伊達眼鏡！ そのとき先生は、伊達眼鏡をかけてたつてこと？」  
「たぶんね」

楽しそうに笑う嶋くん。そのまま、話しを続ける。

「すっぴんのまま行くのは少し気が引けたから、真弓先生はコンタクトレンズの上に伊達眼鏡をかけて試合観戦に行つた。そのまま姪っ子のチームを応援して、そして……日焼けした」

日焼け。そう、野球の試合は長いから、一試合観戦しただけでけっこつ焼ける。実際、真弓先生ははつきり日焼けしていた。  
……そうか、そういうことね。  
わたしは隣を歩く嶋くんを見て、言つた。

「つまり真弓先生は、眼鏡焼けをしてしまつたつてことね？」

嶋くんは笑顔で頷いた。

\*

眼鏡をかけているときに日焼けすると、眼鏡を外していくとくつきりとフレームの形が浮き上がり、いわゆる『眼鏡焼け』と呼ばれる焼け方をすることがある。

真弓先生は、その眼鏡焼けをしてしまつた。だから、意地でも眼鏡を外さなかつたのだ。

「たぶん、学校に来るときはコンタクトの上から伊達眼鏡をかけていたんだけど、昼休みまでの間で、なにかの拍子で壊れるかしてしまつたんだと思う。だから、昼休みに原先生に伊達眼鏡を買いに行

つてもらつたんだ。その間、自分は原先生から眼鏡を借りてね

嶋くんの推理を聞きながら、昼休みのことを思い出す。

駅ビルの袋を提げて保健室に入つて来た原先生は、本当に大変だつた、暑いだけならまだしも……、みたいなことを言つていたはずだ。あれは、真弓先生に眼鏡を貸して、裸眼で買い物に出なければならなかつたのが「本当に大変」だつたと言つたかったのだ。

「自分の眼鏡を他人に買ひに行かせることはできないけど、伊達眼鏡なら大丈夫つてことね」

「うん、そういうこと。それから、川口たちが保健室に行つたとき、先に尾花先生が来てたつて言つたよな？ 尾花先生は、真弓先生が眼鏡を借りた直後ぐらいに来たんだと思つ。だから真弓先生は、コンタクトを外す時間がなかつたんだよ」

これで推理はすべて終わり、と言つよつて、嶋くんは鞄から野球ボールを取り出してぽんぽんと軽く上に投げた。わたしはそれを横目で見ながら、ぼんやりと考えごとをしていた。

駅が遠めに見えてきたとき、嶋くんは掌のボールを見下ろしながら呟いた。

「でも、真弓先生つて恥ずかしがりなんだな」

無意識に湿布に当てていた手を離して、尋ねる。

「眼鏡焼けを見せるのを嫌がつたからつてこと？」

「そう。……まあ、俺が勝手に推測しただけで、本当に眼鏡焼けをしてたのかわからぬけど、もししてたらの話。俺だつたら、伊達眼鏡が壊れたら諦めてその日は眼鏡無しで過ごすのになつて。なのにわざわざ原先生から眼鏡を借りて、しかも伊達眼鏡を買ひに行つ

てもらつてるんだろ？ 相当、眼鏡焼けを生徒に見せるのが嫌だつたんだなつて

「

ああ、まあね。そう思つわよね。

「なんとなくだけど、そういうことにはけろつとしてる人だと思つてたんだ。でも意外と、恥ずかしがり屋だつたんだな」

別世界の人間を語るよつた面持ちの嶋くんを見ながら、わたしは心の中で呟いた。

嶋くん、それは違うよ、と。

嶋くんの推理はたぶん当たつてゐるけど、そこだけは違う。真弓先生が眼鏡焼けを見せたくなかつたのは、生徒たちじゃない。尾花先生に見せるのが嫌だつたんだよ。

あの二人がなにがきつかけで、いつからそつなつたのかはわからぬ。でも確実に、恋人同士だというのはわかる。

昼休みの時点でそんな気はしてたけど、さつき尾花先生に会つたときには確信に変わつた。

わたしたちが着替え終わつたあと、真弓先生はもう保健室を閉める時間のはずなのに、藤井の質問に答えて、悠長に雑談なんかしてゐた。たぶん、事前に尾花先生と連絡を取り合つていて、彼がテストの採点で帰りが遅くなることを知つていたから、時間潰しにわたくしの雑談に付き合つてくれたのだ。昼休みに一人でいたのも、今日のお昼は一緒に過ごそうと決めていたからだらう。

そう考へると、尾花先生の言動も理解できる。

にきびができたら絆創膏で隠すと話したわたしに、尾花先生は言った。そんなに必死に隠さず、ありのままでいいの、と。どこか遠くを見るようにして、そう呟いた。

あれは、真弓先生を思いだして言つたことだつたんだ。尾花先生は、真弓先生が眼鏡焼けを隠すために眼鏡をかけていることに気づいていたのだ。

けど、そんな想いとは裏腹に、真弓先生は必死に眼鏡焼けを隠した。わたしには、伊達眼鏡が壊れたときの真弓先生の様子がはつきりと想像できる。

そんな、お昼に彼と会う予定があるのに、こんな眼鏡焼け全開の顔で向き合つなんてできないわ、と慌てふためき、必死に頭を働かせ、仲のいい原先生になんとか頼み込む。どうか眼鏡を貸してください、と。

思わず笑つてしまつ。

これつて明らかに、さつきのわたしと一緒に、もうすぐ嶋くんが保健室に来ると聞かされて、早く湿布を貼つてくださいと真弓先生に詰め寄つたわたしと。

違うのは、わたしたちの場合は完全に一方通行ということだけ。だからこそ、嶋くんはわたしが早く湿布を貼つて欲しがつた理由に気づかないのだ。

「やつぱり、女人からしたら眼鏡焼けって恥ずかしいのかな？」

駅内へと続く小さな階段を上がりながら、嶋くんは首を傾げた。

「恥ずかしいよ。すつじに恥ずかしい」

わたしは少し声を小さくして、続けた。

「……わたしだって、いま湿布はがして嶋くんに癌を見せなさいって言われたら、やだもん」

「ああ。眼鏡焼けと癌じゃ、レベルが違うもんな」

そんなことを言いたいわけじゃないんだけど……。

階段を上り終えて、切符売り場を過ぎ、改札を抜ける。わたしは上りの電車、嶋くんは下りの電車だ。

「じゃあ、また明日」

嶋くんは自分の乗る電車のプラットホームへ歩き出さうとする。わたしは大きめの声を出して、それを止めた。

「ちょっと待って、嶋くん！」

「ん？」

「あの…… ありがとうね。嶋くんのおかげで、怪我、軽くてすんだから。本当に助かった。どうもありがとう」

いつ言おうかとタイミングを計っていたけど、けつせよく別れる直前にやつと言えた。

嶋くんは困ったように頬をかきながら、

「いや、でも、捕れなかつたから……。」めん

違う違う。そんなことを言つてほしいんじゃない。まったくこの人は、どこまで女の子の気持ちがわからないんだろ？。ここまでもぐると笑えてくる。

笑えてきた記念に、わたしは言つてやつた。

「じゃあ、嶋くん。……次はちゃんと守つてよ？」

「えつ？」

田の前にいる朴念仁は驚いたように田を見開いたけど、すぐに大

をく頷いた。

「……うん、わかった。次はぜつたい捕る」

真面目な顔でそう言られて、思わず笑顔がこぼれてしまった。  
うれしいな。相手がわたしじゃなくてこそう言つだひつてわか  
つてるけど、やつぱりうれしい。

「ありがとう。……じゃあ、また明日ね」

「うん。氣をつけて」

手を振つて別れたあと、わたしは少し歩いて後ろを振り返つた。  
嶋くんはバッグを揺らしながら人じみの中を歩き、やがて、プラッ  
トホームへ続く階段を下りていつてた。当然、わたしのほうを振り  
返ることは一度もなく。

「こよこよ。振り返らないことぐらう知つてたよ。  
いまはまだ、それでいい。これから振り向いてくれればいい。  
いや。ぜつたい、振り向かせてやる。高校を卒業して、自由にア  
タックできるようになったら、わたしから目が離せなくなるぐらう  
虜にしてやるんだから。」

「見てなさいよ、野球馬鹿ヤロー」

小さくそう呟いて、わたしままた歩きだした。

「どうしたの、それ？」「大丈夫なのか？」

わたしの顔の湿布を見るなり、お父さんとお母さんは半狂乱になつた。わたしはとりあえず事情を説明して、洗面所に向かつた。その途中、お風呂からあがつた妹の柚希ゆすきとすれ違つときも、

「げ、柚香なにその顔？」

ヒドン引きされた。

洗面台の鏡と向き合つと、わたしはそろそろと湿布をはがした。そこに映るものを見て、思わず「わあ」と声が出てしまつ。

左頬にできた、大きな痣。当分は、これを隠すために湿布を貼り続けないといけない。わたしのチャームポイントの泣きぼくろも隠れてしまつ。きっと、眼鏡焼けに気づいたときの真弓先生もこんな気持ちだつたんだろう。明日、学校休もうかなといつもさうしてくる。

それにしても……。

わたしはもう一度、鏡を見つめてため息をつく。

自分の顔を見て傷つくなんて、中学のときのものもらいになつて以来だ。

学生なら誰でも、授業が終わる五分前ぐらいになると、早く終わらぬ一かな、と時計を見る頻度が多くなることだと思つ。

かくいうわたしもその部類で、五分前、もしくはそのもう少し早くから、黒板よりも時計に向ける意識のほうが強くなつてしまつ。

それぐらいならきっと普通のことなんだろうけど、たまに、授業の初めから終わりまで、ずっと時計をチラ見し続ける人がいる。五分前とか十分前からじやない。とにかく、授業が始まつた瞬間から時計を見てて、そのあと教科書や黒板に視線を移しても、「心ここにあらず」という言葉を体現するかのように、なにかの拍子にまた時計に目が行く。

いまの嶋くんは正にその「心ここにあらず状態」だつた。

からつと晴れた空の下で、普段よりなんとなく雑に素振りをして、ときどき手を止めては、ちらちらと時計に目をやる。現在の時刻は午前八時。個人練習が終わるのは八時十分で、そのあとにノックに移り、朝練が終わるのは八時半。あと三十分はグラウンドにいなきやいけない。ちょっと残念そうに時計から視線を外し、素振りに戻つて、でもすぐにまた時計を見る。

落ち着かないなあ、嶋くん。

バックネット裏でほつれたボールを縫つていたわたしは、落としたボールを震える手で拾いながら、変に冷静にそんなことを思った。いつもなら、練習中に時計を見ることなんてほとんどないのに。

嶋くんの様子がおかしいのは、もちろん理由があった。

公星高校の校門を出て道路をはさんだ斜め向かいに、『ナカムラスポーツ』というスポーツ店がある。一階が店舗で、二階には店主の中村さん夫婦が住んでいる小さいスポーツ店だ。立地的に言ってもターゲットは公星高校の運動部だから、サッカーやバスケ、バレーボール、幅広いスポーツ用品が置いてあって、もちろん野球用具だってしっかり並んでいる。そんなわけだから、ボールとかバットとかの部の備品はだいたいナカムラスポーツで買っていた。

つい先週も、わたしたちはナカムラスポーツに新しいキャッチチャーミットを注文した。公星高校には代々正捕手用のキャッチチャーミットが受け継がれてきたんだけど、そのミットももう寿命だと判断されて、新しいのを注文したのだ。新しいミットは嶋くんが選んだらしく、早く届かないかなあ、なんてはしゃいでるのがたまらなくかわいかった。

そして、今日の朝。朝練に向かう途中のわたしは、ナカムラスポーツ前の信号でジョギングから帰ってきたばかりの中村さんとばつたり出くわした。軽く雑談をしたあと、中村さんは肩にかけたタオルで汗を拭いながら言った。

「そういえば、こないだ注文受けたミットを、昨日の夜届いたんだよ」

「え、本当ですか？」

思わず声が大きくなってしまった。嶋くんがよろこぶだろうと思ふと、わたしまでうれしくなる。

中村さんは、いい返事だねえ、と白い歯を見せて笑い、

「よかつたら、朝練終わつたあとにでも取りに来なよ。良次くんも楽しみにしてるだろ？ シヤツターは開けとくからさ」

「はい、お願いします！」

中村さんに向かって、わたしは大きく頭を下げた。  
朝練が始まる前に、嶋くんのこと話をすると、

「ほんとか？ 行くよ、ぜつたいに行く！ 朝練終わったら、ミシト  
取りに行こう！」

と、想像以上の食いつきぶりだった。わたしはまたうれしくなつ  
た。

でも、問題はそのあとだ。朝練が始まり、ランニング中もチラチ  
ラ時計を見る嶋くんを微笑ましく眺めていたわたしは、出し抜けに  
思いました。

そういうえば、料金はミシトを受け取ると同時に払うつてことにな  
つてたはずだ。そしてやっかいなことに、部費を使つていいのは監督  
かマネージャーだけという規則がある。つまり、嶋くんがミシトを  
取りに行くときは、部費の管理を任せているマネージャー わ  
たしがついて行かないといけない。嶋くんはそういうとき、仲のい  
い誰かを誘うタイプじゃない。一人で行くのが基本だ。

つまり、ほぼ確実に、わたしと嶋くんの一人つきりでナカムラス  
ポートに行くことになる。そういうえばさつきの嶋くんの口調にも、  
一緒に行こう的なニュアンスが含まれてたような気がする。  
あはは。なんだろ、これ？ よろこぶべきなのはわかつてるんだ  
けど……。

わたしはまた、手を滑らせて縫っていたボールを落とした。  
さつきから、手の震えと汗が止まんないんだけど。

\*

「「めん嶋くん。待った？」

「ん、ぜんぜん」

朝練が終わったあと、待ち合わせ場所である部室棟の前に行くと、嶋くんは既に来て待っていた。わたしの着替えが遅れたせいか、辺りに野球部の姿はない。

「行こう」

「あ、うん」

校門へ歩きだす嶋くんの背中を追いかける。

「ど、どうしよう。わたし、こんな時間帯に嶋くんと一人で並んで歩いてるよ。しかも学校で。なんていうか、ちょっと目立たない？野球部の人はいないけど、他の部活の人とかはちょいちょいいるし、校門の辺りにはたぶんもっとたくさん人がいる。大丈夫かな？悪いことしてるわけじゃないのに、なんか不安になる。」

「……やっぱり、いつ見てもカッコいいよな」

「えつ？」

嶋くんが突然、しみじみとそんなことを言い出した。なにが、と思つて隣を見ると、そこには、手に持つた野球雑誌に熱視線を注ぐ嶋くんの姿があった。開いているのは、雑誌の一番後ろのほうの懸賞ページ。

さつきの「いつ見てもカッコいい」発言がなにを指すのかわかつたわたしは、少し頬を綻ばせて、隣を歩く野球少年を見上げる。

「嶋くん、本当に保田選手のことが好きなのね」

「うん。保田選手のおかげで、俺はキャラにならひつて決めたんだ」

普段より大きくなつとした声でそう言ひ、手の甲で雑誌を叩く。

保田俊一選手は、五年前にプロ入りした倉橋市出身のキャッチャード。同じ倉橋市に在住する嶋くんはこの保田選手の大ファンで、今回選んだキャッチャーミシットも、この春に出たばかりの保田選手モデルらしい。

嶋くんは雑誌の懸賞ページに指を置いて、

「この懸賞、俺も応募したんだけど外れても。欲しかったなあって思つてたときに、監督から新しいミシット選べって言われて、めちゃくちゃうれしかつたんだ」  
「じゃあ、ミシットは即決だつたんだね」  
「うん。他に比べてちょっと高いのが心配だつたけど、足りなかつたら自腹切るつと思つてた」

普段からは考えられないほど饒舌な嶋くんに、わたしは少しおかしくなつた。

懸賞ページには、例の保田選手モデルのミシットをはめた保田選手の写真が載つていて、見出しへはこう書いてある。応募してくれた一名様に、保田選手のサイン入りミシットをプレゼント！

「でもいいの？ サインは入つてないよ？」  
「そう、それがちょっと残念なんだよ。いつぞ、自分で書いてみようかな」

思わず噴き出しちゃつた。

「え、嶋くんのサイン書くの？ 意味ある、それ？」  
「いや、保田選手のサインを真似るんだよ。キャッチャーミシット

て代々受け継がれるだろ？ そしたらさ、俺が書いたって知らない  
ぐらい歳の離れた後輩たちは、本物の保田選手のサインだって思う  
んじゃないかって

「お、思わないよ、それは」

片手でお腹を押さえながら、もう一方の手を顔の前で振る。想像  
を絶する嶋くんの発言に、笑い声を抑えるのが大変だった。

「嶋くんが自分でサインを書いたってこともぜつたいミットと一緒に  
に受け継がれるよ。そしたら逆に、昔の先輩が保田選手の真似して  
書いた変なサインってネタにされるつて」

「わかつてるよ。冗談だから」

首を振つて否定する。声は笑い混じりだし、表情も柔らかだつた。  
テンション上がつてんなあ、嶋くん。普段わたしと話すとき、「冗  
談なんて言わないのに。よつぽどうれしいんだうな、と改めて実  
感する。

体育館を通り過ぎて中庭に差しかかると、ぐつと人数が増えた。  
教室棟へ向かう生徒たちの流れに逆らつて、わたしたちは校門へ進  
む。

「保田選手は守備も打撃も上手だけど、それ以上に精神力がすごい  
んだよ」

嶋くんの話題はミットから保田選手本人に移つた。二人で歩いて  
いるところを誰かに見られてやしないかと周囲を気にしていたわた  
しは、ワンテンポ遅れて相槌を打つ。

「あ、なんだ。どこがすごいの？」

「どんなに怪我をしても、必ず復活するんだよ。高校のとき、ボー

ルを投げられなくなるぐらいたひどい怪我をしたんだけど、必死にリハビリしてまた野球ができるようになった。プロに入つて一年目のときも、肩を痛めてもすぐ復帰したし

「べらべらと保田選手の経験について語りだす。わたしが口を挟む余裕はほとんどなく、会間合間に短い相槌を打つだけ。なんか、人目を気にする自分がだんだんアホらしくなってきた。

保田選手の経験を聞いているうちに、校門を抜けた。学校から出てすぐ左にある横断歩道を渡つて、ナカムラースポーツへ。

中村さんの言つたとおり、シャッターは開けられていた。「C」OSE」の札がかかつたガラス戸から店内の様子が見える。まだ薄暗く、明かりはほとんどついていない。ガラス戸をノックすると、奥から中村さんが出てきた。

「お、来たねえ」

戸を開けるなり、中村さんはそう笑つて、わたしたちをカウンターへ招いた。

レジとちょっとした小物が置かれただけのこぢりぱりしたカウンターで、奥の壁にはテレビが備え付けられている。チャンネルは朝のローカルニュースに合わせられていた。

「ちょっと待つてて。いま取つてくるから」

中村さんはそう言い残すと、長い暖簾で仕切られたスタッフルームへ引つ込んだ。

することのなくなつたわたしたちの視線は、自然とテレビに吸い寄せられる。県内では抜群の知名度を誇るニュースキャスターが、先月の交通事故数は今年最多でした、と痛ましそうに報告していた。

映像が、先月居眠り運転の車が突っ込んできたという小学校に切り替わると、嶋くんが、あ、と声をあげた。

「これ、俺が通つてた小学校だよ。倉橋小学校  
「え、うそ」

つてことは、あかりが通つてた小学校もある。

テレビには事故当時の映像が映されていた。正門の石垣が盛大に崩れて、フェンスもへこんでいる。キャスターによると、運転手は軽症ですんだものの、登校中だった六年生の児童が巻き込まれて大怪我を負つたらしい。

「かわいそう……」

「うん。……事故があつたのは知つてたけど、怪我人が出たのは知らなかつた」

しばらく黙つてニュースを觀ている。事故にあつた子は命に別状はないものの、いまも入院中らしい。

「やあ、『めん』『めん』。遅れて」

中村さんが戻ってきた。手には黒いグローブ袋を持っている。それを嶋くんに渡すと、

「開けてみな」

中村さんが言い終わるとほとんど同時に、嶋くんは袋を開けて、グローブを取り出していた。

紛れもない、さつきの雑誌に載つていたのと同じキャッチャーミット。色は濃い青。嶋くんはミットを左手にはめ、開いたり閉じたり

りを何度も繰り返した。その後、右手で握りこぶしを作つて、ミットの腹を何度も叩く。

「……いい感じです。ありがとうございます」

満面の笑みを、中村さんに向けた。

料金を払つたあと、わたしたちはナカムラスポーツをあとにした。

「よかつたね、嶋くん」

信号にひつかかつたとき、わたしは嶋くんにそう話しかけた。隣に信号待ちをしている女子生徒がいて、しかも見覚えのある子だつたけど、不思議と気にはならなかつた。

「今日の練習から使うの?」

「いや、すぐには使わないよ。グローブはまず慣らさないと、まともにキヤッチできないんだ。ほら、このままじゃ硬いでしょ?」

袋からミットを取り出して、わたしに渡してくる。手にはめてみると、言われた意味がよくわかつた。

「ほんとだ……。開くのにも閉じるのにも、すごく力が要るのね」「だろ? 家に持ち帰つて、柔らかくしないと練習じゃ使えない」「そつか。……でも、残念だな。せつかく今日みんなにお披露目できると思つたのに」

正確には、みんなにミットを見せてよひじぶ嶋くんが見られないのが残念だったんだけど。

わたしの発言を聞いて、嶋くんは急につきつきした表情で手を叩いた。

「いいこと考えた！ 」のリリット、部室の一番立つところに置いたよ。そしたら、部室に入ってきたときみんな驚くだろ？ 練習では使えないけど、ちょっとしたサプライズ」「いいね、それ！ ゼッタイみんなびっくりするよ。で、嶋くんはあとから来てさらっと説明することね」「うん。だから、今日リリット取ってきたことは部活始まるまで誰にも言わないで」

わたしは大きく頷いた。サプライズが成功したときの嶋くんは、どんな顔をするんだろう。想像するだけで幸せな気分になつてくる。信号が青になる。わたしたちは並んで歩きだした。

2

「げつ。なに、アンタそんなのがお弁当なの？」  
「うん。今朝寄ったコンビニに置いてあつたから。ヨシノリも貰う？」  
「いらんいらん。普通ポテチは食後に食べるもんでしょう。ねえ、コズちゃん？」  
「う、うん……」

お箸を振り回しながら喋る佐藤さんに圧倒されながら、わたしはそう答えた。

お昼休み、いつもはあかりと一人でお弁当を食べるんだけど、今日は佐藤さんも一緒だった。なんでも、普段一緒にお弁当を食べている人たちがみんな委員会や部活の集まりに行ってしまい、誰もいないうらしい。あかりと一人で過ごす気楽なランチタイムから一変、あまり話したことのないクラスメイトの介入に、わたしは少しどうじやなく戸惑っていた。

佐藤さんはあかりを指差して、

「お皿がそんなんだと、栄養偏りで一キロでもいい考  
えなつて」

「だから野菜ジュース飲んでるじやん」

ふりふりと手に持つた紙パックを振る。

今日のあかりの皿「はんは」は、野菜ジュースと『プロ野球チップス』  
五袋。佐藤さんは驚いてたけど、あかりは、家からお弁当を持って  
こられないときはよく「ごはん」とをする。一限目の休み時間には、  
同じの持つてるからあげるねー、とか言つて、必死に宿題をする藤  
井に「阿部慎之介」のカードをプレゼントしていた。

「はー、まつたく最近の若者はなつとりん。皿はちやんと米食えつ  
ての。ねえ、ユズちゃん?」

「うん……。佐藤さんは、すつ「ごはん」と米だね」

佐藤さんの左手には、紙製の大きな皿。今週から発売された売店  
の新メニュー、特製大盛り牛丼だ。牛肉と玉ねぎと、具はスタンダ  
ードだけど、つゆがたっぷり入っているのが特徴らしい。できたて  
だと熱々で持ちにくいから、買いに行くなら皿休みがいいよ、とさ  
つき佐藤さんは教えてくれた。

玉ねぎと牛肉ど「飯を口に運びながら、佐藤さんは少し不満そ  
な顔をした。それらを飲み込んでから、言つ。

「ユズちゃん、昨日も言つたじやん。アタシの「とせや、タチでい  
いよ。苗字で呼ばれんの苦手なんだ」

「あ、そうだった。ごめんね……タチちゃん」

「ん、ぜんぜんオッケー」

親指と人差し指でマルを作つて、佐藤さん改め、タチちゃんが笑顔を見せる。なんかほつとした。人を名前で呼ぶのは緊張するけど、笑つても「うう」と気が楽になるし、こっちまでうれしくなる。かじつた鮭おにぎりも、不思議とわつきより美味しく感じる。

視線を前に戻すと、田の前に座るあかりがじつといつちを見ているに気づいた。

「どうした？」

「うう」飯食べても平氣そうだなつて思つて。顔、痛くなさそうだし

「ああ、そういうの」とね

左頬の湿布に手を当てる。食べ物を噉むと傷に響かないかと心配してくれたらしい。

中村さんやタチちゃんもそうだつたけど、今朝登校していくとみんなに驚かれた。どうしたのその顔、大丈夫？ と普段あんまり話さない人たちからも詰め寄られて、ちょっとびっくりしてしまつた。まあ、家で湿布を貼るときは、クラスの人たちに笑われないかとびくびくしてたから、心配してもらつたのはうれしかつたんだけど。

「もう大丈夫だから。心配してくれてありがとう」

最後の一 口をしつかり飲み込んでから、笑いかける。あかりも笑顔を返してくれた。

「よかつた。昨日はどうなるとかと思つたけど、腫れももう引いてるもんね」

「うん、まあね。あ、でも、まだ痣は残つてゐから、湿布はがしてなんて言わないでよ」

「それは言わないよー」

手に付いた塩を落としながら、あかりが笑う。

「アタシも朝にコズちゃん見たときは驚いたけど、平氣そつだね。体育も普通にやつてたし」

夕子ちゃんの言葉を聞いて、思いだす。そついえば、一限目の体育のあと、香水をつけてない。いちおつエイトフォーはしたけど、それだけじゃ心配だ。

おにぎりを飲み込んでから、鞄から取り出した香水を手に立ち上がる。

「ちよつと行つてくるね」

廊下に出て、手首とうなじに香水を吹きかける。どこにでも売つてゐるような安物の香水だけど、柑橘系の香りがわたしの好みに合つていた。ちゃんと香りがついたのを確認して、席に戻る。

香水を机に置くと、夕子ちゃんが急に、あー、と声を出した。

「ね、コズちゃん。その香水さ、月曜に武広の『ダラーズ』で買つたやつじやない？」

「え？」

心臓が大きく跳ねる。汗があつと引いていくのがわかつた。

「ヨシノリ、『ダラーズ』つてなに？」

「雑貨屋さん。知んない？ 武広駅の西口出ですぐの、川崎美容整形クリニックと、あとなんか古い書店とかの近くにあるお店。香水とかシュシュとか、いろんなの置いてんだ」

「そんなお店あるんだー。武広はあんま行かないからわからんないや」

「まあ、あつちはそんな栄えてないから。なんか特別な用がない限

り行かないよね」

隣で繰り広げられる和やかな会話とは裏腹に、わたしは心臓がバクバクだった。それでも、なんとか声を絞りだす。

「夕子ちゃん。なんで知ってるの？」

「あたし、月曜の放課後に武広に住んでる友だちん家に遊びに行つたんだ。で、そいつと駅前で時間潰そうつてふらふらしてたら、ユズちゃんっぽい人がダラーズで香水買つてゐる見たんだよ。まあ、見たの後ろ姿だけだつたからいまいち確信持てなかつたし、声もかけらんなかつたんだけど。でもやつぱり、ユズちゃんだつたんだねえ」

自分の目が間違いじゃなかつたことがうれしいのか、夕子ちゃんは大きく口を開けて、へへ、と笑つた。わたしは、見られたのが後ろ姿でよかつたと心から思いながら、曖昧に頷く。

「えー。ユズ、そんなところに行つてたの？」

あかりが、三袋目のプロ野球チップスを開けながら不満そうな表情をする。

「私も誘つてよ。月曜は部活休みだしプロ野球がないから空いてるつて言つてるじゃん」

「ああ。『』、ごめん」

次は誘つてね、と返して、プロ野球チップスを口に運ぶ。なんでそんなところにいたのかは訊かないらしい。良かつた。持つべきものは大雑把な友だちだ。

「コズちゃんって、お家はあの辺りなの？」

「ううん、違うわ。もつと遠いところ」

「そつなんだ。やつこえは、中学生だつた？」

あまのひがし  
「天野東中」

わたしの答えに、タ子ちゃんは予想通り、ええっ！ と驚いた。

「天野東って、むちやくちや遠いじゃん！ 通学大変じゃない？」

「最初は大変だつたけど、もう慣れちゃつた」

「はあー。すっげえー」

「そんなん、感心するよつないじじやないよ。……あ」

ポケットのケータイが震えた。なんだりう、メールかな？

「…………えつ？」

ディスプレイを見て、そんな声を上げてしまった。メールじゃなくて着信だった。しかも、表示された名前は『嶋良次』。な、なんで嶋くんが電話を？ とりあえず、出なきや。

「はい、もしもしひ」

やば、ちょっと歎んだ。

「もしもし、川口か？」

「う、うん。ただけど」

返事しながら、あれ？ と思つ。嶋くん、なんだか焦つてゐるよな声だった。

「今日、朝練のあとに部室に行つた?」

「行つてないけど」

「そつか……。ありがと。じゃあ」

「あ、ちょっと待つて!」

電話を切ろうとするのを、慌てて引き止める。明らかにいつもとは様子が違つた。

「どうしたの? なんだか焦つてるみたいだけ?」

「ああ、実は……。……がなくなつたんだ」

「え? 『ごめん、もう一回お願ひ』

電話口の声はかなり小さかつた。わたしは必死に耳をます。嶋くんはもう一度、さつきと同じ『ぐらぐら』の大きさで言つた。

「ミッチーがなくなつてるんだ。今朝、ナカムラスポーツから取つてきたあと、部室に置いておいたのに」

3

電話を切つたあと、わたしは全力疾走で特別教室棟の玄関前に向かつた。コンクリ四階建ての入り口、突き出した二階のベランダのおかげで大きい日陰ができるそこには、約束したとおり嶋くんが立つて待つ正在してくれた。

「どういづ」となの、嶋くん

息を整えてから、わたしは話しかけた。

「ミッチーがないって、誰かに盗まれたつてこと?」

「いや、まだそつとは言い切れない」

少しこそめの声。特別教室棟の前には売店があつて、通行人が多いからだろ。

「誰かが休み時間に部室に来てミシットを発見して、教室に持ち帰つたつてこともある」

「ええ? そんなことある人、いる?」

「……可能性としては、ゼロじゃないよ」

少しつつむき氣味にそつ答える。そつ考えてるつてこつよつは、そつあつてほしいと願つてゐるよつな言い方だつた。

胸が痛くなる。嶋くん、かわいそんに……。せつかく楽しみにしてたキヤツチャーミットが手に入つたのに、こんなどになつちやうなんて。わたしはここの一件が、盜難じやなくて誰かの間違いであつてほしいと心から思つた。

「じゃあ、みんなにメールしてみる? 誰か部室からミシット持ち出してませんかつて」

「いや。それよりは、職員室で鍵の貸し出し名簿を見たほうが早いよ」

「ああ、そつか。だからこひで待ち合わせにしたのね」

部室の鍵を借りるときは名簿に名前を記入しないといけない。つまり、それを見れば朝練のあとに部室に行つた人がいるかどうかわかる。嶋くん、焦つてるよつに見えたけど冷静だ。

特別教室棟に入り、階段を上がつて一階の職員室へ。入つてすぐ左手の壁に教室の鍵や部室の鍵がかけられている。その下には台があつて、鍵の貸し出し名簿が置かれている。

七時三三一分、自習室。七時三十五分、サッカー部部室。……つづいてふうに、ホームルームが始まる前は、部室の鍵か自習室の鍵が持ち出されていることがほとんどだった。ちなみに、野球部の朝練が始まる午前七時にはまだ特別教室棟が開いておらず、当然、鍵を借りることもできないので、野球部の鍵は夜は返却せず、一年生が管理することになっている。

それでも、朝練後はきつちりここに返却してるから、そのあと誰かが借りれば記録が残つてゐるはず。視線を落とし、朝練以降の時間帯の記録を追つていぐ。誰か、野球部の部室の鍵を借りた人はいないか……。

「あつ」

嶋くんが声をあげた。そのまま、人差し指を名簿の真ん中の辺りに置く。

「見て、これ。部室の鍵が借りられてる」

十時一六分、野球部部室。借りた人は……

「……藤井い？」

思わず声に出してしまった。利用者欄に書いてあつた名前は、世界一のKYYヤロー、藤井一樹。

嶋くんもこれには苦笑いで、

「……一樹なら、部室に行つて新しいミットが置かれてるのを見ると、持ち出すかもな」

「さうね。想像できるわ……」

「誰かが藤井の名前を書いて、鍵を借りたってことだよ……」

「ああ、なんだこれ、カツコイー！ 部活のときに元に戻せば大丈夫だろ？」「しばらくおれが持つとこりつー！」

「こんな感じの頭の悪いノリで、ミシートを鞄にしまつ藤井がはつきり頭に浮かんでくる。どんなだけいりとことをすれば気が済むんだ、あいつは……。」

呆れつつ、もう一回名簿を横田で見る。十時一六分、野球部部室、藤井カズキ。

「あれ？ おかしこぞ、これ。藤井が鍵を借りた時刻は十時一六分。つてことは、一限田の休み時間だ。でも、あのとき藤井は

「嶋くん、待つて」「ん？」

職員室から出ようとする嶋くんを引き止める。

「これ、おかしこよ。藤井は一限田の休み時間、教室から外に出てないの？」

「やうなのだ。一限田の世界史の宿題をやつてないとかで、必死にプリントを解いていた。あのとき藤井は、ずっと教室にいた。鍵を借りに職員室に行くのは不可能だ。

「じゃあ、これって……」

信じられない、と云ひきつた表情で、嶋くんが名簿を見る。わたしの頭はほとんど無意識に動いた。

声に出して初めて、これはちょっとめずらしくないかと思  
識が芽生えた。

」の章に出て来る、「保田俊一」という選手は実在しません。

「……ああ、わかった。サンキュー、一樹」  
電話を切ると、嶋くんは普通よりも二倍ぐらい濃いブラックコー  
ヒーでも飲んだかのような顔でかぶりを振つた。

職員室で名簿を見たあと、わたしたちは特別教室棟の玄関前に戻  
つた。なにか特別な理由があつたのかもしれないと藤井に電話をか  
けてみたけど、そんなことはなかつたらしい。

「川口の言つとおり、一樹は一限目の休み時間は外に出てないし、  
誰かに自分の名前を名簿に書かせた覚えもないそうだ」

「そつか。じゃあ、キャッチャー・ミットは……」

わたしが口にすると、嶋くんが続く言葉を引き取つた。  
「盗まれたつてことになるな」

わかつてはいたことだけど、はつきり口にされるとずしりと心が  
重くなる。公星高校で盗難事件が発生。しかも、野球部でだ。わた  
しはため息をなんとか飲み込み、嶋くんに言つ。

「先生に連絡した方がいいよね？ 野村先生、職員室にいるかな  
」「いや、ちょっと待つて」

歩き出そうとしたところを引き止められた。わたしに見上げられ  
ると、嶋くんは少しのあいだ視線を泳がせたけど、すぐに意を決し  
たように口を開いた。

「この昼休みのあいだだけでいいから、俺たちだけで犯人を捜さな  
いか？」

言葉の意味を理解するのに、少し時間が必要だつた。

「えーっと……。それって、先生たちには内緒にするつてこと?  
まずいよ」

「まあ、いってことは俺だってわかつて。だから昼休みまでなんだ。

それ以上先生たちに黙つてるのは、さすがに無理だから

「嶋くんの意図がわからず、首を傾げてしまう。

「じゃあ、なんで昼休みのあいだは自分たちで捜そつなんて思うの？ 連絡するなら早いほうがいいじゃない」

「……考えてみてくれ。わざわざ一樹の名前を騙つたつてことは、一限目の休み時間に部室の鍵を借りた人物がミットを盗んだ可能性が高い」

「それは知つてるけど……」

「それで、思いだしてほしいんだけど、あの名簿に書かれた一樹の名前は、書き直された形跡はなかつたよな？」

さつき見た光景をもう一度頭の中で再生する。

名簿に書かれた名前は『藤井カズキ』。最初見たとき、藤井のやつ自分の名前ぐらい漢字で書けよと思ったけど、いまにして思うと、犯人は『一樹』の字がわからなかつたからカタカナにしたんだ。でも、それ以外にはとくに目立つところはなく、一度書いたものを消しゴムで消して、もう一度書き直した様子もなかつた。

「確かに、消しゴムを使った跡とかはなかつたね」

「だろ？ つまり犯人は、部室にミットが置いてあるのを知つていた人物つことになる」

「はい？」

思いつきり話を省略された。『ごめん、と一言謝つて、嶋くんは早くで説明を始める。

「なんとなく部室に行つたら欲しかつたミットがあつて、つい盗んでしまつた、つていうんじや、最初に自分の名前を書いて、そのあとに証拠隠滅のために一樹の名前に書き直すだろ？ でも、この犯人は最初から一樹の名前を書いている。つまり、これから部室に行つてミットを盗むから、自分の名前を残しておくのはまずいと判断したんだよ」

ああ、そつか。確かに、名簿に他人の名前を書くなんて、これから後ろめたいことをする人しかしない。つまりこの盗難は、突発的

なものじゃなく計画的なもの變成になる。だけど、一つだけ疑問があつた。

「でも、嶋くん。ミットを盗むのが目的で鍵を借りたとは限らないんじゃない？ なんでもいいからとりあえずお金にならそうなものを盗むのが目的だったって考えれば、部屋にミットがあるのを知らない人でも犯人になると思うんだけど」

「それはないよ」

びっくりするぐらいの即答だった。どうして、とわたしが訊くと、嶋くんはポケットから千円札を一枚取り出した。

「これが、ミットのあった場所に置いてあつたんだよ。他の部員が落としたのかもって思つてたけど、名簿に名前がない以上、それはない。だからこれは、犯人が置いていったものだ」

「は、犯人がお金を？」

そんな。盗難しておいて、代わりにお金を置いていく泥棒なんて聞いたことがない。

「お金が目的なら、そんなことはしないだろ？」

「それはそうだけど……」

言いながら、わたしは嶋くんの手に握られた一枚の千円札に目をやる。毎日のように目にする、野口英世の描かれたお札。

思わず眉を寄せてしまつ。

「……これつて、弁償のつもりなのかな？」

「たぶんね」

ミットを盗んで、代わりに一千円を置いていく泥棒か……。いろいろと考えたいこともあるけど、いまは後回しだ。

「お金が目当てじゃないっていふのは、わかつた。でも、キャッチャーミットが部屋にあることを知つてた人つて、何人ぐらいいるのかな？」

「そう、それなんだけど。川口、誰かに俺のキャッチャーミットのこと話した？ 野球部じゃなくてもいいから」

「話してないよ」

基本的に、わたしが教室でまともに喋るのはあかりだけだ。そのあかりが野球部なんだから、ミシトのことは話しようがない。

嶋くんは安心したように小さく笑い、

「よかつた。じゃあ、だいたい三人に絞られる

「三人？」

「うん。一人目は、今朝、俺と川口と一緒にナカムラスポーツの前で信号待ちをしていた女子生徒。あの距離なら俺たちの会話が聞こえていたはずだ」

わたしたちの近くで信号待ちをしていた女の子を思いだす。あの子には見覚えがあるから、顔を思いだすのは難しくなかつた。

「わたし、あの子のこと知つてる。話したことはないけど、瑞樹の友だちよ」

一昨日の部活中、渡り廊下で雨宿りをしてるとき、瑞樹は通りかかったあの子に話しかけていた。確か、『ナオ』と呼んでいたはずだ。

「ほんとか？　じゃあ、武田に聞けばあの子のクラスとかわかるんだな？」

「うん、そうだと思つ」

けつこう親しそうに話してたし、クラスメイトの可能性も高い。脇を人が通つたから、少し声をひそめて嶋くんに尋ねる。

「で、嶋くん。ミシトのことを知つてゐるあの二人は誰なの？」

「あの二人は、俺の友だち。野球部じゃないからいいかなと思って、一限目の体育のとき、つい話しかつたんだよ」

嶋くんの友だちね。体育は男女で別れるから、二人とも男子だ。ナカムラスポーツの前で信号待ちをしていた女子生徒。嶋くんの友だちの男子生徒が一人。

わたしは頭の中で、もう一度再確認した。

「嶋くんの言つとおりだね。可能性が高いのは三人。……でも、どうして？」

一つだけ、まだわからないことがあった。顔を上げて嶋くんを見

る。がつちり視線がぶつかるのは少し恥ずかしかったけど、いまは気になる気持ちのほうが強かつた。

「どうしてそれで、犯人を自分たちで捜そなんて言つたの？ 確かに、三人だけなら頑張ればなんとかなりそうとは思つけど……」  
わたしが好きになつた人は、自分で犯人を見つけたほうがカッコいいから、なんて理由でこんなことは言わないはずだ。わたしは彼女でもなんでもないけど、それだけはわかる。そんな人だから、わたしはたくさんさんのリスクを犯してでも公星に来ようと思つたのだ。  
嶋くんは迷うように口ごもつたけど、それは一瞬のことだった。  
「嶋くんは迷うように口ごもつたけど、それは一瞬のことだった。  
なにかを決意したような顔で、はつきりとこう言つた。

「俺、この犯人はそんなに悪いやつじゃないと思うんだよ。あの一千円のこともあるし、部室もまったく荒らされてなかつたし。だから、できるなら穩便に済ませたいんだ。もし俺の友だちが犯人だつた場合は、ちゃんと自分で話がしたいし……。先生にばれるとさ、そいつも、色々と気に病んだまま学校に来なきやならなくなるだろ。  
……俺は、そんのはいやなんだよ」

声こそ小さいけど、最後の一言には力がこもつていた。  
「きつと、ミットを盗んだのはなにか魔が差したからとか、そんな理由だと思つし……あの、川口？」

じらえられず下を向いたわたしに、嶋くんが戸惑つたような声をかける。こつそり田元を拭つてから、わたしは顔を上げた。  
「うん、そうだね……。わたしたちだけで済ませたほうが、きっといいもんね」

精一杯笑顔を作つて答えた。大丈夫かな、と思つたけど、嶋くんもほつとしたように笑つてくれた。

「ありがとな。……笑われたかと思つたよ  
「そんな、笑うわけないじやん！」

慌てて首を振る。さつきの嶋くんの言葉を笑うつがいたら本気で殴つてやりたい。

嶋くんはケータイを取り出して、時間を確認した。わたしも同じ

ようには腕時計を見る。昼休みはあと三十分弱だった。盗難の犯人を見つけるのに平均してどのくらいかかるか知らないけど、決して余裕があるわけじゃないことはわかる。わたしと嶋くんは、顔を見合させて頷いた。

「まずは、武田に会いに行こう」

「うん。あの女の子のことを聞かないよね」

瑞樹のいる一年一組は教室棟の四階。特別教室棟の一階から伸びる渡り廊下を通るのが最短ルートだ。わたしたちはもう一度特別教室棟に入り、階段を上がった。

「でも、体育のときに友達に話すなんて、嶋くんは相当リラックスのことが楽しみだつたんだね」

階段の途中、わたしは嶋くんに話しかけた。

「ああ。我慢できなくて、つい。クラスも違うし、そいつらはあまり言いふらすタイプじゃないから、大丈夫かなって」

「へえ、そうなんだ。その友だち、なんて名前なの？」

「川口も知ってると思うよ。一人は、五組の西<sup>にし</sup>つてやつ。サッカー部でキーパーやってる」

キーパーの西くん。聞き覚えがあつた。シートを止めきれず、しつかりしろ、と怒鳴られているのを何回か見たことがある。

わたしは耳たぶのあたりに手を置きながら訊いた。

「もしかして、ちょっと髪が長い人？」

「そう、そいつそいつ」

「嶋くん、あの人と仲いいんだ。なんか意外」

髪型のせいかもしれないけど、西くんはなんとなくチャラそうな人に見える。嶋くんがそういう人と話すイメージはあんまりない。

「いや、普通にいい奴だし、真面目だよ。いまは腕を怪我して一段どおりの練習はできないけど、基礎練は欠かさずやってるし、家に帰ると練習試合のDVDAばかり観てるらしいし」

「へえー、めちゃくちゃ意外。でも、だから嶋くんと気が合つんだね」

「……そらかむ。会えればだいたい、部活のこと話してるし」「ふふ、やっぱり。で、もう一人のミシットのことを知ってる友だちつて誰？」

声が高くなっているのが自分でもわかつた。

そんな場合じやないつて自覚はあるけど、このときのわたしは、ぶつちやけ、浮かれていた。さつきの嶋くんの言葉がうれしかったのだ。浮かれすぎて、昼休みに嶋くんと一人で歩くのを恥ずかしいと感じることもなかつた。

だけど 。

「そいつも五組だよ。熊代っていうんだ。……あ、そういうえば、川口は中学が一緒だよな？」

そんな気持ちは、一瞬で吹き飛んだ。

5

わたしたちと一緒に信号待ちをしていた女の子は、長谷川奈央ちやんといった。

瑞樹を訪ねて一年一組に行くと、思ったとおり彼女もクラスメイトだつた。いまは机に突つ伏して眠つている。

「ナオとは気が合つみみたいで、同じクラスになつてすぐ仲良くなりました」

先輩一人に廊下に呼び出された瑞樹は、嫌な顔一つせず長谷川さんこの話をしてくれた。

「つてか嶋先輩、ナオのこと知らないですか？ 小学校も中学校も同じですよ」

「え、そうなのか？ ゼンゼン知らなかつた」

「まあ、ナオは帰宅部だつたらしいから、接点が無かつたんでしょうけど」

「たぶんそれだ。ところで、どうして長谷川さんは寝てるんだ？」

体調崩して、保健室にでも行ったのか？」

「いえ、行つてないですよ。なんかバイトで疲れてる感じで、お昼食べたらすぐ寝ちゃいました」

わたしたちの質問攻めに、さすがにおかしいと思つたのか、瑞樹の眉が少しだけ上がつた。

「先輩たち、なんで急にナオのことを？」

「わたしは事前に用意していた言い訳を素早く述べる。

「柔阪高校の一年生にね、長谷川さんにそっくりな選手がいるのもしかしたら兄弟かなあと思つて」

「ナオに？ いえ、弟はいますけど、お兄さんはいないですよ」

「えー、うそ。一限目の休み時間に化学室から出でくる長谷川さんを見たら、すつこいそっくりだつたんだけどなあ。横顔だつたからかしら？」

ちなみにこれ、真つ赤な嘘だ。一限目の休み時間は教室であかりと喋つていた。

「化学室つて……。あたしたち、一限目は国語でしたけど」

「あれ、そうなの？ おかしいわね。じゃあ一限目の休み時間、長谷川さんはずっと教室にいたの？」

「いませんでしたよ。家に置き忘れたプールセットをお母さんが届けに来るからつて言つて、鞄持つて出て行きました。お母さんが来るのが少し遅れたみたいで、遅刻ぎりぎりに帰つてきましたけど」

長谷川さんの席に目を向ける。机の横には、運動部が持つような大きいエナメルバッグがあつた。確か、朝もこのバッグを肩にかけていたはずだ。プールセットはその中に入つているんだろう。

もう一つ、気になることを尋ねる。

「お母さん、どんなだつた？ 長谷川さんに似てた？」

「わかんないです。ナオ、一人でさつさと行つちゃつたんで」

「そつなんだ。てか、化学室から出てきたのは長谷川さんじやなかつたみたいね。ごめん瑞樹。あと、恥ずかしいからわたしがこんなことを言つてたのは長谷川さんに内緒にしてね。じゃ、また部活で訊きたいことはぜんぶ訊いたから、早く次へ行こう。そう思つて

歩き出したわたしのシャツを、瑞樹が掴んだ。

「まずい。いまのやりとり、さすがに不自然すぎた？」

そんな考えが頭をよぎったけど、瑞樹が尋ねてきたのはまったくべつのことだった。

「なんで嶋先輩と一緒になんですか？ 普通、冒練してますよね？」

「ああ。なんだ、そのこと」

「なんだ、じゃないですよ！ なんで一人一緒になんですか？」

「なにかを期待してるように感じた。けど、瑞樹が望んでいるような答えを返すことはできない。」

嶋くんが先に階段のほうへ歩いていったのを確認してから、答える。

「たまたま廊下で会つたら、嶋くんも気になるつて言つから一緒に来ただけ。今日は疲れてるから冒練は休んだんだって」

「えー、そうなんですか。残念だなあ。昨日の帰りにいい雰囲気になつて、そのノリで一緒にお昼でも食べたのかと思いました」

「そこまでは、まだね……」

実際、いまの状況はそんな甘い雰囲気とは真逆と言つてもいい。

「じゃあ、もう行くね。また部活で」

時間もないし、いつまでも立ち話をしてるのはまずいと思つて、ちょっと強引に話を切る。冷たいとも言える対応だったけど瑞樹は嫌そうな顔はせず、部活のときに昨日のこと聞かせてくださいねー、と言つて手を振つてくれた。ほんと、いい後輩で助かる。

嶋くんは階段の辺りで待つてくれた。手にはケータイ。なにか文字を打ち込んでいる。

「ごめん、待たせちゃつて」

「ううん。けつこう色々聞けたね」

「うん。あんなにうまくいくとは思わなかつた」

長谷川さんがミットを盗んだ可能性があるとはいえ、まさか本人を直接問いただすわけにはいかない。だから、長谷川さんが一限目の休み時間になにをしていたかをさりげなく瑞樹に訊こうと計画し

ていたんだけど、こんなにスムーズにいくとは。

「それから、いま二分の一ぐらいからメールの返事が来たけど、誰も入ってないって」

「そつか……」

つい、声が暗くなつてしまつた。

嶋くんの言うメールとは、さつき野球部に一斉送信したメールのことだ。内容は、「今日の朝練以降に部室に行つた人はいないか?」というもの。これで、部室に行くと忘れ物らしいミットがあつたので持ち帰りました、面倒なので名簿には記入しませんでした。なんて人が出でくれば一番いいんだけど、そつはいかないみたいだ。

「あと、これ見て」

嶋くんがケー・タイを見せてくる。『一、国語 二、数学 三、体育 四、日本史』。

「時間割? もしかして、一年一組の?」

「そう。黒板の隣に時間割表があつたから」

「なんでそんなの?」

「どの休み時間にミットを盗む余裕があつたのかを考えるために、部室の鍵が借りられたのは一限目の休み時間だけど、ミットが盗まれたのも一限目の休み時間とは限らないから」

「あ、そつか」

いまの今まで思いつかなかつたけど、一限目の休み時間に鍵を借りて、次の休み時間にミットを盗みに行つた可能性もある。貸し出し名簿には鍵を借りるときの時刻を書く必要はあつても、返却したときの時刻を書く必要はない。だから、部室の鍵がいつ返されたのかわからないのだ。

嶋くんが階段を下りる。わたしもそれについていく。

「ミットが盗まれたのは、一限目の休み時間から昼休みに俺が部室へ行くまでのあいだと考えていいと思う。でも長谷川さんの場合、三限に体育があるから、その前後の休み時間は行動できないんだよな

「そうね。プールだと着替えるのに時間がかかるし」

体育着なら頑張れば三十秒もしないうちに着替えられるけど、水着はさすがに無理だ。わざわざ水着を届けてもらつて見学したつてことはないはずだから、長谷川さんはプールに入つたと考えていいだろつ。

つまり、部室へ行くチャンスがあつたのは、一限目の休み時間と昼休みだけってことか……。

二階に着く。階段の辺りで立ち止まると邪魔になるから、廊下の端に移動して、話を続ける。

「ただ、昼休みに盗んだつていうのはちょっとと考えづらいんだよな。俺が部室の鍵を借りに行つたのは、昼休みが始まつて四、五分後なんだ。そのときにはもう鍵は返されていた。つまり、昼休みにミットを盗むには、最初の三分ぐらいで部室からミットを持ち出し、その後、俺が来る前に鍵を返さないといけない。これはちょっと厳しいんじゃないかってさ」

「……そうね。確かに難しい」

教室棟から部室棟まで、急いで一分はかかる。そして、部室から職員室まで行くのはだいたい一分半。移動だけでこれだけかかるのに、勝手の知らない野球部の部室に忍び込み、ミットを盗むのは、かなり難しい。それよりは、一限目の休み時間に鍵を借りてそのまま部室に行つたと考える方が自然だ。

「唯一のチャンスがあつた一限目の休み時間に、長谷川さんはアリバイがないのよね。なんか怪しくない？ プールセットを忘れたつていうのも本当かわからないし」

ナカムラスポーツ前で信号待ちをしていたとき、長谷川さんはあのエナメルバッグを肩にかけていた。あれなら教科書と筆箱、それに、プール道具一式も余裕で入る。

「バッグに入つてるプールセットを誰にも見せず、家に忘れたつて言つておく。それで、一限目の休み時間にお母さんが届けに来たと嘘をついて部室に行つてミットを盗み、教室に戻る。こうすれば、

「どうにかできそうじゃない？」

嶋くんは軽く頷き、

「それだけで確定つてわけじゃないけど、いちおう、チャンスがあつたつていうのは覚えておいたほうがいいな。あのバッグなら、事前に教科書を出しておけばミシストも入るだらうし。……じゃあ、俺は五組に行つてみるよ」

ぎくつとした。覚悟はしてたけど、つここののときが……。

嶋くんが五組に行くのは、もちろん、熊代くんに話を聞くためだ。いや、正確には熊代くんと西くんに、だけど、そんな細かいことはどうでもいい。

嶋くんと熊代くんが話をする。それだけで、わたしはビビりようもなく不安になつてしまつ。一年一組に向かう途中も、嶋くんはいろいろと話をしてくれたけど、一人は世界史の授業でも一緒に、メアドも交換してくるらしい。

「二人で行くのも変だから、川口はここで待つてくれ」

「うん、わかった」

そのまま、すぐそこにあつた五組の教室に入つていいく。わたしはガラス越しに教室の中を見た。

教壇に座つてお弁当を食べている三人組がいて、その中に熊代くんも混じつてゐる。教卓の上には、誰のかわからないけど、ふたが開けられた特製大盛り牛丼。嶋くんはまつすぐ教壇に行き、熊代くんと話をする。

その光景を見るだけで、わたしは気が氣じゃなかつた。特に、熊代くんがなにか言つときは唇の動きを懸命に追つてしまつ。

そういえば、野球部のマネージャーに川口つてゐるだろ？ 知つてるかもしれないけど、あいつつてさ……。

物事を悪い方に考へるのはわたしの悪い癖だつてわかつてゐけど、熊代くんがそんなことを言つてるんじゃないかという不安が消えない。

しばらく熊代くんと喋つたあと、嶋くんはその右隣に座つてゐる

男子に話しかけた。その人がベランダを指差す。見てみると、西くんがベランダの手すりに体育着を干していた。腕を怪我していると嶋くんが言ったとおり、左腕にはギプスをしている。

嶋くんがベランダに行く。西くんは、嶋くんを見ると苦笑いで体育着を指差した。干しているといつことは、なにかで汚れてしまつて、洗つていたのだろう。

西くんとしばらく言葉を交わして、嶋くんはベランダをあとにした。そのまま教室を横切つて、わたしのいる廊下まで戻つてくる。また熊代くんと話をしたらどうしようかと思つていたわたしは、ほつとして思わず大きく息を吐いてしまつた。

「どうした？ そんなに大きいため息ついて」

「あ、うつん。なんでもない。ところで、どうだつた？」

嶋くんは周りを見渡して、小さい声で言つた。

「ううじやあれだから、特別教室棟の前で話そひ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9558v/>

---

リバース・シンデレラ

2011年11月30日21時49分発行